

40th 新宿区
Anniversary of the
Shinjuku Peace City Declaration

新宿区平和都市宣言
～40周年記念誌～

ふくみ

未来に残す
戦争のこと



新宿区平和都市宣言

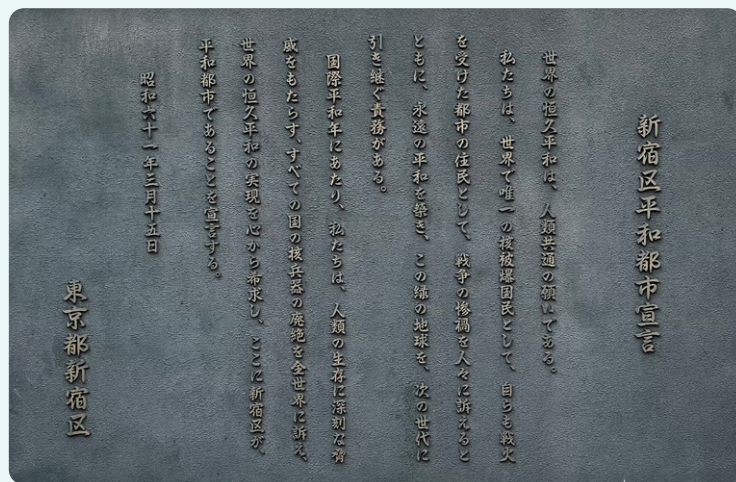
世界の恒久平和は、人類共通の願いである。

私たちは、世界で唯一の核被爆国民として、自らも戦火を受けた都市の住民として、戦争の惨禍を人々に訴えるとともに、永遠の平和を築き、この緑の地球を、次の世代に引き継ぐ責務がある。

国際平和年にあたり、私たちは、人類の生存に深刻な脅威をもたらす、すべての国の核兵器の廃絶を全世界に訴え、世界の恒久平和の実現を心から希求し、ここに新宿区が、平和都市であることを宣言する。

昭和61年3月15日

新宿区



宣言記念板

新宿区平和都市宣言 40周年記念誌の発刊にあたって



新宿区は、すべての国の核兵器廃絶と世界の恒久平和を願い、昭和61年3月15日に平和都市宣言を行いました。この度、平和都市宣言から40年の節目を迎えました。

平和都市宣言には、自らも戦火を経験した都市の住民として、戦争の惨禍を人々に訴え、永遠の平和を築き、次世代に引き継ぐことが私たちの責務であると記されています。

戦後80年が経過し、戦争は昔の出来事で自分とは関係ないと感じている人が増えているのではと不安になる時があります。そして、実際に戦争を体験された方々が年々少なくなっている中、具体的な戦争体験談集を編纂し、次世代に継承しなくてはならないと考え、戦争体験談集を作成しました。

体験談集の作成にあたっては、多くの戦争体験者から証言を募り、70名以上の貴重な体験を収めることができました。お寄せいただいた体験記には、出征時の様子や空襲の恐怖、当時子どもだった体験者の学校生活、学童疎開の様子、食事、感情、未来の子どもたちへの思いなどが語られています。

この戦争体験談集は、次の世代を担う若い世代が学び、感じ、継承しやすいようデジタル版で作成しました。また、戦争体験者が当時の様子を語る映像もご覧いただけるようにしました。ぜひご活用いただき、次の世代へも継承していただけますよう心から願っております。

今後も区は、すべての国の核兵器廃絶を訴え、世界の恒久平和実現に向けて平和の啓発普及活動に取り組み、世界に向けて平和の大切さを発信し続けます。

ここに、貴重な戦争体験を語り綴^{つづ}ってくださった方々、そしてこの記念冊子の発行にご協力いただいた皆様に、あらためて感謝申し上げます。

令和8年3月15日
新宿区長 吉住 健一

もくじ



新宿区平和都市宣言	2
新宿区平和都市宣言40周年記念誌の発刊にあたって 新宿区長 吉住 健一	3

特集

映像で見、感じて、考えて、つなぐ 戦争のこと	7
------------------------------	---

「画像」にタッチして、YouTubeへGO！	
「名前・タイトル」にタッチして、掲載ページへGO！	8

空襲

東京大空襲体験講話 亀谷 敏子	9
体験したからわかる戦争の怖さ 東城 茂男	14
戦争のない平和な日々が続くことを願って 渡辺 芳子	16
2度の空襲に遭遇して 山本 誠	17
私の戦争体験 宇田川 典文	18

軍隊

今まで話せずにきた戦争体験！ 近藤 伸一	19
----------------------------	----

戦時・戦後の暮らし

今まで話せずにきた戦争体験！ 近藤 滋子	22
----------------------------	----

疎開

東京の空を眺め、会いたいと思った両親 植松 英子	24
学童疎開と終戦直後の暮らし 井上 陽一	25

勤労働員

戦争下にあった学生生活 五十嵐 政枝	27
--------------------------	----

第 1 章

戦争体験者が語る 戦争のこと	28
----------------------	----

空襲

消えない記憶「また、あした遊ぼうね。」 二瓶 治代	29
東京大空襲を体験して 本間 百合子	32

引揚者の体験

姉妹二人公主嶺からの引き揚げ 土屋 洸子	34
残留孤児としての経験 猿田 勝久	36

シベリア抑留

語らずして死ぬるか 酷寒のシベリア抑留3年の体験談	西倉 勝	38
---------------------------	------	----

被爆体験

奇跡的に助かった命	吉濱 幸子	44
争いのない世界を目指して	瀬木 正孝	47
最後の被爆者になること	石原 智子	49

第2章

今までの記念誌と一緒に振り返る 戦争のこと 51

空襲

戦中・戦後 あれこれ（思い出すままに）	堀尾 慶治	52
---------------------	-------	----

軍隊

戦争は勝ち負けなどではない	太田 寿夫	53
---------------	-------	----

疎開

学童疎開の思い出	管野 晃	55
学童集団疎開	眞鍋 重命	56
疎開時の苦労が戦後の私の礎に	大崎 秀夫	57
忘れられない疎開先での出来事	大森 保	58

勤労動員

「銃後」の戦争体験	大竹 良重	60
学徒動員	宮崎 玲子	61

戦時・戦後の暮らし

当時の教育方針と戦後の想い	矢島 明廣	63
平和への課題	辻 彌太郎	64

戦争を体験して

ハングリー精神が、日本を変えた	百溪 文枝	66
愚かさが判らない困った人たち	中島 悦子	67

第3章

40周年記念企画 私たちがまだ知らない 戦争のこと 68

空襲

B29爆撃機による空襲で生活が急変	寺尾 綾子	69
戦中を新大久保で生きて	久保田 幸子	70
私の戦時中における被災体験	葛岡 信男	71
忘れられない記憶「東京大空襲」	大巻 正子	72
わたしの戦争体験	丸山 順子	73
キャンデーの思い出	森田 千秋	75

東京大空襲 5月25日	天野 竹子	76
高松市（香川県）の空襲の時	桑島 裕武	78
太平洋戦争時代の記憶	榊原 正善	79
サイレンの音	多田 昌子	80
戦争中の思い出	福永 尚子	81

軍隊

戦争実録についての話	高杉 信美	82
------------	-------	----

疎開

爺の戦争体験と平和への願い	小林 昌仁	83
学童疎開の日々	山口 光子	84
泣きながら別れを惜しんだ学童疎開	山崎 金也	85
風香の浅間の麓へ疎開	金澤 誠	86
私の少年時代	竹内 保幸	87
諏訪（長野県）からも見えた東京空襲の赤く染まった空	大西 好子	88
疎開先での思い出	西川 和子	89
学童疎開を語る	芳川 雅信	90
私の戦争体験記	碓井 達彌	91
戦時・戦後を生きて	羽原 清雅	92
あとほんの少し、戦争が早く終わっていたら	須田 幸子	94
罪のない子どもたちのためにも、戦争は二度としてはいけない	藤村	95
体験を人生に生かす	神山 清英	96
戦時中の記憶から	栗原 靖道	98

勤労働員

自由をあきらめざるを得なかった	清水	99
私の戦争体験記	塩野 時枝	100
忘れもしない、1945年7月28日	森永 節子	101
私の戦争体験記	矢屏 昭治	103

引揚者の体験

引き揚げの生活	首藤 純子	104
戦争と私～引揚者として暮らして	中山 ヤエ	106

長崎原爆

原子記録 旧制中学校1年生の記録	江口 太助	107
------------------	-------	-----

戦時・戦後の暮らし

学生時代の戦争の記憶	後藤 佐吉	108
戦争で諦めた進学	冥賀 令	109
ただただ安堵した終戦の知らせ	堀越 美枝子	111
防空頭巾をいつもそばに置いて	森田 やす	111
子どもの戦争体験	池永 珠子	112
戦争を言葉だけで伝えるのは難しい	榎本 雅一	113
ノーモア戦争	渡邊 金子	114
食べるものがなく、自給自足の生活	森田 ヤス	115
一つひとつの食べ物が大切でありがたいものでした	桐生 清人	116
私の戦争体験	梶原 安臣	117





映像で見ても、感じて、考えて、 つなぐ 戦争のこと

戦争を体験した方々の証言は、平和の尊さを次の世代へ伝える貴重な財産です。区では区民の皆さんの協力のもと、戦争体験者が、自らの言葉で語った戦争のことを映像に記録してきました。語りの一つひとつが、私たちに平和の尊さを優しく教えてくれます。本章では、平和の大切さをあらためて考えるきっかけとなることを願って、映像とともにその言葉をお届けします。





映像で見て、感じて、考えて、 つなぐ 戦争のこと



「画像」にタッチして、YouTubeへGO！



「名前・タイトル」にタッチして、
掲載ページへGO！



亀谷 敏子さん
東京大空襲体験講話

➡ P9



東城 茂男さん
体験したからわかる
戦争の怖さ

➡ P14



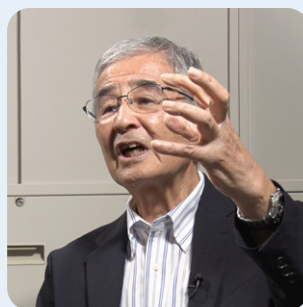
渡辺 芳子さん
戦争のない平和な日々が
続くことを願って

➡ P16



山本 誠さん
2度の空襲に遭遇して

➡ P17



宇田川 典文さん
私の戦争体験

➡ P18



近藤 伸一さん
今まで話せずにきた
戦争体験！

➡ P19



近藤 滋子さん
今まで話せずにきた
戦争体験！

➡ P22



植松 英子さん
東京の空を眺め、
会いたいと思った両親

➡ P24



井上 陽一さん
がくどう そ かい
学童疎開と終戦直後の暮らし

➡ P25



五十嵐 政枝さん
戦争下にあった学生生活

➡ P27

▶ 東京大空襲体験講話



かめ や とし こ
亀谷 敏子さん
文京区向丘在住
終戦時：13歳

私は、昭和6年11月生まれで先日93歳になりました。もう80年前になりますが、13歳、国民学校高等科1年の時に東京大空襲に遭ったわけです。その時の体験を今日は話させていただきます。

私の家族は父と母と兄、それから姉、私の下に3人の妹と弟、全部で兄弟は7人でした。あの頃は「産めよ、増やせよ、子どもは宝だ」と言って子どもが5人以上の人は、東京府と言ったのですが府知事さんから表彰されました。子どもたちは宝だから死なせてはいけないと学童疎開が始まり、私より1つ下から田舎に縁故のない子どもたちは、集団疎開で学校が一括して疎開させました。私の家は、茨城に父の実家があり疎開することになっていましたので、集団疎開はしないで済んだのです。私はその時高等科1年生で、あの頃は大人並みに扱われました。

当時の学校

学校は工場になり、そこで軍需品を作られ授業も何もなくなっていました。開戦記念日の12月8日、その時私は小学校4年生でした。「今日は重大放送があるから屋上に並べ」と言われ「本日、西太平洋において、米英と戦闘状態に入れり」というラジオの放送があったわけです。私たちは小さい頃や学校へ上がってからも軍国教育を受けて

きました。アメリカ・イギリスというのは「鬼畜だ、鬼畜生だ」と教わっていました。だから東南アジアを、みんな占領して植民地にしている悪い奴、それをやっつけるための日本は正義の戦争だということでした。私たちは胸おどらせる思いで、いよいよ日本は立ち上がったということで授業についたわけです。もう英語はけしからんということで、「ドレミファソラシド」も廃止されて、「ハニホヘトイロハ」になりました。何しろ「英語はみんな使っちゃいけない」という時代でした。ですから学校でも、授業より軍国教育の方が多くて、「兵隊さんに感謝して何かやりましょう」という風な、そんな感じの学校時代でした。

戦後の食事情

食べ物に関しては、戦時中私はそんなにひどい思いはしていないのです。

戦後、本当に餓死者がいっぱい出て、有名な裁判官の人が配給だけで生活できるかどうかと実験して、約3週間で餓死したことがニュースになったことがありました。戦後の方が本当にひどかったです。すいとも「アメリカの放出物資です。感謝していただきましょう」とそれが馬に食べさせるような、小麦粉を取った残りのふすまだけの物でした。さすがにそんな物は食べられなくて、その頃まづかったサツマイモなんか私20年ぐらい食べられなかったのです。もう本当にびしょびしょのまずいサツマイモ沖縄何号だとか、そういう物を食べていました。それでも、ふすま入りの小麦粉を混ぜて、それで焼いてやっと食べました。

すいとんも本当に塩水か何か今みたいに汁を取って美味しく、いろんな物を入れた物じゃなくて、塩水の中に浮かすような、そんなすいとんでした。さすがにまずくて食べられない感じでした。お腹だけが膨れ上がり本当に飢えていました。戦後は、疥癬だとかいろんなものができました。上野の地下道は浮浪児や復員してきた人たちが家を失くして、どこにも行き場がなく、みんな食べ物もなく、道がいっぱいでした。ですから異様な匂いがしていました。そういう時代でした。

3月10日の空襲

昭和20年3月10日、高等科1年生の時に初めて東京に夜間空襲がありました。寝て何時間かして母が、今日の空襲はひどいようだから、みんな起きて近くにあった末広味噌屋さんに避難しようと言いました。白河町で唯一のビルだったのです。コンクリートですから何かあったらそこへ逃げるようにと、避難場所にも指定されていました。私は今でも血圧が低く、夜中になると冴え冴えとして困るのですが、母にいくら起こされても、「寝ていたい、もう死んでもいいから寝ていたい」と言って、起き上がれなかったのです。そしたら母が「もうこの子はしょうがない」と言って、他のきょうだいみんなを起こして、避難所へ行くと行って出て行ったわけです。

空襲の中、父と一緒に

父はその時46歳でした。若い人がいなくて、町内の役員をやっていました。「今日の空襲はひどいようだから、味噌屋さんに避難するように」とメガホンをもって言ってまわったあと家に帰ってきました。私の家もみんな味噌屋さんへ行っただと思ったら、私がまだ寝ていたものですから「馬鹿、何してるんだ、起きろ、表はもう火の海なんだぞ」と言われて叩き起こされました。それで父と一緒に遅ればせながら味噌屋さんへ行っただけです。

味噌屋さんはもう1階まで避難町民で満員でした。今のラッシュアワーの電車じゃないですけど、ギチギチして入れなかったのです。けれど、消防団の人が、私たちは荷物がなかったものから何とかやっと2人入れてくれました。もちろん地下室もいっぱいでした。私はその頃、食糧難ですから、13歳、といってもすごく小さく、大人の間に挟まれて、何が起ってもわからない感じの子でした。後ろの方からすごい悲鳴が起きてきました。それで「お父さんどうしたの」と言ったら、「窓ガラスのガラスが溶けて、火が入ってきたみたいだ」と言うのです。ここにいたらみんな死んじゃうと、父が表のドアを開けようとした。けれど、消防団の人が「表も火の海だから、みんな死ぬから表へ行っちゃいけない」とドアを押さえました。しかし、父は「ここにいたんじゃ駄目だ」と言って強引に開けて「みんな表へ出ろ」と言い、出口近くの方は、みんな表に出たのです。私も表へ出た途端に、ものすごい火風に吹き飛ばされました。それで道端にゴロゴロと転がったわけです。父は真ん中辺まで這って行き、「こっちへ来なさい」と言いました。三つ目通り、13間道路と言われるコンクリートの道でした。その真ん中あたりに行き、そこから20mか30m先は隅田川からつながっている小名木川でした。父はそこへ飛び込むつもりでいたらしいのです。けれど向かい風で、小名木川の橋向こうからトタン板だとかいろんな物が火の粉と共に飛んできて行けませんでした。

飛んでくる火の粉を防ぎながら

飛んできたトタン板を父が持たせてくれて火の粉を防いでいました。しかし、もんぺに火がついたりして、最初のうちは父が手で一生懸命私の火を消してくれていたのですが、そのうちにそれもなくなくなったので、お父さん死んじゃったのかなって思いました。私ももうすぐ死ぬのかなと思いました。そうしたら、父が突然「こっちへ来い」と言って、

いきなり私の手を引っ張りました。向かい側に軍需工場があったのですが、その2mぐらいのコンクリートの塀の中へ私を投げ込みました。

そこでバサッと落ちた所がちょうど金のくずだとか、鉄のくずがいっぱいあって、そこへバサッと落ちたので怪我もなく、父もそこへ飛び込みました。塀の中、また、飛んできたトタン板の陰に2人でいたのですが、その塀がまた倒れてしまい下敷きになってしまいました。塀に穴を開けてもらい朝やっと出ることができました。そしたら、あの火の粉と煙で目がやられてしまい目が開けられないのです。何かにつまずく。目を一生懸命開けるとそれは死体だったのです。13間道路の幅で両側に燃える物がないような所ですから真っ黒焦げの死体じゃなくて、まだピンク色の、本当に何かやけどをした時に赤くなりますね、そういう死体がみんなゴロゴロと転がっていました。そんな死体につまずきながら、向かい側の私たちが避難した味噌屋さんを見ましたら、今の広島にある原爆ドームみたいに、コンクリートの骨組みだけになっていました。中は白骨になった人体が山になってボッポと燃えていました。とても地下室などには行けませんでした。その後家の焼け跡へ行きました。

母、姉、妹、弟を探して

父がセメント会社に勤めていたものですから、我が家の防空壕はものすごくしっかりしていました。防空壕の上に約50cmのセメントを載せて作った防空壕です。家族の誰かが無事だったら、ここに戻って来るだろうからと交代で家族を探しに行きました。私は小学校とか、消防署とかコンクリートの建物に避難している方々の所を探しましたが、家族は見つからず帰ってきました。その日は防空壕に2人座って待っていたのですが、夕方になっても誰も帰ってきませんでした。

焼け野原の深川から渋谷、新宿へ

父と2人で、いつまでもここにいられないから

と、父のセメント会社へ行きました。もしかして焼け残っているかもしれないと言うので行きましたが、会社も、もう綺麗に燃えていました。それで清洲橋のふもとに浅野セメントの本社があり、そこへ行きました。事務所は綺麗に焼けていましたが工場は残っていました。今みたいにセメント袋がビニールではなくて、あの頃は麻袋だったので、その日は麻袋にくるまって父と2人で寝ました。翌日また家族を探しに焼け跡へ行って、ずっと探したのですが会えませんでした。父の得た情報で深川の避難先は渋谷とのことで渋谷へ行くことになりました。日本橋まで歩けば、地下鉄で渋谷へ行けるからとの父の判断で日本橋まで歩きました。父の判断通り地下鉄は動いていました。3月10日の空襲で下町一帯は全部焼きつくされましたが、東京も山の手は無事でした。渋谷に着き、地下鉄から地上に出た途端、当たり前な生活が当たり前に営まれていることに新鮮な驚きを感じたことを覚えています。それから指定された国民学校へ行き、そこではじめておにぎりをいただきました。私は、本当に口もきけない魂が抜けた人間というか、そういう風になっていました。育ち盛りで、本当にお腹がすいていたと思うのですが、おにぎりをいただいても、それが美味しかったとか、まずかったとかの味も全然なく、もらったから食べるといった状態でした。それで父が「ここにいつまでいてもしょうがないから、ちょっと新宿へ行ってみてくる」と言って、母の兄一家が住んでいた新宿へ行きました。「お前はここで待ていなさい」というので、私は渋谷の小学校で待っていました。父は新宿から帰ってきて、「新宿も残っていたから新宿へ行こう」と言って新宿の伯父宅へ行きました。

そしたら、いとこたちが私のことを、ものすごく「臭い臭い」と言って、みんな敬遠したのです。1人の人が死んだって死臭が出るのに10万人もの人が死んだのですから、その死臭と焼け跡の匂いが全部、体に染みついていたと思うのです。それ

で伯母が銭湯へ連れて行ってきて、全部洗ってくれました。ここで4日間お世話になりました。

毎日、家族を探して

その後も父は、家族を探して毎日^{ふかがわ}深川に通いました。14日の日に味噌屋さんの地下室の死体を出すと聞きました。それで父は、私が口もきけない女の子になっていたのも、本当は私を連れて行きたくなかったらしいのです。けれど、やっぱり母たちが着ていた着物や何か自分じゃわからないからと、私を連れて伯父と一緒に3人で行きました。三つ目通りには、憲兵隊の車が3台ぐらい来ていて、地下室の死体がどんどん出されて並べられ、「10分間だけ死体の検閲を許す」と言われました。並べられた死体は首がなかったり、手がなかったりしていました。その中から母を探しました。そしたら、母のそばに赤ん坊だった弟がいました。母は髪の毛が全部なく丸坊主でした。一番下の弟は首から上がなくて、足首から下もなかったのです。胴体だけで見つかりました。それでも母のそばにいました。そのそばに5歳になった妹がおり、その妹は胴体だけしかなかったのです。それから10歳になった妹は、もんぺの柄でわかったのですが、腰から下しかなかったのです。というのは、あまりの暑さにきつと水道の水を、多分母が出したのだと思います。

他の人たちの死体はもうグズグズでしたけど、うちの母はわりかししっかりしていたのです。母は子どもたちにご飯をたっぷり食べさせたいと味噌屋さんに土、日だけアルバイトのお手伝いに行っていたのです。ですから地下室の水道がどこにあるかわかっていて、きつと水を出したのだと思います。水道の水が煮えくり返ってしまったのです。4日間、熱湯になり入れなかったそうです。ですから14日に死体を出した時は、やっと冷めたのだと思います。その煮えくり返って柔らかくなった死体を、今みたいに一体一体大事にする時代じゃありません。それで首がなくなったり、手

足がなくなったりしたのだと思います。

ですから、憲兵隊の人が10分間だけと言ったのは、多分手足や首などを出してもわからないだろうということで、着物でわかるように、そういうのだけを表に並べたのだと思われます。その後、死体の処理を憲兵隊がやったのだと思います。そういうことで家族4人だけが見つかったわけです。姉とすぐ下の妹は、きつと熱くて母の元を離れて1階に上がり、白骨になってしまったのだと思いました。それから私は本当に失語症になりました。それで父に田舎に連れて行かれて、預けられましたけれど、もう本当に口もきけない女の子になっていました。

田舎の伯母は3人いた息子がみんな兵隊に行き、労働する人がいなかったものですから、私は学校なんか行かせてもらえず、畑仕事だとか家の中の仕事なんかにこき使われました。女中以下の生活をやらされました。それでも私は失語症になっていましたから、反抗もできず口もきけずに言われる通りにやっていました。一番つらかったのは、靴やなんかもみんな焼けてなかったのも、裸足同様に霜柱が立っている麦踏みをやらされたことでした。それが本当につらかったです。あの頃は3月といってもすごく冷たい雪の降るような、そういう時代でした。それでも反抗できないで伯母の言う通りに従っていました。

予科練^{よ かりん}に志願した兄

私には兄がおりまして一番上の兄です。3歳上でしたが、中学2年生の時に予科練^{よ かりん}を受けたい人の応募が学校でありました。15歳以上になると少年予備学生・予科練^{よ かりん}と言って、そういうのを受けるように学校で言われました。うちの兄はものすごいワンマンでしたが、その兄が珍しく父と母に膝^{そろ}を揃えて、「どうか予科練^{よ かりん}に行かせてください」と言って頼んだのです。そしたら父や母が「あと5年待てば嫌でも徴兵^{ちようへい}で兵隊に行けるのだから、それまで我慢しろ、絶対に行かせない」

と言って許可をしなかったのです。それで応募期間中だと思いますが、母が兄を部屋に閉じ込めて外出できないように見張っていたのです。そんな時に私を呼んで、「敏子、お前、^{よ かん}予科練の応募用紙を買ってきてくれ」と言ったので、文房具屋さんで買ってきて兄に渡しました。兄は所定用紙を書いて「これをポストに入れてくれ」と言ったので、私は父母の目を盗んで入れに行きました。心の中で父母のことを非国民とののしっていましたから、兄の言う通りその応募用紙をポストに入れてしまい、兄を^{よ かん}予科練に行かせたわけです。

ですから3月10日の時点では、兄はまだ奈良の^{かいぐんこうくうたい}海軍航空隊にいたわけです。

兄との再会

それで3月31日に、今度は4月1日から^{かすみ が}「霞ヶ^{うらかいぐんこうくうたい}浦海軍航空隊」に転勤になるからと、特別休暇をもらい会いにきてくれたのです。私は「お兄ちゃんみんな死んじやったよ」と言ってしがみついて泣きました。その時初めて「お兄ちゃん」という言葉が発せられて、それから失語症が治ったのです。3月10日から3月の末まで約3週間、ほとんど口もきけない女の子になっていました。

2人家族に

しかし、その兄も3か月後の6月10日、^{つちうら}土浦の空襲で死んでしまいました。ですから私は7人兄弟がいた中で、結局1人になり父との2人暮らしになってしまったわけです。楽しい家庭も何もかもみんな奪い尽くすのが戦争です。

ですから私は、この世で戦争ほどの犯罪はない

と思っています。一晩で10万人もの、罪のない人が殺されるのが戦争です。38歳になったばかりの母の丸坊主になった姿や、妹たちの胴体だけになってしまった姿。腰から下しかなかった妹はタップダンスが大好きで、よく踊っていました。胴体だけになってしまった妹は、ままごと遊びが大好きで、お人形さんを抱いて1人でおとなしく遊ぶような子でした。

未来のある子どもたちが、みんな焼き殺されてしまう、本当に戦争ほどの犯罪はないと思います。



講演会の写真

すいとんの会（令和6年12月8日）

掲載内容は講演当時のものです。

体験したからわかる戦争の怖さ

空襲

昭和20年の5月25日の空襲は、昼間から警戒警報がありました。

新宿駅や今の高島屋の辺りは、貨物列車の線路がいっぱいあり、軍の兵器みたいなものを長野の方へ持っていくための列車に火がうつり、今の新宿四丁目の当時の旭町にも火がうつってきて新宿全土が焼けました。

私は四谷第五小学校の5年生で、山梨県の身延町に学童疎開していました。戦争が激しくなってきたので、祖母と弟が親戚の箱根に疎開していて、父が私を会わせたいとのことで、集団疎開の山梨から先生の承諾を得て、私を連れて東京へ戻り、箱根に行きました。それからうちの父が富山の生まれなので、最後に富山にも行こうとなり、ちょうど富山に行った時に、富山市が空襲に遭いました。離れていたが、一面田んぼのため、富山市の焼けた光景が間近に見えるような恐ろしさでした。東京へ帰ってきて、その1～2日後に空襲に遭いました。

父が少しでも過ごせるようにと防空壕を作り、私は、空襲に遭うたびに入っていました。その日に限って、どうもすぐに抜けるような空襲ではなく、しつこく回り、焼夷弾を落としていて、防空壕で過ごしていても危ないからと、父が私と母親を新宿御苑へ行かせることにしたので、私は母に連れられ、2人で新宿御苑に逃げました。

今でも思い出すのは、爆薬がバーン、バーンと破裂するたびに、火の粉が真っ暗な新宿御苑の夜

とうじょう しげ お
東城 茂男さん
百人町三丁目在住
終戦時：11歳



空に飛び、こちらに覆いかぶさるような感じで、しばらくは夢に出てきました。そんな怖い思いもしました。

翌日、第一劇場の建物だけが残っていました。建物が残ったのではなく、コンクリートのため、その形で残ったのだと思います。後で聞きましたが、周りの人も火の海で逃げるところがなかったとたくさんの人たちの苦難を聞きました。

5月25日の空襲があって、うち辺りの一帯、全部26日に焼けました。その5月26日が私の誕生日のため、また一つ自分には残るものになっています。思い出したくはないものです。

空襲は本当に怖かったです。新宿御苑まで母親と一緒に行って、当時の新宿御苑は普段は入れませんでしたでしたが、空襲の時は、何力所も門を開けてくれていました。あれだけ広いため、どこが開いているかわかりませんでした。町内の人と一緒にいったため、入れたと思っています。私と母だけでは難しかったと思います。

今でいう新宿四丁目一帯、三丁目一帯が高円寺の手前まで焼けて、新宿西口から見渡す限り焼け野原でした。

寝るところもないので、高円寺に親戚がいたため、今じゃ考えられないですが、そこまで歩いていきました。その間に父が焼け跡にほったて小屋

を作ってくれて帰ってきました。

今でも新宿西口を見ると、全部焼け野原だったのが目に浮かびます。

学童疎開

私は、四谷第五小学校4年生の終わりに学童疎開をしました。この辺りの小学校は、山梨県身延山のお寺の宿坊や旅館に疎開して、田中屋、山本坊、窪之坊、覚林坊など6カ所くらいありました。私は、山本坊でした。

集団疎開でいうと、色々と思い出もありますが親元を離れており、当時はどこに行ってもそうでしたが、山梨はお米が取れず、さつまいもにご飯がふりかかっているようなものでした。やはり子どもたちは、育ち盛りのため、みんなお腹を空かせており、食べ物に関しては、あまりいい記憶はありません。ただ、大勢で一緒にいたというのはなかなかできないことですからそれはそれなりの思い出はあります。

私は、母親も、父親も空襲で亡くしてませんが、友達の中には、身延町に疎開していて、両親が東京で亡くなったということもあり、辛い思いをしている友達もいました。そういう悲しい思い出があります。

戦争を知らない子どもたちに、戦争はこんなに惨めだった悲惨だというのもイメージ的には必要だと思いますが、本当にそれを目の当たりにしないとわからないものだと思います。

普通の火事であるところに逃げればいいのかわかりますが、空襲はどこに逃げればいいのかもわかりません。そういう状況の中の恐ろしさというのは、体験した者でないとわからないと思います。よく言うように、怖かったよと言っても、その怖さっていうのはやはり伝わらないと思います。

ただ、私が言いたいのは、当時は当たり前戦争があつて、まさか日本が負けるなんて、誰も子どもは思っていないでした。新宿西口から見た光景は、本当にこれでいいのかな、こんなことあるのかと思いました。焼け野原で手の打ちようもありませんでした。

夜は、電気が全くないため、真っ暗の中に焼けた炭の跡がホタルのように、遠くの方にちらちらと見えました。

子どもだからそれ以上の将来のことを考えませんでした。親にしてみれば本当にどうしたらいいかという気持ちだったと思います。

▶ 戦争のない平和な日々が続くことを願って



わたなべ よしこ
渡辺 芳子さん
終戦時：10歳



うしごめ くよこてらまち えんぶくじ
牛込区横寺町の圓福寺の四女として生まれた私が、国民学校一年生の昭和16年12月8日、第二次世界大戦が始まりました。当時は穏やかで何ん自由のない生活を送っていました。

戦争が激しくなった19年の4年生の夏、学童疎開が始まり、私もお友達と栃木県下都賀郡赤津村の龍興寺に疎開しました。蓮の花のきれいな立派なお寺でした。担任の宇賀神テツ先生はとてもやさしく、毎朝校庭で私の手を温めてくださいました。お友達も小川での小物の洗濯を手伝ってくれました。ただ家族と離れて暮らすことはとても淋しく、手紙に「帰りたい」と書くことは禁止でした。ある日“北風に 声をかけてネ お母さん 疎開している 人を忘るな”と詠んで送りました。すぐに父が迎えにきてくれ、私の3か月の学童疎開は終わりました。

その足で母と3人の弟が待つ縁故疎開先の群馬県の川俣へ向かいました。お寺の信者さんの紹介の農家の離れでした。父と姉3人は東京でした。近くに利根川が流れ、お友達と土手で遊び、おやつはいつも干し芋でした。放し飼いの鶏肉、雪の中から顔を出した小松菜、畑でカマで割って食べたスイカ、そのおいしさを今でも覚えています。ただお手洗いは外、水は井戸からつるべで汲み、ご飯も

かまどで炊いたので母は大変だったと思います。本も手に入らず、愛読書は唯一「小公子」でした。20年頃より戦争もだんだん激しくなり、3月10日夜東京方面の空が赤くなっていた光景も見えました。

4月13日と5月25日は牛込地区も大空襲に見舞われ、私の生家も4月に庫裏を含む北側が5月に南側が焼失しました。たまたま5月25日に帰京していて大空襲に遭いました。幸い大谷石の塀は崩れず残っていたので、近所の人たちと、母、姉、弟、私の4人で塀沿いにズラッと並び、うずくまって火災から身を守りました。焼夷弾の投下で矢来方向の木造の家が焼け落ちる光景や家財道具を持って逃げまどう人たちの姿が、今でも目に浮かびます。父が持ってきてくれた鉄カブトの水で目を洗ったりしました。子どもだったせいか、このままどうにかなってしまうのかという恐怖心はありませんでした。

8月15日疎開先の田んぼの畦道で終戦の報を聞きました。まずホッとした気持ちが一番でした。次にこの先どうなるのかと一抹の不安もありました。焼けなかった家はよかったなあと思いました。趣味で集めていた和紙の千代紙が焼けてしまったことがとても残念でした。お陰様で家族は無事でしたが、長年にわたって築きあげた物を失ってしまった人たちの心は如何ばかりかと思われます。

私が生まれた時、祖母からいただいた桐の羽子板を毎年お正月に飾っています。鉄筋コンクリートでできた祖師堂の中で少々焼け焦げ、一部すすのついている羽子板です。

戦争のない平和な日々が続くことを願っております。

2度の空襲に遭遇して



やまもと まこと
山本 誠さん
下落合二丁目在住
終戦時：8歳

空襲は本当に凄^{すご}いもので、全部焼けてしまいました。一番衝撃的なのは、有名な3月の東京大空襲です。

その当時、私が住んでいたのは大田区^{おおた く}（当時は大森区^{おおもり く}）でした。父親が歯医者をやっていた関係もあり、自宅は木造の平屋だったのですが、3月10日の一回目の大空襲は防空壕^{ぼうくうごう}どころの騒ぎじゃなく、自分の家が焼かれるのを目の当たりにしました。

3兄弟で両親も健在、5人家族で過ごしていました。大空襲の時も5人で逃げたわけですが、その時の記憶で一番鮮明に残っているのは、空襲警報^{くうしゅうけい}、そしてB29の爆音です。今でも耳に残っています。B29は、極端に言うと操縦士が見えるんじゃないかと思うくらい、超低空でこちらに飛んできました。そこから焼夷弾^{しょういだん}が落ちていくのですが、焼夷弾^{しょういだん}というより、火の玉みたいなものが落ちてくるようでした。周りで何人も死んでいきました。当たって死んだ人もいるかもしれませんがショックで亡くなった人が随分いました。

そんな凄^{すご}い状態で、空襲を経験したわけですが、一番悲惨だったのがこの後でした。焼け出されて行くところがないため、新宿区^{しんじゅく}の市ヶ谷^{いちがや}にある祖父の家へ逃げることになりました。大田区^{おおた く}から歩いて市ヶ谷^{いちがや}へ向かいました。祖父の家に引っ越して、やれやれ落ち着いたかなと思った矢先のことです。

市ヶ谷^{いちがや}も空襲に見舞われ、祖父の家が焼け落ちてしまったのです。本当に全て焼けてしまいました。

焼けた直後というのは、独特の匂いが激しくしましたし、見たくない光景でした。だから「意識的に忘れたい」という時期もありましたし、あんまり鮮明に覚えてないというのも、そういった理由からかもしれません。

その後、父親のついでで栃木県^{からすやま}の烏山^{そかい}に疎開することになりました。市ヶ谷^{いちがや}から烏山^{からすやま}に行く時に、リヤカーに荷物を積んで上野^{うえの}まで歩いていったのですが、周りを見ると、そういった疎開しようとする人々^{たたくさん}が沢山歩いていました。

一番感謝しなきゃいけないのは父親です。父は食料を買うために、東京と疎開先^{そかい}を行ったり来たりしていました。父が東京から列車で帰ってくる時、今では考えられませんが、機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}といって、列車に向かって戦闘機がシューって降りてきて機関銃でダダッダダッと撃ってきたそうです。父は命がけで食料を買に行ってくれていたのです。

疎開先^{そかい}の田舎生活で一番大きな出来事は、弟が亡くなったことです。私と3つ違いの弟がいたのですが、心臓弁膜症を患っていました。でも当時は与える薬がないのです。父親が東京まで出かけて行って、買い出しと同時に、薬や栄養になるようなものを買ってきて与えたのですが、やはりそれでも難^{すこ}しく、弟は亡くなりました。それは凄^{すご}く印象として残っています。

私が小学校を卒業したのが昭和25年なのですが、その頃まではいろんな意味で生活は安定していなかったですね。

私の戦争体験



宇田川 典文さん

上落合三丁目在住
終戦時：4歳

明治43（1910）年生まれ。父は、私が生まれ
た昭和16（1941）年の5月に出征し、茨城の土浦
に集められ、その後戦地へ送られました。黒い布
で覆われた車窓から高田馬場の景色を見て覚悟を
決めたようです。同年12月太平洋戦争が始まり
ました。

我が国の戦況が悪くなった頃からB29が現れる
ようになり、戸山ヶ原の高射砲陣地よりポンポンと
飛行機の後を追うように煙があがったのを覚えてい
ます。夜の空襲警報が頻繁になり、電気を消した
暗がり、防空頭巾を被った私は母にすがって照明
弾が明るく落ちていくのを怯えて見ていました。

昭和20（1945）年3月、下町を襲った東京大
空襲がありました。東の空が赤黒く染まり恐怖に
怯えました。5月25日夜、けたたましく警戒警報
が鳴り、ゴーという爆音とともに焼夷弾をまき散
らしながらB29の群れが早稲田から小滝橋へ迫っ
て来ました。焼夷弾は六角形で油がいっぱい詰ま
り木造の家はひとたまりもありません。

母は私と姉を伴い、美仲橋を渡り、中井御霊神
社の下にある大防空壕を目指しましたが、上落合
は火の手が回り逃げ切れず、六の坂下の暗渠に潜
り込んだそうです。現在の林芙美子邸から五の坂、
六の坂にかけて（中井通り沿いに）、当時、幅1メー
トル、深さ1メートルほどの深い暗渠が通ってい

ました。熱風渦巻く中、暗渠で夜を明かしました。
防空壕に向かった方も途中で被災したと後日聞き、
運が良かったと母は思ったそうです。一夜明け、
まだ熱気が残る美仲橋を渡った時、川の南側に広
がる麦畑の下肥にまじった紙が列をなして火が
燦っていました。

上落合の私の家も隣家も全焼。物置の練炭が
真っ赤に燃えていて、台所のタイルの流しが白く
残り、鉛管むき出しの水道から少し水が出ていま
した。今、テレビ等で見える戦争は瓦礫の山ですが、
日本は木造家屋なため、焼け焦げた木と、少しの
電柱が残るだけで全て焼き尽くした焦土でした。

私たちは母の実家の荻窪に寄宿し父の帰りを待
ちました。父はスマトラ島パレンバンで終戦を迎
え帰ってきました。父の顔を知らずに育った私は
しばらく懐かなかったようです。

細い柱に焼けたトタンを集め、屋根は木のチッ
プを貼った「とんとん葺き」で覆い、窓は短冊状
のガラスを紙で貼り合わせた粗末な家からの出発
でした。

当時の私の戦争体験と後日、母が話してくれた
ことをまとめたものです。

近くの最勝寺にある戦災で亡くなった無縁仏の
墓に合掌。

▶ 今まで話せずにきた戦争体験！

私は昭和5年、新潟県小千谷市の米農家に生まれました。来月で95歳になります。7人兄弟の2番目で長男です。弟や妹の世話、農作業、養蚕など、小さい頃から何でもやりました。こう見えてもケンカは強く、近所で評判のガキ大将でした。そんな田舎のガキ大将が、なぜ、特攻隊員としてわずか15歳で死ぬ覚悟をしたか、私の青春時代の苦しい1ページをお話しさせていただきます。



新潟県
小千谷市の生家



叔父と一緒に

尋常高等小学校、現在の中学校の卒業が近づいてきた頃、私は進路に悩んでいました。選択肢は3つ。旧制中学校に進学するか、奉公などに出て働くか、軍隊に志願するか。私は、とにかく親孝行をしたいと考えていました。



昭和5年生まれ
7人兄弟の
2番目（長男）

こんどう しんいち
近藤 伸一さん
大久保三丁目在住
終戦時：15歳



昭和16年から第二次世界大戦が始まり、日本は、政治、経済、教育すべてが軍国主義の中、世間は「息子が戦地に行くことが家の誇り、親孝行」という風潮でした。私は、信頼していた学校の先生に相談をしました。先生は、軍隊に志願することを勧めたうえで、こう言いました。「近藤は、千葉県習志野にある陸軍の戦車学校に行った方がいい。海軍の予科練に合格するのは難しいから」と。予科練とは、戦闘機のパイロットの養成学校のことです。そして、海軍の予科練に入るということは、特攻隊員になるということです。その先生の言葉は私の負けん気に火を付けました。「なんだと！そこまで言うなら、海軍に合格してやる。憧れの海軍の7つボタンをつけてやる」、私は合格のため、勉強に励み体を鍛えました。この受験は、両親には黙っていました。報告すれば、反対されるとわかっていました。結果、新潟県で数人の受験者のうち、合格したのは私一人だけでした。



予科練の第一次試験を終えて
(写真中央)

昭和19年5月、ついに召集令状が届き、両親は
 いわゆる赤紙を見て、初めて、私が予科練を受験
 し、特攻隊に合格したことを知ったのです。両親
 は、出征に賛成とも反対ともいっていませんでした。
 いや、言えなかったのです。赤紙が来てしまった
 以上、出征を拒めば国賊です。村では初めての特
 攻隊員の誕生に、沸いていました。



召集令状が届き、出発を目前にして



昭和19年6月10日、出征の日。村長・校長を
 はじめ、多くの人々が見送りに集まってくれまし
 た。私は声を張り上げ叫びました。「大勢の方々
 にお集まりいただき、御礼申し上げます！」「私
 は本日より、一旦入団の暁には、二度と再びこの
 土を踏まない覚悟であります！」盛大な拍手と万
 歳三唱が響く中、振り返ると、小さな妹を抱いた
 母が、呆然と立ち尽くしていました。それでも母
 は、私の手を取り、泣きながら「伸一、達者でな」
 と、その手を握りしめたまま離しません。私は胸
 が張り裂けそうで、声を発することができません
 でした。母のその手の感触は、今も忘れることは
 ありません。



入隊後「7つボタン」の
 制服を着て

軍隊での訓練は、大
 変厳しいものでした。
 特別攻撃隊、略して特
 攻隊とは、決死の任務
 を行う部隊、つまり体
 当たりで相手の船に突
 撃していく。特攻隊員
 一人一人が、爆弾なの

です。命を惜しんだら特攻隊ではない。特攻隊と
 して、国のために死ぬことが、親孝行なのだと考
 えるようになりました。



上官たち



奈良県若草山にて引率外出

昭和20年8月、普通は3、4年の訓練がなされ
 るところ、戦況が逼迫していたため、わずか1年
 の訓練で出撃することになりました。激戦の地・
 沖縄に向かうべく、京都の舞鶴で待機。先に出発
 する先輩たちは、出撃前夜、酒を浴びるように飲
 んだり、恋人や家族に手紙を書いていたのか、皆、
 虚ろな目をしていたのが印象的でした。昭和20
 年8月13日、自分の最後の姿を写真に撮り、形見
 としての爪、髪の毛が集められ、両親へ遺書を書
 きました。私は満15歳、日本のために命を捨て
 る覚悟を決めました。

8月14日当日。沖縄に向かうはずの輸送船が、
 舞鶴の港に姿を見せません。「一体どうしたん
 だ?」「何があったのか?」、不安と混乱の中で日

付が変わり、8月15日を迎えました。広場に何千人もの兵士が集められた中、天皇の玉音放送ぎょくおんほうそうが流れました。よく聞こえず、放送の内容は全く理解できませんでした。「亡くなった戦友たちは使命を果たしたのに、自分は生き残ったことが悔しい」と語る先輩たち。その時の複雑な心境は言葉にできません。後からわかったことです、私が乗るはずだった輸送船は、途中、爆撃され沈没してしまったそうです。



昭和20年（奈良）
班全員で「最後の姿として」集合写真を撮影

その年の10月、両親の待つ新潟へ。村には、私と知り合いの2人が戦地から戻ってきました。私は生きて帰り、その知り合いは、小さな骨壺こつぽになって帰ってきたのです。「二度と再びこの土を踏まない覚悟である！」と叫び出発。自分は人間ではない、特攻隊とっこうたいとして、国のために命を捨てると決意したのに、使命を果たせず無事に帰ってきた自分。両親は安堵あんどした様子でしたが、混乱する私を持て余していたように感じました。

自分は何のために生きているのか、生きる意味

を見失い、故郷に居場所ありません。一年、二年と過ぎ、苦しみは一層深まるばかりでした。私の苦しむ姿を見かねた友人が、「1回東京へ行ってみないか」と誘ってくれました。東京では、皆、苦しい中でも懸命にもがき、前向きに生きようとしている人々の姿がありました。私は心を揺さぶられ、そこに希望を見だし、もう一度生きてみようと思えることができました。とにかく、真面目に誠実に何事にも取り組み、今までの自分を取り戻すかのように、ガムシャラに生きてきました。多くの友人、大切な家族に出会い、15歳で死ぬはずだった私が、今、95歳になろうとしています。

私たち昭和初期の時代と、令和の時代は全く違います。私は「昔はこうだった、だから、ああしろ、こうしろ」と言うつもりは全くありません。私はこういう生き方をしてきたという事実を伝え、若い皆さんが、これからの参考にしていただければと思っています。

そして、少しでも皆さんの役に立つのであれば、命ある限り自分の体験を語っていこうと決意しています。

私は6年前に脳梗塞になり、後遺症で言葉がほとんど話せなくなりました。数年かかりましたが、今日こうして皆さんの前で発表できるまでになりました。聞き取りづらい部分もあったと思います。最後まで聞いていただき、本当にありがとうございました。

私もまだまだがんばります。

平和講演会・映画会（令和7年3月16日）

掲載内容は講演当時のものです。

▶ 今まで話せずにきた戦争体験！

昭和6年、埼玉県大宮^{おおみや}に生まれ、昭和35年、結婚を機に、新宿^{しんじゅく}に越して参りました。今日は、大宮^{おおみや}での戦争体験をお話しさせていただきます。今では、新都心として発展していく、大宮^{おおみや}の地にも戦争の爪痕が、そして、私の心にも深い傷痕が残っています。

私の青春時代は、なぎなた、竹槍^{たけやり}、草刈りなど、軍事訓練の記憶で塗りつぶされています。学校の校庭は畑となり、積み上げた枯れ草に、汲み取った人糞^{じんぶん}を手ですくい、混ぜては四角い黒い肥やしの山をいくつも作らされたものです。毎月1日と15日には、必勝のハチマキをした、女子学生で隊列を組み、神社で、日本は神の国だから必ず勝つと、「撃ちてし止まん」「八紘一宇^{はっこういちう}」と皆で声を張り上げて叫びました。「撃ちてし止まん」とは、戦意高揚のために用いられたスローガンの一つで、敵を打ち負かすまで戦いを止めない、という意味になります。「八紘一宇^{はっこういちう}」は、本来は平和を願う言葉でしたが、第二次世界大戦中の、日本の中国・東南アジアへの侵略を、正当化するスローガンとして、利用された言葉です。すべて「お国が勝つまでは」の合言葉で、贅沢^{ぜいたく}は敵とされ、日常生活の細部に至るまでも、ガマンガマンの世の中でした。

軍人が一番偉いと言われ、道端で、若い兵隊さんの敬礼が、少し遅れたというだけで、上官は激怒し往復ビンタを。倒れこんだ兵隊さんを誰も助けることができませんでした。また、「大陸の花嫁さん」ともてはやされ、満州^{まんしゅう}開拓団の慰問袋で文通し、それに応募した友達の姉は、満州^{まんしゅう}に渡ったのち音信不通となりました。友達のお母さんの泣

こんどう しげこ
近藤 滋子さん
大久保三丁目在住
終戦時：13歳



き崩れていた姿が、目に焼き付いて離れませんでした。

昭和20年3月の東京大空襲、毎日、東京方面の空は赤く焦げたようでした。東京からの電車を降りてきた人々は、裸足の足が焼けただれ、引きずりながら歩いている人、手拭いで火傷^{やけど}した顔を隠している人。皆、目に光はなく虚ろ^{うつろ}に歩く、地獄の使者のような姿を目の当たりにし、私たちも、これからどうなってしまうのかと恐怖の日々でした。

そしてついに4月、大宮^{おおみや}にもB29が襲来^{おおみや}、大宮駅の、列車の車両基地を目標に、爆撃が開始されました。駅前の一角に住んでいた私たち家族は、その流れてきた焼夷弾^{しょういだん}の爆発により、炎の中に。必死で逃げた、防空壕^{ぼうくうごう}の中から見たのは、焼夷弾^{しょういだん}が次から次へと、花火のように散り、瞬間、火の海になっていく様子でした。赤く波のように押し寄せてくる炎。防火用貯水槽からの、バケツリレーの消火訓練は、何の役にも立ちませんでした。病弱でもあった私は、何もできずただ茫然^{ぼうぜん}と立ち尽くしていました。「命が助かった、よかったよかった」という両親の声に、ハッと我に返りました。振り返ると、我が家は、屋根も柱も真っ黒に焼け落ちていました。その中で、使えそうな畳を何枚も積み重ね、雨風^よを避けながら家族4人で、肩を寄せ合い暮らすことになりました。

8月15日、終戦。戦争が終わった、日本が負けたということがわかったのは、何時間も後のことでした。事業家の父が、「満州の株は紙くずになったなあ」と呟いた^{つぶや}厳しい横顔に、これからの苦しい生活を暗示されたようでした。すべてが配給制度の中で、サツマイモのツルが一番のご馳走^{ちそう}だった記憶、物々交換でやっと手に入れたお米のおにぎりの味。ある裁判官が配給制度を守り、餓死したというニュースにショックを受けました。敗戦国日本の、空虚な日々の中でも、私たち庶民は必死に生きてきました。

私は、人の人生を翻弄し、悲惨な目に遭わせた戦争が嫌いです。戦争は人を不幸にしていまいます。戦争は、絶対に起こしてはいけません。では、戦争を起こさないためにはどうすれば良い

か？それは、私たち戦争体験者が、体験を語っていく、戦争の悲劇を伝えていかななくてはなりません。そして、私たち女性の声、母たちの連帯だと思います。女性はおしゃべりが得意です。家族、お友達、地域、皆と仲良くして草の根から平和を作っていきましょう。そして、日本に、世界にも広げていきましょう。

縁あって、特攻隊^{とっこうたい}志願だった夫と新宿区^{しんじゅく}に64年、共に90代半ばを元気に迎えられたことに感謝して、1日1日を大切に生きていこうと、心に決めた戦後80年です。これからも頑張ります。今日は聞いていただき、どうもありがとうございました。

平和講演会・映画会（令和7年3月16日）

掲載内容は講演当時のものです。

▶ 東京の空を眺め、会いたいと思った両親



うえまつ えいこ
植松 英子さん
下落合四丁目在住
終戦時：12歳

私の通う小学校の姉妹校が静岡にあったので、
小学校4年生から6年生は、みんなでそちらへ集
団疎開しました。私は当時6年生でした。

疎開先の寄宿舎は大きくないので、教室を寢床
にしていました。数か月間そこで暮らしましたが、
勉強なんて大したことはできなかったですし、家
に帰りたいという一心でした。みんなで東京の方
を眺め、両親のことを思いながら泣いたこともあ
りました。

昭和20年3月、6年生だけが女学校に進学する
ために東京に帰されました。東京に帰ったちょう
どその晩、大空襲に遭い、四ツ谷駅近くの私の学
校はコロッと焼けてしまったのです。卒業式もで
きないままでした。

終戦を知らせる天皇陛下のお話は、家族も周り
の住民も集まって聞いていました。涙をこぼす母

たちのそばで、私はまだ子どもだったので、ただ
ただ黙って聞いていました。戦後は思わぬことが
どんどん起きるので、子ども心についていくのが
精一杯でした。本気になって自分の先の人生を考
えるということもなく、流されていくような感じ
でした。戦争に負けて悔しいとは思わなかったで
す。「戦争が終わってうれしいな。もうB29の嫌
な音を聞かなくてすむんだな」という気持ちが大き
かったですね。当時は目先のことで精一杯
で、社会に対して色々考えるということはできな
かったです。今の子どもたちは世界に目を向けて
いる感じがして、すごいなと思います。

最近の情勢を見ていても、戦争って何でしてい
るのかしら、と腹立たしい気持ちです。戦争中、
B29が飛ぶのを見て、憎らしいという感情とも違
う、何とも言えない嫌な気持ちになりました。そ
れが、今もどこかの国で起きていると思うとどう
しようかと思います。

だから本当に、戦争のない世の中にしたいもの
ですね。

がくどう そ かい 学童疎開と終戦直後の暮らし

敗戦（終戦）から80年、昭和9年生まれの私にとっては、やはり学童疎開と戦後の暮らしが忘れられない。

がくどう そ かい 学童疎開

昭和19年、次第に激しくなる米国空軍の空襲から小国民を守るとの政府と軍の方針で安全な地方に親戚のない者は学校単位での疎開（集団疎開ともいわれた）が行われた。



姉への手紙

当時小石川区（現文京区）竹早小学校に通学の私たちは浅草区（現台東区）の児童と共に宮城県鳴子町に行った。初夏の或る日、夜行列車に僅かな学用品と、衣類を背負い友人たちと遠足気分でもり込んだ。陸羽東線鳴子駅に着いたのは翌日昼ごろ、駅頭は大歓迎の町民でいっぱいだったが温泉町特有の硫黄の匂いにびっくりしたのが忘れ難い。

疎開の第一陣は5、6年生で、私は当時5年生、その後には下級生も加わってきた。疎開先での暮

いのうえ よういち
井上 陽一さん
北新宿四丁目在住
終戦時：11歳



らしは当初は友人たちと旅行気分楽しく過ごしていたが3、4日すると両親や家族が恋しくなり、就寝時に布団の中で周囲に聞こえぬように泣く子が増えた。

それでも翌朝は一斉に起床、東京に向かって挨拶の後、「疎開は勝つ為国の為～」と歌って一日をスタートしていた。午前中は宿泊旅館の大広間で長机を並べて授業、午後は畑仕事、時には戦闘機用に使う油を取るとかで松の根（松根油）を掘る作業があったが、非常にキツイものだった。食事はコメどころの宮城県ながら質量ともに不十分で、東北地方特有の“わらび”が味噌汁、煮物、漬物に出てくるのには閉口したが、秋には栗拾い、冬にはスキーと東京では経験できないことを楽しむこともできた。



終戦後の疎開先での日記

ほぼ1年が過ぎた8月15日の朝、町中にラジオ放送が流れ鳴子小学校校庭への集合が命じられた。正午に始まった玉音放送は電波状態が悪く聞き取りにくかったが、前列に並ぶ先生たちが一斉に泣き崩れ“敗戦”を知ることとなった。宿舎に帰る山道には早い秋の訪れを知らせるようにコスモスが咲き乱れ、空には赤とんぼが人の世を囓うように飛んでいた。玉音放送の後、少し落ち着き始めてから、先生の提案で東京に帰った時の土産として友人たちと山で“イタドリ”の葉を取ってきて乾燥させ細かく刻み、先生から貰った辞書を切りタバコの長さに合わせた紙と鉛筆を巻き付けたもので紙巻きたばこを作り、持ち帰ったところ父親に大喜びされたのを覚えている。



疎開先の鳴子から帰る竹早国民学校の子もたち

終戦後の暮らし

疎開が終わり東京に戻ったものの、我が家は戦災で失っていて一家は品川の親戚宅に同居していた。私は小学校卒業までの約5か月、近くの品川小学校に通うこともできたが友人との別れが辛く、戦災で校舎を失い学校全体が間借りしていた茗荷谷の窪町小学校まで通うことになったが、北馬場～品川～大塚～市電茗荷谷の通学で初め

て敗戦の厳しさを味わうことになった。どの電車も窓ガラスが無く、そこから乗り降りす



竹早国民学校通信表



卒業写真。竹早国民学校が焼失、窪町国民学校を借りて

るのが当たり前、ダイアグラムは全く無い状態で体の小さかった私にとっては厳しく、辛い日々だった。

また、我が家は小石川の家が強制疎開にあったのちに父親が勤務していた新子安（横浜市）の社宅が5月の空襲で焼失しており、非常に苦しい状態だったが、母親が僅かな着物を実家（千葉県野田市）に持ち込みメリケン粉に換えて饅頭を作り北馬場駅（現新馬場駅）前で売り、売り上げでまた粉を買って、饅頭売りを繰り返していた。

また、近所の工場跡地に“あかざ”の群生を見つけ、近所の人たちで夜中に出かけ、茹でて食したりもした。そんな暮らしが続いた昭和24年、東京都の戦後初の集合住宅として建築された戸山アパートの抽選に当たる幸運に恵まれ、新宿での生活が始まった。

書き連ねたことは多くの方々が似たような経験をされていたはずで、肉親の一人も失わずに済んだ幸運に感謝すべきかもしれない。



家族から疎開先へ送られた手紙

▶ 戦争下にあった学生生活



いがらし まさえ
五十嵐 政枝さん
中落合二丁目在住
終戦時：19歳

私は地元の茨城県で女学校に通っていました。戦争の前は女学校3、4年生のころでしたが、満州事変、そして支那事変が起きて、ついに私も挺身隊に連れ出されました。私の通う女学校の生徒は、群馬県の中島飛行場へ学徒動員で召集されました。行かなければ卒業証書をもらえないので、否応なく行きました。大変でしたが、そういう苦勞をしていると、学校のお友達や中島飛行場への学徒動員で知り合った人との仲は深まりました。大人になっても当時のお友達と会うと、その当時の苦勞を思い出しました。

群馬県での暮らしは、みんな寮生活でしたから、地方のおばあさんたちは「お嬢さんたち、可哀そ

うね。若いのに」と差し入れをくれました。思い起こすと、本当に良い人ばかりでした。

疎開せずに残っていた家族は茨城にいましたが、叔父が東京にいたので、父は東京と茨城を行き来していました。東京大空襲の時、父が茨城から見た東京の空は真っ赤だったそうです。父は東京へ向かおうとしましたが、道路が死体で埋め尽くされて渡れないので戻ったそうです。戦争は本当に嫌ですね。

今の子どもたちへ向けて

私の学生生活はなにしろ戦争下では物資はないですし、質素なものでした。女学校では体育の時間は薙刀の練習をさせられました。勉強だけはいつの世も大事だと思います。勉強をしっかりしておけば、どんな時代でも乗り越えられるのではないのでしょうか。



戦争体験者が語る 戦争のこと

区では、「新宿区平和都市宣言」の理念を広く区民に伝えるためにさまざまな啓発事業を行っています。「平和講演会・映画会」や「すいとんの会」では、戦争を経験した方々が講師となって、自分の体験を語り続けてきました。その貴重なスピーチを本章でまとめて紹介します。戦争のつらさや悲しみ、そして平和を願う強い思いが、一つ一つの言葉に込められています。



消えない記憶「また、あした遊ぼうね。」

空襲



二瓶 治代さん

国立市青柳在住
終戦時：9歳

私は、総武線の亀戸^{かめいど}という駅のすぐそばに家族5人で住んでおりました。両親、中学生の兄、私、5歳になる妹の5人です。

3月9日は空襲がありませんでした。この日は、山形県に疎開^{そかい}していた6年生のお兄さんやお姉さんたちが卒業式で戻ってきており、夕方まで家のそばで遊んでいました。母親が「ご飯だよ〜。」って言うので、「また、あした遊ぼうね。」と言って、それぞれの家に帰りました。

その夜の出来事です。粗末な夕食を済ませ、大体8時くらいに床に就きました。すると10時くらいに「警戒警報^{けいかいけいほう}」が鳴ったんです。空襲が来そうだという連続のサイレンです。家にいた父が外を見に行き、「大丈夫そうだから、寝ていいよ。」と言ったので床にもぐりこんだことを覚えています。

しばらくすると、父が外から飛び込んできて、「今日はいつもと違うから起きろ」と言ったので私は飛び起きました。防空頭巾をかぶり、小さなリュックを背負い外に出ました。亀戸^{かめいど}の辺りはまだ暗かったのですが、砂町^{すなまち}の辺りの空は真っ赤でした。焼夷弾^{しょういだん}が、ザッザッザッザッ、まるで雨みたいに降り注いでいました。あれは何だと思ひながら、地面を掘って作った10人くらいが入れる防空壕^{ぼうくうごう}に入りました。ここには既にお隣の家族が5、

6人入っていて、我が家は母と妹と私の3人だけ入れてもらったんです。父は、防空壕^{ぼうくうごう}の外で周りを見ていました。中学生の兄は、「勤労働員^{きんろうどういん}」というのがあり、動員先に行ったのか、いなくなっていました。

壕^{ごう}の中に入っていると、周りの様子が聞こえてきます。お母さんが子どもを呼ぶ声、子どもが「お母ちゃん、お母ちゃん。」って泣き叫ぶ声だとか。それからパシーン、パシーンって何かが炸裂^{さくれつ}するような音が壕^{ごう}の中に響き、私は怖くて耳を塞いで、硬くなっていました。

すると、外を見張っていた父が、「皆、防空壕^{ぼうくうごう}から出る!そこに入っていると蒸し焼きになるぞっ!」って言ったんです。その時に、先に壕^{ごう}に入っていたお隣のおばさんが「あんた外行くと焼け死んじやうよ。だからここにいな。」と言って、私の服の裾を引っ張って止めたんです。だけど私は、両親が出ろと言うので、おばさんの手を振り切って外に出ました。そうしたらもう、まちの様子は防空壕^{ぼうくうごう}に入った時とは全く違いました。空も、周りも、地面も一面、ゴーゴーと炎に包まれているのです。真横からは火の粉が吹き付けてきます。家が燃えますから、畳とか、柱とか、障子とか、お布団とか、そういうものが火の塊になって飛んで来て、それが逃げる人たちに容赦なく当たるんです。だから、人は、燃えながら走っていました。子どもたちも燃えていました。お母さんに手を引かれて、走っていました。私も同じようにして走って逃げました。

家の前の京葉道路^{けいよう}（当時は千葉街道）を渡り、総武線の土手に一時避難しました。そして、そこで周りが燃えていく様子を見ていたんです。その中で、消防士が一生懸命燃え盛る炎に水をかけていました。しかし、消えないどころか、消防服に火がつき、ホースを持ったまま焼かれてその場に倒れていきました。この時代、消防士は自分の持

ち場を離れてはいけないという命令があったと言われています。逃げるのが許されなかったのです。そして、生きたまま焼かれていました。

また、このまちには荷物を運ぶ馬がたくさんいたのですが、その馬たちが暴走し、めちゃくちゃに走っていました。馬の死体もたくさん見ました。でも、そういう馬の中で、私がとっても印象に残っている馬が一頭います。その馬は、^{けいよう}京葉道路を^{きん}錦糸町^{しちやう}の方からトコトコ歩いて来たんです。「馬方さん」と言う飼い主さんがついていて、荷車に荷物を積んでいました。その馬はどうしたわけか、私が立っている土手の真下辺りで、動けなくなってしまい、4本の足をピンと突っ張らかして、立ちすくんでしまいました。そうしたら、馬の荷物に火がつき勢いよく燃え上がったんです。その火は、馬の尻尾から馬全体に燃え移りました。でも馬は、暴れもしないで、ジーンと立って焼かれていきました。そうしたら、その馬の火が飼い主のおじさんに燃え移ったのです。でも、飼い主さんは馬を捨てて逃げませんでした。馬の顔のところできっかりと手綱を持ち、一緒に焼かれていきました。私は、そういう姿を土手の上から見ていても、怖いとか、熱いとか、苦しいとか、そういう人間らしい気持ちを全く覚えません。ただ、もう、固まって見ていました。

そのうち、私たちがいる土手にも火が燃え移ってきたので、父と手をつないで^{かめいど}亀戸の駅の方に向かいました。その途中で、私の防空頭巾に火がつき、父が「頭巾を取れ！」と言うので、私は父から手を離して、^{あご}顎で縛ったひもを解こうとしたのです。その時に、ものすごい火の風が吹いて来て、私一人だけドーンと飛ばされてしまいました。そこで私は両親や妹と離れ離れになってしまいました。

一人で真っ赤な炎の中をグルグル回っていたような気がします。その時に、いきなり真っ暗な場所に出ました。そんなに広くない小さな場所ですけども、そこだけ暗くて火が無いのです。目の前

を見ると、大きな鉄筋の建物があり、その少し^{くぼ}窪んだ陰のような所で、人が一人だけ立ったまま燃えていました。身体から火を放っていました。思わず私は、「消してあげなきゃ！」って思ったんです。

その頃は、学校や親から、火を見たら消せって言われていたんで、そんな気持ちになったようです。何かで火を払いのけてあげようと思いましたが、防空頭巾も背負っていたはずのリュックも無いのです。思わず私は、自分の両手を出し、手で火を払いのけようと思いました。すると、その燃えている人が、私に向かって左手を出しました。何のためだったんでしょう。来るなという合図か、助けてという合図か、わからないのですが左手を出した。そうしたら、この左手から炎がパァーッと上がったんです。その炎は、何か緑色のような、青っぽい炎が風に揺れて、振り袖が揺れるみたいにきれいに見えたのです。私は、吸い付かれるようにその燃えている人に更に近付きました。すると、後ろから「あんた、そんなところに行くと死んじゃうよ。」と女の人の声がしました。それで、そこから離れたんじゃないかと思います。

今度は何かにドスッとぶつかりました。それがものすごく熱かったんです。熱さを感じたのはそれが初めてでした。熱いと思った途端に、ハッと我に返り、父も母も妹もいないことに気が付きました。その時に、私の右腕をいきなりつかんだ人がいました。私を引っ張っていくのです。私は、「お父さんなの？お父さんなの？」って叫びました。でも、^{ばくふう}爆風で返事が聞こえません。夢中で叫びましたが、とうとう返事は聞こえませんでした。

そのうちに私は気を失い、道端に倒れてしまいました。そうしたら、私を引っ張った人が、動かなくなった私を自分の懷に抱えるようにして、道端に伏せたそうです。すると、同じように逃げていた人がたくさん近くに来るんです。人は皆怖いから、誰かがいたり、何か物陰があると、寄り添うようにして集まってくるのです。私の上にも

何人かわかりませんが大勢の人が集まってきました。私は一番下敷きになってしまいました。ほとんど気を失っているんですが、フッと気が付くと声が聞こえてくるんです。とにかく熱いし、苦しいし、重たいんですが、「俺たちは日本人だ。俺たちは日本人だ。」って。「死んでたまるか。大和魂がある。眠るな。」という声が朦朧とした中で聞こえてくるんです。私はまた意識が遠くなり、そしてまた気が付くと、「眠るな。生きるんだ。生きるんだ。」「死んでたまるか日本人。」とかね、そんなことが聞こえてくるのです。

人の下敷きになって、この炎の中でどのくらいの時間が経ったのかわかりませんが、朝の5時頃に火は自然に鎮火しました。何も燃えるものが無くなって。それから私は、上に積み重なった人の一番下から引きずり出されました。引きずり出された時に、私を炎の中で見つけて助けてくれた人、一晩中声を掛け続けてくれたのが父だったとわかりました。「ああ、お父さん！」と言う間もなく、父は、「ここを動くな！」と言ったかと思うと、まだ火が燃え残っているまちのどこかに行っていました。動くなと言われたので、そこにジッと立っていました。

辺り一面、なにも無いんです。ただ、白濁色の煙のような、霞のようなものが、フワフワ浮いているだけでした。動くものも無いし、声も音もありません。「ここはどこだろう。」と思った記憶があります。フッと、足下を見ると、私が今まで下敷きとなっていた所です。私の上に、重なり合っていた人たちは、真っ黒な炭みたいになっていました。私はそうやって死んでいった人の下敷きになり、守られるようにして助けていただきました。人間がこんなに黒くなるものかって、今でも不思議なくらいです。思わず自分で、「こんなになっちゃった。」って呟いたのを覚えています。

そこに、ジッと立っていたら、霞の中から人影

がやって来て、それが父と母と妹でした。父も、母も、やけどで顔がむくれて大きくなっていて、誰だかわからないくらいでした。5歳になる妹が、「足が痛い。足が痛い。」って言うていました。妹は大きな火傷をしていたんですけど、その時は気が付かなかったのです。

今度は、目の見える私が、両親と妹の手を引きながら、焼け跡を歩いて自分の家のあった方に、兄を探しながら歩きました。靴はどこかへいってしまい、裸足だと地面が熱いので、爪先立ちして歩きました。歩いている途中に、亡くなった人の靴でしょうか、片方だけ転がっていたので、その片方の靴を履いた記憶があります。

その時のまちの姿なんです。もう、ごみくずか薪のくずのように、道いっぱい死体がゴロゴロ、足の踏み場もないくらい散らばっていました。皆真っ黒になって。その中に、多分お母さんではないかと思えますけれど、子どもを胸に抱いて、うつ伏せで倒れている姿がたくさんあるんです。小さな赤ちゃんを抱いたまま仰向けに倒れている姿もあります。大きい死体のそばには、必ずと言っていいくらい小さな死体が寄り添うようにして転がっていました。

戦争は人が生きていくことが許されないのです。そして、死んでも、それがまるでごみくずのように扱われます。人の命なんていうのは、本当に粗末に扱われます。だから、どんな理由があっても、いつの時代も、どこの国でも、私は戦争だけはやってはいけない、つくづくそう思います。あの戦争は68年前の話ですが、日本の歴史です。私たちは日本の過去をしっかりと勉強して、再び日本が過ちをくり返すことがないように平和を構築していきたいと思います。

平和講演会・すいとんの会（平成25年3月10日）

掲載内容は講演当時のものです。



ほんま ゆりこ
本間 百合子さん

西早稲田一丁目在住
終戦時：1歳

私は新宿区の平和の語り部をしています。語り部と申しまして登録をしたすぐあとに新型コロナウイルス感染症が流行し、お話しする機会が失われておりました。本日は、初めてこのように大勢の皆様の前で、お話をさせていただきます。私の母は生前、語り部活動をしていました。私も語り部になろうと思ったのは、ある日、とある親子との道端での出会いからでした。小学校の低学年くらいでしょうか？男の子が「おばちゃん、そのおてて、どうしたの？」と、私をじっと見つめて、目を離さないのです。私は「お母さんの言うことを聞かなかったからこうなっちゃったのよ」と今まではそう言って、やり過ごしていましたが、その子の、あまりにきれいな、まっすぐな目を見た時に、真実を語らないといけないと決意しました。私の体験が平和のために役立つことを祈りつつ、お話しさせていただきます。

私は浅草で生まれました。近くには墨田川があり、下町人情の厚いところですよ。そうしたところが一変したのは、昭和20年3月10日の東京大空襲です。その時、私は0歳でした。

夜、突然電気が消え、最初はとにかく身を守るよう、動かないでください、とのことでした。そのうち、けたたましく警報が鳴りひびき、「ただ

ちに安全なところに逃げてください」と言われました。母はとっさに私を背負い、防空頭巾、哺乳ビン、おむつを持ち、下町中を逃げることになりました。子どものいる人は上野の山に行くよう、指示されました。現在の上野動物園です。

山のふもとまで辿り着き、防空壕の一番奥に入れさせられました。しかし、入ったのはいいが、私が今まで聞いたことのないような妙な声で泣き出したそうです。母と私は、ぎゅうぎゅう詰めの中を外に出て、あてもなく歩き、松屋デパート方面に逃げました。そのうちに、低空飛行で爆撃機B29が連隊で押し寄せて来ました。そして、1機が私たちがさっきまでいた防空壕に焼夷弾を落としたのです。

街中にも爆弾を落とし始め、特に群衆めがけ、容赦なく落とし、人々の悲鳴、紅蓮の炎の中、倒れている人等々、それはこの世とは思えない地獄のようでした。

その中で、母と子の悲惨な姿を見ました。お母さんの背中には焼夷弾が刺さっていて、火が付いていた子どもをとっさに防火用水に入れたまま、動かなくなっていました。自分たちも夢中で逃げている最中で、どうすることもできませんでした。

とうとう逃げている最中、私たちのすぐ左後ろに焼夷弾が落下、同時に炎上。その火が背負われていた私のねんねこぼんてんの袖口に付き、あっという間に炎につつまれてしまいました。逃げている人々から「お母さん、背中の赤ちゃんが燃えてますよー」と言われ、皆で消してくれました。B29の爆音で、母には私の泣き声すら聞こえなかったのです。私は真っ黒に焼けてしまい、左手の指5本全てが焼け落ち、顔面の皮膚は全てはがれ落ちました。母も左顔半分を負傷しました。

私は重症を負い、3日間仮死状態でした。軍の

大型トラックが来て負傷者を集め、護国寺^{ごこくじ}にあった帝大分院（のちの東大附属病院）へ運ばれました。ほとんどの人が重症者です。負傷者でほぼ満員でしたが、その中で4～5歳ぐらいの男の子に母の目が留まったそうです。その子は両腕のひじから下がありませんでした。いつまでも心が痛みました。

あの広い墨田川^{すみだ がわ}が遺体で埋まっていました。中には長い棒で一人一人の遺体を探している人もいました。

下町一帯が焼け野原になり、まだところどころ火煙などくすぶっていました。明け方、私を背負い、一人^{ぼうぜん}呆然と焼け野原にたたずみ、終わったんだと思うだけで、母は意欲、気力もなくなっていました。死を選ばなかったのは大ケガをしても生きている背中の子どもの重さ。我に返り、生きていく決意をしました。

私は、小学生の時いじめられたこともありました。そうした中で母がいつも言っていたことは、いじめられても、やり返しては絶対にダメと、き

びしく言われました。くやしかったらその子の上に行きなさい。いじめた子が70点だったらあなたは80点取れば上になったことになるでしょ、そう育てられました。おかげで恨んだりしたことは一度もありませんでした。

これが、私の体験です。

最後になりますが、いのちには限りがあります。あと何年生きるかはわかりませんが、心の持ち方次第ではまだ頑張れるかなと思っています。終戦から77年、私は最後の体験世代になります。戦争ほど残酷で悲惨なものはありません。私たちは一家離散して全てを失いました。同じ過ちを繰り返さないよう、平和な日本を若い人たちにも、しっかり受け継いでいってほしいと、切に思います。

ピーストーク新宿（令和4年12月4日）

掲載内容は講演当時のものです。

姉妹二人^{こうしゅれい}公主嶺からの引き揚げ

引揚者の体験



つちや ひろこ
土屋 洸子さん

西東京市下保谷在住
終戦時：12歳

私の父は東京生まれですが、北海道大学（当時は帝国大学）の農学部で土や肥料を専門に研究していました。当時、^{まんしゅう}満州には農事試験場ができておりました。^{まんしゅう}満州は大変寒いところで、寒い^{まんしゅう}満州の産業・農業・鉱業を研究するために、北海道大学の出身者が現地に送り込まれました。父はその一人だったので、私が3歳の時に、当時住んでいた鳥取から^{まんしゅうこく こうしゅれい}満州国の公主嶺に移りました。「公主」とは中国の清の時代の皇帝のお嬢さんのことで、清の第6代皇帝のお嬢さんがモンゴルのさる豪族にお嫁に行く途中で病気になり、この地で亡くなったという伝説からこの地名がついたようです。

日露戦争前まで、^{まんしゅう}満州はロシアの支配下に置かれていました。日露戦争（明治37年～38年）の結果、ロシアが整備した鉄道を日本が引き継ぎ、^{みなみまんしゅう}南満州鉄道株式会社を設立しました。^{こうしゅれい}公主嶺の中央には^{まんしゅう}満州鉄道が走っており、ヘビが獲物をのみ込んだように、駅の周辺に「附属地」というまちがありました。この附属地には現地の人は住めず、私を含め日本人のみが生活していました。附属地にある小学校を卒業した後、私は^{こうしゅれい}公主嶺の北にある^{しんきょう}新京のまちの敷島高等女学校に進学し、校舎の隣にある寄宿舎に入りました。

昭和20年8月9日の午前0時に^{しんきょう}新京に爆弾が落

ちます。後でわかったのですが、この日はソ連が参戦した日であり、ソ連による空襲でした。ソ連が攻めて来るから親元に帰した方がいいということになり、8月11日に^{こうしゅれい}公主嶺に帰ることになりました。

^{しんきょう}新京から^{こうしゅれい}南の公主嶺に向かって汽車で帰るのですが、汽車の行き先が秘密にされていてわからないのです。^{こうしゅれい}公主嶺出身の2年上の先輩、同級生、私の3名で汽車に乗ったのですが、太陽を見て南に走っていることがわかり「あ～よかったね」なんて言っていました。しかし、^{しんきょう こうしゅれい}新京と公主嶺の間には6、7駅あり、いつもなら全部の駅に停車してくれるのですが、この時は停車しないで全速力で走り抜けていくのです。^{こうしゅれい}公主嶺の駅に近くなった時に少し速度が弱くなったので、先輩が「とにかく飛び降りましょう」と。走っている汽車ですよ。そこからホームに飛び降り、転がりました。よく怪我をしなかったと思います。

これが8月11日、この日を私は忘れたいのです。こんな日を憶えていてはかなわない。自分の誕生日ならいざ知らず、70年前のこんな日を、カレンダーを見ると思い出すのです。消しゴムがあったら消したいくらい。でも忘れ難い。昭和20年の8月9日がソ連参戦、私が飛び降りたのが8月11日です。

8月15日、^{こうしゅれい}公主嶺から^{そ かい}疎開する最後の汽車に乗ることになりました。父は列車長として、青酸カリが450g入っている2本のビンとスコップ2本を受け取りました。列車には大体2,000人ぐらい乗るのですが、いざという時に“その青酸カリを2,000人分に分けて、死体をスコップで埋めろ”という命令を受けていました。汽車に乗りじっと待っていたのですが、汽車は出発しませんでした。どうやら日本は負けたらしいという噂が流れましたが、ラジオなんか手元にないからわからなかつ

たのです。誰かがそんなことを聞きつけたのでしょうか。とにかく汽車は出発せず、私たちは家に帰りました。

その後、23日にソ連軍が^{こうしゅれい}公主嶺に入ってきました。24日になるとソ連軍がダッダッと何百人と行進してきます。私たちは着のみ着のままで逃げました。リュックサックを持っていると引きずり出される、装身具や時計もソ連兵に「ダワイダワイ」と言って取られるので持てない。今でも私は長いネックレスができないんです。思い出してしまうんです。

私は鉄道の南側の避難所に逃げました。当時、「根こそぎ動員」といって20～40歳代の男の人はほとんど出征しており、中学1・2年生や私の父のような病人だとかが残っている程度でした。避難所にはソ連兵が「マダム、ダワイ」とやって来るわけですから、玄関に全部板を張って、中学1・2年生の男の子が見張り番をやってくれました。私たちは部屋の中にいて、ソ連兵が来ると見張り番が玄関からヒモを引っ張って、部屋の中にある小石を入れた空き缶を引っ張ってカランカランと鳴らします。そこで天井に逃げるわけです。また、女性はみんな丸坊主にしました。9月2日だったのでしょうか、母が泣きながら私の頭の毛を丸坊主にしました。あのカランカランという音は今でも似たような音を聞くと思い出してしまいます。そんなことが秋頃まで続きます。



関連地図

昭和21年3月、ソ連軍がいなくなると今度は蒋介石が率いる国府軍と毛沢東が率いる共産党軍による国共内戦が始まります。当時、私の家族6人と石川さんの家族5人は六畳二間の家で、それぞれ一間ずつ使っていました。忘れもしない、4月22日に共産党軍の兵士10人を泊める割り当てが来ました。私の家族が住んでいた一間を共産党軍の兵士10人に提供し、石川さんの家族の一間に2家族が寄りました。2家族で1歳から7歳ぐらいまでの子どもが5人いたものですから、「静かにしなさい」と親が注意しても5分もつかどうか。兵士は朝になると戦争に出掛け、夜になると戻ってきます。鉄砲も弾を詰めたままです。戦争にきた兵士は遊びに来たわけではない、どんなことが起こるかわからない。兵士は3泊しましたが、当時の親の気持ちはどんなものだったかと今は思います。

7月17日に父が私に「学校があるから、妹と札幌^{さっぽろ}のおじいさんの家に帰りなさい」と言いました。父は、暴動と略奪で滅茶苦茶になった農事試験場の再建計画を立てるための技術者となったため帰国ができなくなりました。家族全員に残留の命令が出ていましたが治安が悪くなることを考え、父は13歳の私と7歳の妹を帰国させる決心をしました。

7月21日に私は^{こうしゅれい}公主嶺から引き揚げました。21日・22日の2日間で^{こうしゅれい}公主嶺から5,000人の日本人が引き揚げたことになります。^{こうしゅれい}公主嶺から貨物列車に乗り、^{きんしゅう}錦州に着きました。そこで四方を鉄条網に囲まれた壁のないトタン屋根だけの収容所に入りました。ここで伝染病の潜伏期間を過ぎるまで、つまり病人がでるかどうかが確認するため1週間から2週間留め置かれました。その後、^{しゅう}錦州から汽車に乗り、^{こうとう}葫蘆島^{さっぽろ}に行き、船に乗りました。

私と妹が北海道の札幌に着いたのは、8月30日でした。^{こうしゅれい}公主嶺を出てから40日かかりました。両親と下の妹2人は、昭和22年11月に私たちと同じく40日かけて^{さっぽろ}札幌に引き揚げてきました。私の家族は幸いにも一人も欠けることなく命を

持って帰りましたが、たくさんの人々が守ってく
ださったおかげだと思います。

戦争はさまざまな形で人々に関わるものです。
空襲・原爆・地上戦だけでなく、私のように、消
せるなら消し去りたいと思う記憶を残します。

今日は、自分の国だけでなく、日本人以外の民

族・国の戦争に巻き込まれた私の体験を聴いてい
ただきありがとうございました。

すいとんの会（平成28年2月28日）

掲載内容は講演当時のものです。

ざんりゅう こ じ 残留孤児としての経験

引揚者の体験



ざる た かつひさ
猿田 勝久さん

横浜市鶴見区在住
終戦時：1歳

私は、1943年10月、現在の^{かわさき し けい ぐ}川崎市幸区に生ま
れ、中国で育ち、40代で日本に戻り、今年で72
歳になりました。敗戦の直前、国から呼びかけも
あって、^{まんしゅう}満州へ行けば安定した暮らしができると
いう数家族の集団で新潟港から^{まんしゅう}満州へ向かいました。
第二次世界大戦敗戦の1か月前のことでした。
新潟港から出た船は3隻でしたが、うち2隻は沈
没しました。幸い私の両親と祖母はやっとの思い
で中国大陆に上陸することができました。そのあ
とチチハル市に到着しました。現地の若者に荷物
を奪われ、私たちは裸同然になってしまいました
ので、目的地につきませんでした。かろうじて、

李さんという人の台所の裏にあるオンドルを提供
されただけでした。全てゼロからの出発でした。
1945年10月に妹が誕生し、生活はますます苦し
くなりました。

翌年2月から5月にかけて腸チフスに感染し、
祖母と父が相次いで亡くなりました。そのあと大
家さんの紹介で、母は中国人の王さんと再婚しま
した。王さんは私の養父になり、自分の子どもの
ように育ててくれました。母は家族の服も布団も
靴もすべて手で縫って作りました。母は我々が日
本人であること、日本にいる親戚のことなどを話
してくれました。優しい母でした。1949年に妹
が食中毒で死亡しました。続いて1952年に母が
結核で死亡しました。享年38歳、私はまだ8歳で
した。養父に男の子がおり、義理の兄となります。
養父や義兄は私の面倒をよく見てくれましたが、
孤児となった私は日本に帰りたと思うようにな
りました。当時中国では義務教育はないので、学
費はすべて養父が払ってくれました。学校時代い
じめられて、しょっちゅうチビ日本人と呼ばれ、
獣医専門学校を卒業と同時に動物病院に就職。し
かし1966年の文化大革命で日本人であるからと、
職場から追われました。養父が1975年に胃潰瘍

で亡くなりました。享年65歳でした。1981年に私は中国残留婦人の方に依頼し、日本語で手紙を書いてもらって、長野県長岳寺の山本住職（残留孤児の会会長）に送りました。山本さんは厚生省に連絡してくださり、厚生省はチラシを作って配ってくれました。幸い、埼玉県春日部市に住んでいた母の妹がそれを見て、連絡が取れました。1981年秋、私は長男を連れて一時帰国し、36年ぶりに親戚とも会えました。母の弟が私の身元保証人になってくれて、帰国しようとした矢先、また大きな障害が立ちはだかりました。妻が猛反対をしたのです。それでも3年以上かけて妻を納得させ1985年、私は妻と4人の子どもを連れて日本へ帰国しました。しかし敗戦後、私の戸籍は除籍されましたので、時間をかけて日本の戸籍にも

どりしました。63歳で電気会社を定年退職、帰国から30年経ち、日本の生活にもだいぶ慣れてきました。私の体験から言えるのは、戦争は多くの人の命を奪い運命を狂わせるといことです。財産を失うばかりでなく、心もずたずたにします。誰もが私が被ったような不幸な体験をしないよう、二度と戦争のない平和な世界を築いてほしい、私は心から戦争反対と叫びたいと思います。また、養父をはじめ親切に接してくれた多くの人々に感謝したいと思います。

すいとんの会（令和元年12月7日）

掲載内容は講演当時のものです。

語らずして死ねるか 酷寒のシベリア抑留3年の体験談

シベリア抑留



にしくら まさる
西倉 勝さん

相模原市南区在住
終戦時：20歳

これからお話しするのは私の3年間のシベリアでの苦労話です。忘れることはできません。皆さんの可愛い孫や子どもに同じ思いをさせてはいけない、戦争は二度と起こしてはならないという思いでお話します。

私は新潟県^{かしわぎ}の柏崎で生まれました。元内閣総理大臣の田中角栄氏と同郷で、角栄氏は小学校の先輩です。会合にもよく来てくれていました。自民党幹事長時代には「新幹線を作るから東京と新潟が日帰りできるようになる。しっかり親孝行をするんだぞ」と発破をかけてもらいました。ついこの前のことのように思います。

私は、昭和20年1月、19歳の時に入隊しました。軍隊では最初^{しばた}は新潟田に配属され、その後、昭和20年2月に朝鮮^{かいねい}の会寧に転入させられました。会寧^{かいねい}に行ってみると、そこには先輩の部隊がいないのです。どこに行ったかと聞くとフィリピン、南方戦線に行っているとのこと。私を含め、新兵ばかりが集まり訓練を受けました。その後、ソ連との戦いに備え、山の中に入り陣地構築と言って、「タコ壺^{つぼ}」という兵士が隠れる穴を掘る作業をしました。8月になると山を下りてこいということです。ウラジオストクに敵前上陸するからだというデマが流れたりしました。山を下りると、日本が

敗戦したことを知り愕然^{がくぜん}としました。武装解除するから満州^{まんしゅう}と朝鮮^{ちようせん}の境にある図門^{ともん}まで来いと伝令があり、これからどうなるかわからないと手りゅう弾を胸に入れて歩きました。道中では道路の両側に死体がゴロゴロ転がっています。ウクライナの戦争と同じ、民間人が裸で死んでいるのです。日本の戦車はおもちゃのようなもの、ソ連の戦車は5倍も大きい。そのような情景を目の当たりにしました。これじゃ勝てるはずがないと思いました。

図門^{ともん}で武装解除し、1日歩かされて延吉^{えんきつ}の仮収容所^{えんきつ}に行き、ここに20日程^{ほど}いました。その後、そこから移動するから、ソ連兵に200キロ(50里)を歩けない者は申し出ると言われました。残った者はどうなるかわかっています。みんな10日間必死で歩き、着いたのがソ連の領土のポシェットです。ここから貨車に乗せられ、帰国のために南に行くと思っていたら北上して行き、連れて行かれたのがコムソモリスクにあるラーゲリでした。北緯52度、零下20度～30度にもなる場所です。ここで3年間の生活を送るのです。



戦時中は「贅沢^{ぜいたく}は敵なり」が合言葉でした。「欲しがりません勝つまでは」「1億1心火の玉となって」、これらの教育がされていました。昭和19年、兵隊が足りないので20歳からの徴兵^{ちようへい}が19歳からに繰り上がったことにより、当時19歳の私にも昭和20年1月に召集令状^{しょうしゅうれいじょう}が来しました。



家族写真

子ども時代の写真

私は子どもの時、母の母乳が出なかったため、お米のとぎ汁で育てられました。それで現在98歳です。母親に感謝しています。私の父は明治35年生まれ、母は明治38年生まれ、母の弟は支那事変で戦死しています。そのため、私が軍に入る時に母は「勝、行かないで」と心の中で泣いていたようです。祖母は明治11年生まれ、妹は昭和5年生まれ。曾祖父は安政6年生まれです。曾祖父は私が日本へ帰って来た4年後、94歳で亡くなりました。



私は田舎にいました
が農業をやる気がなくて
東京に出たいと思って
いました。すると、
学校に東京の日立航空
機から求人が来て応募
しました。当時、中学
校は6年間でしたが3

か月繰り上げて、大学・専門学校は6か月繰り上げて卒業させられていました。そのため、私は昭和17年12月に中学校を卒業し、昭和18年1月に日立航空機に勤めることになりました。今でいう東大和市にあり、エンジンを作る会社です。私は人事係に配属になり、ここで昭和20年1月に軍隊に行くまでの2年間、事務を行っていました。男は軍隊に行かねば、いつ召集令状が来るのかなんて周囲の人と話していました。

昭和19年11月、アメリカのB29が立川の方から飛んできました。今でも覚えています。男性は

交代で防空監視を行っています。いよいよ日本が危ない、日本の高射砲では1万2,000m上空を飛ぶB29には届かないのです。やがて武蔵野の中島飛行機の工場が爆撃されたのです。そのうちに我が日立にも爆撃が来るだろうと思っていました。私は昭和20年1月15日に軍隊に行きましたが、案の定、私がいた日立の工場は、昭和20年2月26日に爆撃を受けました。130名が亡くなっています。私の知り合いも亡くなっています。私も軍に行かず工場に残っていたら爆撃の雨を受けたかもしれません。

昭和20年の歴史・背景

私が入隊した昭和20年の歴史・背景をお話します。私が会寧にいた2月にアメリカ・イギリス・ソ連の3首脳による「ヤルタ会談」という極秘の会談が開かれました。アメリカはスターリンに対し、間もなくドイツが敗戦するため日本を攻撃することを打診しました。日本とソ連は昭和16年から21年までの5年間は戦争をしない「日ソ中立条約」という不可侵条約を結んでいました。それを破棄して、スターリンは樺太やアリューシャン列島、北海道の三分の一を自国の領土とする要求を出したが、日本の統治はマッカーサーにやらせるということで断られたのです。

昭和20年3月に東京が大空襲を受ける、ソ連が日ソ中立条約を破棄、5月にドイツが無条件降伏、4月から続いた沖縄戦が6月に終わり、7月にポツダム宣言、8月6日に広島へ原爆投下、8月9日に長崎へ原爆投下です。8月8日にソ連が日本に宣戦布告をしました。皆さんのお手元に当時の読売新聞の特集記事をお配りしました。「日本軍捕虜50万人輸送せよ」、スターリンの極秘指令の全文が記載されています。日付を見てください。「1945（昭和20）年8月23日」です。終戦から何日経っていますか、わずか8日です。既にスターリンはヤルタ会談で自分たちの要求が受け入れられなかったため、その時点で日本人捕虜の連行を決め

ていたと言われています。これでは私たちが日本に帰れるはずがないじゃないですか。この指令文の中に私が抑留されたコムソモリスクについても書かれています。「コムソモリスク第199工場の建設に1万5千人を移送」と。我々はそんなことは知らない、日本に帰れると思って歩いて連れていかれたのがシベリアだったのです。

● 陣地構築の絵

これは山で陣地構築、いわゆる「タコ壺^{つぼ}」を掘る様子を描いた絵です。敵の戦車に突撃するために兵士が隠れる穴です。私は穴を掘りきらないうちに山を下り終戦を知りました。



「禿げ山の蛸壺」佐藤清 画

● 武装解除の絵

武装解除をした様子の絵です。命より大事な銃をごみの山のように没収されました。自分たちがどうなるかわかりません。日本人が経験したことの無い体験を私たちはこれからすることになるのです。その後、1日歩かされて延吉^{えんきつ}の仮収容所に入れられます。



「武装解除」佐藤清 画



「戦いは終って」小澤耕一郎 画

● 貨車の絵

日本に帰すからと言われ、身上調査を受け、私たちは特殊技能を調べられました。その後、我々は貨車に乗せられました。1車両に50人ほど乗せられました。ここではトイレが大変でした。男だから小は何とかありますが、大きい方は貨車を降りて野草の所で用を足すのです。そんなことを繰り返しながらコムソモリスクに着きました。



「綏芬河を越えて」佐藤清 画

● コムソモリスクの人口と死亡者数

終戦時20万人^{ほど}程の人口のコムソモリスク市内には14カ所のラーゲリがありました。終戦時に9カ所、翌年に5カ所が作られています。私は第4収容所に入れられました。ここで約1万3,500人が収容されましたが、そのうち2,500人が亡くなりました。ラーゲリでの死亡率は平均して全体で1割でしたが、コムソモリスクのラーゲリでは2割弱が亡くなりました。私は市内の工場や農場で水道管の埋設などを行い3年間過ごしましたが、これは運が良かったのです。山で木の伐採や運搬をしている人や、第二シベリア鉄道の建設に従事した人もいました。これらの方々は極めて死亡率が高かった。申し訳ない気持ちがあります。

● ロシアの地図



地図を見てください。ロシアは日本の50倍の土地があります。それでもまだ土地が欲しい、ウクライナが欲しいと言って戦争をしています。私は怒りを抱いています。国連がいけないのです。日本がもっと出てきてほしい、戦争をやめさせてほしい。いつも思っています。常任理事国のアメリカ・ロシア・中国・フランス・イギリスの拒否権制度を見直さないと戦争を止めることはできないと思います。そんなことを日々ニュースを見ながら思っています。残念でしょうがない。

● ラーゲリの建物の絵



「収容所内」田中武一郎 画

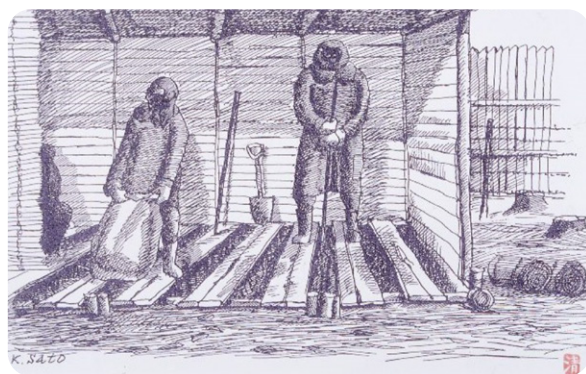
これはラーゲリの絵です。一遍に60万人もの日本人を連れて行ったので受け入れ態勢がありません。バラックがあるところもあればテントで過ごしたところもあったそうです。私のラーゲリでは2段ベッドに何人も入り、一人に毛布1枚だけ渡される。1枚の毛布を下に敷き、2枚の毛布を

上にかけて3人で抱き合って寝ました。ろくな食事ありませんので夏にはやせ細っています。入浴は裸で1列にならんで入ります。シラミが大変なので、着ている物は全て滅菌消毒、体毛は全てそり落としていました。非常に恥ずかしかったです。

● 死亡者の推移

死亡率の統計を取ってみました。抑留された日本人全体が60万人ですが、そのうち6万人が亡くなっています。亡くなった6万人のうちの7割が抑留から1年以内に亡くなっているのです。最も死亡者が多いのが昭和21年1月の死亡数6,861人です。抑留されてすぐに衰弱して死亡する方が多かったのです。私は若かったので「くたばってしまるか」という根性で生きていました。

● トイレの絵



「便所掃除」佐藤清 画

これはラーゲリのトイレの絵です。トイレは兵舎から80mぐらい離れていました。ドアは無い、吹き抜けです。零下20度・30度だと、便が凍ってしまいます。それを鉄棒で砕いて運びました。また、トイレットペーパーなんてありません。ロシア人はトイレットペーパーを使わないのでしょうか。紙もほとんどなく、ふんどしの切れ端を使ったりしました。

● 体格検査

「働かざる者食うべからず」と言いますが、若い女医が尻の肉をつまんで働けるかを検査するの

です。この検査で等級を決めて作業区分が決まります。1級は重労働、2級は準重労働、3級は軽作業、4級は室内作業を行います。私は2級でした。規律は厳しく、日本人特有の神経痛・リウマチになる人も多くいましたが、申し出ても聞き入れてもらえませんでした。体温が38度を超えないと休ませてもらえません。また、ノルマの達成率に応じて食料の配給量が決まりました。食事は主に配給される黒パンでした。

● 作業時

道路工事のためにつるはしを振り上げて地面に下ろしますが、土地が凍っているため鉄板のように跳ね返ってくるのです。そのため、^たび火をして氷を溶かしてから掘ろうとするがなかなか掘れない。しかし、仕事が進まないと食事が食べられないのです。私はなにも技術がないので外で働く仕事しかできません。しかし、床屋だった人はあったかい部屋でニコニコしながら兵隊の頭を散髪していました。その姿を見た時に自分も床屋になっていれば良かったと思いました。「芸は身を助く」ということを痛感したのです。

● 分配の絵



帰還者たちの記憶ミュージアム館内ジオラマ

これは黒パンの分配の様子です。食事は人間の本性が出るのです。だから平等に配らなければいけない。パンの角が当たれば味もいいし腹持ちもいい。だからくじ引きをして平等に分けようとしています。酸っぱいんですが、これしか食べる物がないので美味しくてしょうがないんです。

● 点呼の絵

これは作業に行く時の様子です。朝並んで点呼を取って歩きます。一人でもいなくなったら大変です。冬は日が上がるのが遅いので真っ暗な中で作業を始め、日が沈むのも早いので帰りも真っ暗でした。



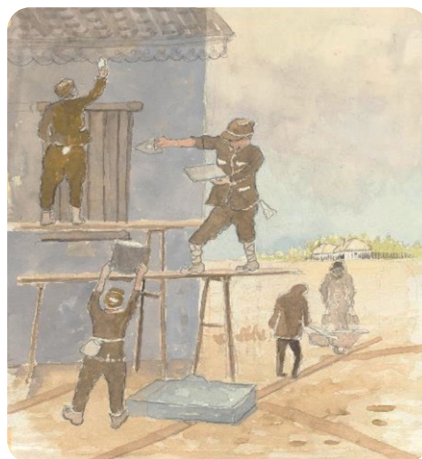
「朝の点呼」 斎藤邦雄 画

● 伐採

伐採は、山から木を切って下ろしてくる。防寒帽をかぶっており、作業中に、「おーい！木が倒れるぞ、危ないぞ！」と叫んでも防寒帽で聞こえないのです。そのため、木の下敷きになり怪我をしたり亡くなる人もいました。

● 建設作業の絵

これは住宅建設の作業の様子です。日本の国土再建と同じですね。ソ連は戦争で2,700万人、国民の2割が亡くなっており、国を再建するために我々を使ったのです。



「左官作業」 早田貫一 画

● 埋葬

亡くなった人は裸にして山に運んで白樺の木
の根っこに埋めました。火葬なんかしなかった。
だから、我々の合言葉は「白樺の肥やしになるま
いぞ」でした。

● 日記帳の写真

紙が無いのです。そのため、セメント袋の空き
袋を解体して紙にしたり、新聞の耳の空白の箇所
を切ってノートにしました。



● 手紙の写真

映画『ラーゲリより愛を込めて』にもありまし
たが、私も手紙を家族あてに書きましたが、最初
は書き方が悪く届きませんでした。当時、ソ連で
洗脳を受けていましたので日本の批判を書いた
ため届かなかったようです。その反省を生かして、
その後は手紙のや
りとりができるよ
うになりました。



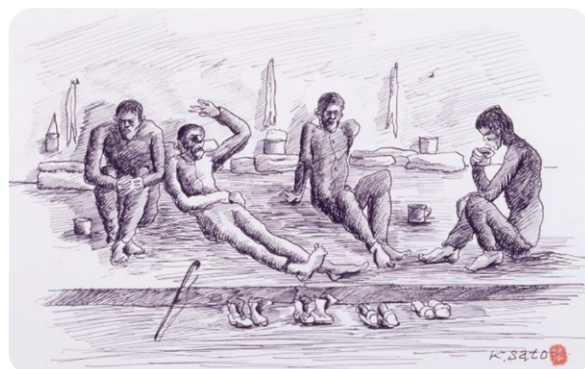
● ばれいしょ 馬鈴薯

これは私の経験ですが、道路の上に^{ばれいしょ}馬鈴薯
(じゃがいも) が落ちていました。馬車の荷から
落ちたのかと思いポケットに入れて持って帰っ
てから^た焚き火で^び焼いて食べようとしたのです。焼
けたかなと確認するとなんと馬の^{ふん}糞だったのです。

今では笑い話です。また、ある日、私は民家に派
遣されて作業をしたことがあったのですが、そこ
の奥さんがじゃがいものバター炒めを作って振る
舞ってくれたのです。これが^{おい}美味しくて忘れられ
ないのです。ソ連でも民間の中にはこのように親
切^{たくさん}な方も沢山いたのでしょう。なので民間交流を
続けてほしいと願っています。

● 病院の絵

これは病院の様子です。私は働きすぎて39度の
熱が出て倒れたことがあり、コムソモリスクの893
病院という病院に入れられました。ここで多くの方
が亡くなっているため、仲間からは「西倉は死んだ」
と思われていました。急性の胸膜炎だったのです
が5か月後に退院してラーゲリに戻りました。



「内科病室」佐藤清 画

私の話は以上です。我々の合言葉「国土の土を
踏むまでは、白樺の肥やしになるまいぞ」。戦争
ではこんなことが起きていた。こんな思いをお子
さんやお孫さんにさせないため、戦争は起こして
はいけないと思っています。ありがとうございました。

平和講演会・映画会（令和6年3月10日）

掲載内容は講演当時のものです。

帰還者たちの記憶ミュージアム 協力

奇跡的に助かった命

被爆体験



よしはま さちこ
吉濱 幸子さん

西落合三丁目在住
終戦時：14歳

私の広島での被爆体験を聞いていただきたいと思います。

私は子どもにも被爆の詳しい話は伝えておりません。ですけれども、今から78年前のあの恐ろしい被爆体験をみなさんにお話しすることが、何かの供養になるのではと思い、この場に立たせていただきました。

昭和20年8月6日、私が旧制の高等女学校の3年生、14歳の時の話です。私は^{てん まちよう}天満町（現：広島市）の三宅製針という軍需工場^{がくと どういん}に学徒動員として奉仕していました。お手元の地図にあると思いますが、^{てん まちよう}天満町は爆心地から1.2kmと非常に近いところです。



学徒動員に出る時の女学校一年生のクラス全員の写真

当日の朝、空を飛ぶB29の銀色の機体から、ブ

ルンブルンと不気味な音が聞こえていましたが、^{くうしゅうけいほう}空襲警報も^{けいかいけいほう}警戒警報も解除され、それぞれの持ち場について作業を始めた時のことでした。私は掘りかけの^{ぼうくうごう}防空壕の穴のなかで4～5人の友人と作業していたのですが、急に周囲がピカーッと光ったと思ったら辺りが黄色に包まれ、すぐにドカーンという^{ごうおん}轟音がしました。^{ばくふう}爆風で吹き飛ばされた破片が穴の中に次々に飛んできて、穴の中に伏せている私たちの頭上を埋め尽くしてしまいました。私たちは深さ1.5mの^{ぼうくうごう}防空壕の穴の中で気絶していました。

しばらくして穴から^は這い出してみると、周囲の建物は全て崩れ落ち、いたるところから火が立ち上り、朝なのにひどく薄暗く、「助けて」といううめき声が方々で聞こえます。まるで修羅場のようでした。私は友人と手を取りながら、^{こい}己斐（広島市西部）の山の方に逃げる人たちの無言の列に加わって逃げました。何が起こったのかわからずパニック状態でしたが、落ち着きを取り戻して周囲を見渡すと、焼けただれた皮膚がぼろのように腕から垂れ下がり幽霊のように腕を上げている人や、全裸で皮膚がテカテカに焼きただれたお母さんが赤ちゃんにお乳を含ませていたり、暗雲が立ち込めるゾンビの世界に舞い込んだような錯覚に陥りました。みんな、誰が言いたしたわけでもなく見たとおりの言葉で、「ピカドン」という爆弾が落ちたんだと口々に叫んでいました。また、逃げる途中でねっとりとした黒い雨にあたり、露出した肌にまとわりつき身も心も恐怖でいっぱいでした。

午後になって救援隊のトラックが来ました。友達の家がある「^{おおの}大野（現：^{はつ か いち し}廿日市市）」を目指し、そのトラックに乗って日本三景で有名な^{みやじまぐち}宮島口まで行きました。^{おおの}大野は^{みやじま}宮島の隣の駅なので、そこからは友達と二人でとぼとぼと歩き友達の家に着

きました。私の家は爆心地^{ばくしんち}の東^ひの比治山公園^{ひじやまこうえん}という小高い丘の東側のふもとにありました。とても家に帰れる状態ではなかったので、友達の家に2日ほど泊めてもらいました。その後、友達のお父さんに自転車の後ろに乗せてもらい家まで送ってもらうことになりました。



私の親友でもあり命の恩人の友人と
(左：本人 右：友人)

広島市内の入りの口^{こい}の己斐まではどうにか行けたのですが、そこから市内に入るのが大変でした。広島は市内に6本の川（当時は7本）が流れ、その川の三角デルタの上に発展した美しい街です。そのため、川を渡らないと家に帰れないため川に架かった鉄橋を渡る必要があります。鉄橋の枕木は全部焼け落ちていたので、残っていた鉄の部分だけをつかんでどうにか渡り切りました。渡っている途中で下^{のぞ}を覗いてみると、水を求めて入水し溺れた人の屍^{しかばね}がいかだのように流れていました。水に亡くなった女の人の黒髪がなびいて、川面が見えないほどの、「死の川」となっていました。

また、市内の道は、歩けないほどに焼け焦げた死体でいっぱいでした。まるで人の死体と思えないほど惨めな様でした。当時、空襲で建物が延焼しないように建物疎開^{たてものそかい}（あらかじめ建物を壊しておくこと）が行われており、壊した建物の後片づけを女学生や中学生の低学年、それから隣組^{となりぐみ}の人や在郷軍人^{ざいこうぐんじん}などが勤労奉仕の作業として行っていた。

ました。これらの作業を行っていた人たちは、遮蔽物^{しゃいぶつ}が無いまち中で即死状態で焼き尽くされたのだと思います。焼け野原では、いたるところで人・木・人・木と交互に積み上げた死体に重油をかけて燃やす処理をしていました。なんとも言えない死臭が漂い、足元は炭化した遺体で埋め尽くされていました。熱風と死臭の中を彷徨^{さまよ}い、本当に地獄より怖い悪魔の世界にいるようで生きた心地がしませんでした。

なんとか我が家^{たど}に辿り着き、両親・姉と対面しました。ですが、当時小学校2年生だった私の弟は、外で遊んでいた時に「直爆（直接被爆）」で死亡し、小さい骨壺^{こつぽ}に入っていました。私はこの時ほど命の儚さ^{はかな}を感じたことはありませんでした。これを機に奇跡的に助かった命で何かお役に立てる仕事をしたいと決心して、薬剤師の道を選びました。



かつて開業していた自宅兼店舗の
「とさわ薬局」

また、私の親戚や多くの広島で被爆した人の中には、皮膚の表面に黒い斑点^{はんとん}が出る所謂「原爆症」^{いわゆる}にかかり、一週間ぐらいで亡くなった人がたくさんいました。当時は火葬場も無いしお医者さんもないため、家族でお骨にするしかなく、遺体は家族で火葬しました。ですが、どうしても頭部が焼けなくて、家の仏壇に置いていたら、すすけた黒い顔面から白いウジが出たり入ったりしていました。身の凍える思いで、翌日再び火葬してお骨

にしたこともありました。

経験したことのない数々の修羅場に遭遇し、怖くて夜もおちおち眠れない日が続きました。私は5年制の女学校を卒業し、進学のために昭和23年に上京してきましたが、当時の東京駅はすすだらけで駅前は何一つない焼け野原でした。こんなところで生活できるのかと不安でしたが、親戚の家のある西落合^{にしおちあい}は東京大空襲を免れ焼け残っていて、現在もこの家に住み続けています。



薬局で研修の頃。
友人と共に

学校が焼失して半年後、瀬戸内海^{せとないかい}に面した呉線^{くれ}の安浦^{やすうら}にある旧軍隊の兵舎で授業が始まり、4年生の時は寮生活、5年生の時は自宅から通学しました。片道2時間かかるので、朝6時の汽車に乗らないといけません。朝5時に起きて暗い道を広島駅まで歩いていくのが危ないので、毎朝父が駅まで送ってくれました。

当時は蒸気機関車で、トンネルに入るたびに窓枠から黒いすすが入ってきていました。また、ある時は節電でトンネルに入っても電気がつかず真っ暗

な中で殺人事件があったりと怖いこともありました。

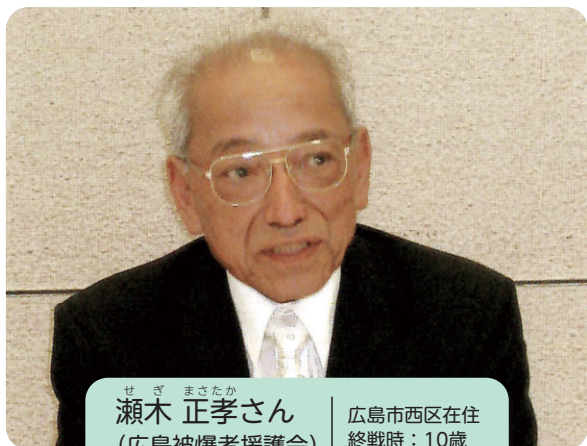
戦後の何もない時代でしたが、「ほしがりません 勝つまでは」の標語のとおり、国民が一致団結して戦前・戦後の貧しい時代を頑張ってきたおかげで現在の平和があるのだと痛感しています。顧みると、戦争ほど愚かで惨めなものはありません。ロシアのウクライナへの侵攻や、イスラエルのガザ地区での戦いを思うと、一日も早く停戦し世界中の人々が平和に暮らせることを祈るばかりです。悪魔の戦いは二度とあってはならないので核実験や核兵器の廃絶を叫び続けなければなりません。8月6日は、平和記念公園^{へいわ きねんこうえん}の傍の元安川^{もとやすがわ}でとうろう流しを毎年やっています。故人の冥福を祈り色々な思いを託し、ゆらゆらと揺らめき川を流れる様は心癒やされる一瞬です。



家族写真

すいとんの会（令和5年12月3日）

掲載内容は講演当時のものです。



瀬木 正孝さん
(広島被爆者援護会)

広島市西区在住
終戦時：10歳

祖母の家を抜け出して

被爆当時は満10歳で、小学校5年生でした。被爆で心に焼き付いたこと、2点を中心に話させていただきます。

私は、^{がくどう そ かい}学童疎開といって、広島から約70キロメートル余り北へ入った祖母の家に、3歳の妹、小学校2年生の弟、そして小学校5年生になったばかりの私と三人で、1945（昭和20）年の4月から避難していたんです。3か月も経つうちにだんだん両親に会いたいという想いが強くなって、被爆した8月6日の前日、弟と二人で広島行きの蒸気機関車に祖母に見つからないよう乗り込んで、^{ぼくしんち}爆心地から南西に約1.5キロメートルのところの自宅に帰りました。

光、音、そして吹き飛ばされて

あくる日の8月6日午前7時、^{けいかいけいほう}警戒警報のサイレンが鳴りました。起きると、父がもう警察官の制服を着て出ていくところで、「今日、田舎へ帰れよ。お祖母ちゃんに黙って帰ったらだめだぞ。」と言いながら家を出ていきました。その後ろ姿がこの世で父を見た最後になったわけです。

私の家の中庭には池があり、そのほとりに立って腰をかがみかけたその時に、目の前を真っ白な

光が走りました。口では言い表せないような強烈な光。その光と同時に地鳴りがあり、まるで頭の上から大きなドラム缶を叩きつけられたような強烈な音がし、バーンと体が持ち上げられるような音でした。その余韻が63年間一度も消えたことがありません。両方の耳が今でもワンワンと鳴っています。光。音。次に気が付いたら、池を飛び越えて約10メートル余り離れている風呂場のレンガの壁に叩きつけられて、上から物が落ちてくるので気が付いたんです。あたりが真っ暗。左足を動かそうとしたら別の所にいた弟が飛ばされてきていて泣いていました。頭に手をやってみると、血が流れていました。お母さんは真正面から^{ねっせん}熱線を浴びて、血だらけになって、皮膚がつるつとむけていました。中学校1年生の兄は、^{ばくふう}爆風で完全につぶされた家の柱と柱の間から真っ黒な顔をして「お母ちゃん、痛いようー。」と言いながら這い出てきました。その兄は、窓際へ背中を向けて寝ていたため、肩から下の身体の裏側にガラスが無数に刺さっていました。被爆から20年経ったくらいまでは、年に2つとか3つとか背中からガラスが出ていました。

お母さんってすごいなー

心に焼き付いたことの1つ目ですが、あれほど^{おおやけど}大火傷をしていたお母さんが、姿が見えない妹を探しに、柱の隙間へスルッともぐり込んだんです。お母さんってすごいなーとその時思いました。つぶれた家の下の方から白い煙が上り始めましたが、お母さんの動きは速く、わずかな時間で、病後で力なく泣いている妹を夏布団にくるんで出てきました。その時お母さんは、皮膚が取れかかり、ぶら下がっていた皮膚もちぎれ、そこから血が噴き出ていました。また、足の方も^{おおやけど}大火傷をしていましたが、母が「さあ、逃げよう。」と言って、一

緒に避難しました。避難場所では板塀が炎を上げていたので、更に南へ400メートル近く行った広い畑の中へ倒れ、座り込みました。真っ赤に染まった広島の空を見ながら、燃えている音が強烈なので、被災者のほとんどがその晩よく眠れませんでした。

親父おらん一

8月7日朝、私たちは、救護所になっていた江波国民学校へ行き、教室の隅へ夏布団を広げてお母さん、妹、兄と寝かせて赤チンを塗ってもらいました。お母さんが「お前は元気そうじゃけ、家の方へ行ってお父ちゃんを捜してくれ。」と言うので、私一人で焼け跡に出た時にびっくりしました。黒ずんだビルが所々立っているだけで、何処へ立っても広島中が見渡せたのです。自分の家をややく見つけ、板切れに燃え差しで「お父ちゃん、江波国民学校へおる。」と書いて、色んな所を捜し歩きました。

8月8日朝、お母さんが「今日は、お父さんが勤めていた県警本部のある県庁の方へ行ってみい。」と言うので捜しに出ました。鉄筋の県庁も完全に破壊され、県庁の南にあった日赤病院でも「親父おらん一。」と思って、病院の正面玄関へ出ました。ここで2つ目の心に焼き付いたことに出会いました。玄関前の築山の周りに真っ黒に腫れ上がった死体を放射状に並べ、5段、6段と重ねてあったのですが、一回りしかけた時に、長くて痩せ細り、^{すす}煤けた手の先が力なく何かをつかもうとするように動いていました。それを見た時にびっくりしました。頭の上から氷水をぶちかけられたようにぞっとして、次の瞬間、泣きながら300メートルほど走って逃げました。その後、時々その黒い腕に追かけられる夢を見るようになります。

ました。はっと気が付くと冬でも汗びっしょりで、それがずっと続いていました。1989（平成元）年11月に、ある団体から「体験話してくれんや。あんたらが話せんかったら原爆の被害が風化して忘れられてしまう。」と言われて一度話をしたら、不思議と黒い腕に追かけられる夢は見なくなりました。

生かされているからこそ

母親は、12月初めには火傷の方は相当良くなって、1946（昭和21）年2月に弟が五体満足で生まれてきました。翌3月に、父親の遺骨が県庁から送られてきて、中には焼けた砂と親指大の白い骨が1個入っているだけでした。妹は、3月くらいから髪の毛が抜け、鼻血が止まらないようになり、歯茎から出血、丸2年経った1947（昭和22）年8月に学校に1回も行くことなく亡くなりました。私は、被爆後50年目、1995（平成7）年に小さいガンがあると言われ、胃は全部取られました。一緒に逃げ帰った弟は肺ガンが見つかって、1997（平成9）年11月に亡くなったんです。生き残った被害者が僅かに浴びた放射線、これが大きな違いになるということです。

私が平和の基本だと思っているのは、一人ひとりが思いやりの心を持って、そして優しい心持ちで人間の命、生き物の命の大切さを、是非胸に収めておいていただくことです。そうすれば差別したり、人をいじめたりすることは必ずなくなっていくます。これを一人ひとりが実践し、やがてそれが大きくなって、戦争のない、争いのない地球を構築してくれると信じ、話をさせてもらいました。

平和講演・映画会（平成21年3月7日）

掲載内容は講演当時のものです。

最後の被爆者になること

被爆体験



いしはら ちえこ
石原 智子さん
(広島被爆者援護会)

広島市安佐南区在住
終戦時：0歳

私は、皆さんの前で偉そうに、広島^の被爆者ですと言える力が無いのです。というのは、私は(原爆投下の)翌年5月に生まれた胎内^{たいない}被爆者です。ただ、私にもできることがあるんじゃないかと思ったのが父の話だったんです。

父が、孫である私の二人の娘に対して一生懸命ゲートルの話をした時に、それを聞いた娘たちは「ハイソックスを買ってもらったお金がなかったの?」と聞いたんです。そして、鉄かぶとの話を父はわかりやすく絵に描いて教えました。すると、「フルフェイスのヘルメットの方が安全でしょ。こんなところを撃たれたらどうするのよ、じいは」って。娘は決して茶化^{ちやか}しているわけではないのです。父は、一生懸命話をしても孫の世代に通じないことを感じ、「お前がリリーフとして、俺の話をまず孫や若い世代に伝えてくれないか。そうしてくれれば自分たちは、たくさんのことを残していける」と言ったんです。確かに残してくれないと、話さないと、誰にも伝わらない。

私の両親は生きている間は、伝えることがつらいと言っていました。特に母は「助けてほしいと言った人を、誰一人助けられなかった。2歳から3歳の子が、助けて、助けてって言うのを助けられなかったことがとても罪悪感なんだ」と言って

いました。私は二人の子の親として、母の気持ちがわかるようになりました。

当時のことを私は語ることはできません。ただ、私でなければできないことがあるとしたら、全国から平和学習で広島に派遣されて来る子どもたちと同じ立場で、広島のこと、原爆のこと、戦争、それが語れるんじゃないかと思うんです。

私の両親は、アメリカが憎いと思ったかもしれませんが、私たちがの前で一度もアメリカを悪く言いませんでした。父は認定被爆者で入院、退院の繰り返しでした。多臓器がんです。がんセンターによく行っていました。もちろん許可を取ったうえですが、治療のために両手両足を縛られるんです。あまりにもつらそうなので、私は「父さん、アメリカってひどいよね」しか言えないのです。そんな時でも、父は「戦争が良くないんだ」と言ってくれた。でも、「原子爆弾ってやり過ぎじゃない」と言うと、「日本も毒ガスを作り、兵器を作り、地上戦に備えて竹槍^{たけやり}訓練をしたんだ」っていつも同じことを言い切るのです。「原子爆弾も人を殺す兵器なら、竹槍^{たけやり}の1本も人間を殺す兵器なんだ」と言った時、私は父にアメリカ人の彼女でもいるんだろうかなんて本気で考えました。だって、そんなこと言う人はいないと思っていたから。しかし、『どっちが悪い』を言っていたら、いつまで経っても平和にはなれない。戦争が終わった時点で考え方を考える人でなきゃいけない」と言っていました。

父は80歳まで生きてくれました。父から、「母さんのために1分でも1秒でも長生きしてくれ。お前にはそれしか頼まない。1回だって忘れないでくれ。最後の被爆者になってほしい」と言われた時、私は、啞然^{あぜん}としました。もっと難しいことを言ってほしいと思った。だって、それはできるでしょう。(原爆投下の)翌年の5月生まれまでを、広島^の被爆者と呼んでいます。私は、5月生まれ

の被爆者なんです。もう少し難しいことを言われれば私は一生懸命努力しますのに。

それから3年して母が同じように多臓器がんで亡くなった時に、父が言ってくれた言葉の重みを知りました。母は大きな声で「私は今日までお前たちがいてくれたから、元気で幸せに生きた」と言ってくれました。私の思う「元気で幸せ」は、入退院をしない人だと信じていました。家の用事をしたり、お勤めに行く人を元気だと信じていたのに。母はそうではない。生きて毎朝お日様が拝めること。そのことが健康で一番の幸せだと言ってくれました。

決して、皆さんに自慢できる両親ではありません。ただ、我が子が平和な世の中で少しでも長く生きて、たった一つでもいいから、社会の何か一つに携われる子になってくれればそれでいいと言ってくれた親でもありました。

私は広島で、ピース・ボランティアとして資料館の中のご案内などをさせていただいています。その時に欠かさず言うのは、原爆も東京大空襲なども一緒だということ。逃げ場が無いことの怖さ。防空壕ぼうくうごうに隠れたとしましょう。そこが安全だと言えるものはどこにも無いんです。そして、長崎であり地上戦をやった沖縄も全て一緒です。被爆者が特別ではないと言われて大きくなりました。

私の父が生きている間、戦争に負けて物の無い時、不平も言わず助け合ったからこそ、小さな島国が世界有数の経済大国になった、そのことが日本人の魂だと言って喜んでいました。私は日本人の両親や祖父母を持ったごく普通の人間ですけど、あの当時生まれていた人は皆被害者であり、犠牲者だということを私は両親から聞いて大きくなりました。当時の人が、我慢し、助け合いながら努力してくれたおかげで今の平和がある。じゃあ、この平和を私たちがずっと保っていかなくちゃいけない。そのためには、今日のお話のように風化させないこと。これは第一に大きな平和活動だと思います。

私が子どもたちに頼みたいこと。それは一人ひとりがチャンピオンだということです。一番って一人しかいないと思うんですが、実はそうではないんです。そうであつたら私なんかチャンピオンになれるわけがありません。どの教科もできません。駆けっこも比較的速いからと言っても一番にはなれません。私が「おはようございます」と大きな声で挨拶をするチャンピオンになったと入院している両親に言ったら、「良かったね。大きな声が出せるのは、元気だからだよ」と言ってくれました。「そのチャンピオンに推薦してくれた人は誰?」と聞かれたので、「クラスのこの人」と言ったら、「よく見抜いてくれたね」と言われました。見抜いてくれた優しさに感謝をする子になってほしいと伝えてくれた親の気持ち。元気で優しさをもった人になってくれるんならそれが一番嬉しいってことを言ってくれたこと。人の良い所を探してあげるからこそ、心の優しさ、思いやりを育てるんじゃないだろうかと思うんです。

私はよく平和活動しましょうとか言いますが、何をすればいいんだろうか。小さな団体、まずは家族です。家族であり、お友達であり、クラスであり、地域であり、そういった小さな団体が皆で仲良くすること。戦争がいけないのは当たり前ですが、戦争がないだけが平和じゃないんだよね。皆と仲良くできる日々の暮らし、これが何よりも幸せであり、それこそが平和なんだということを、皆でしっかり見つけてください。

私は自分にできること、こうして身近なところで顔を見ながら「今日、広島から来たんですよ。健康が私の自慢ですよ」と言える小さなこと。こんなことは、父の気持ちのとおりに、最後の被爆者になるまで続けていきたいと思います。

平和講演会・すいとんの会（平成25年3月10日）

掲載内容は講演当時のものです。



今までの記念誌と 一緒に振り返る 戦争のこと

区がこれまで発行してきた記念誌には、戦争を体験した人や、平和を願う人たちの言葉がたくさん記されています。本章では、これまでの記念誌と一緒に、その歩みを振り返りながら、登場した人たちの思いを紹介します。過去を^{たど}ることは、今の平和のありがたさを感じることに繋がります。受け継がれてきた思いを大切にし、未来へとつないでいきましょう。





戦中・戦後 あれこれ (思い出すままに)

空襲



寄稿

堀尾 慶治さん
下落合四丁目在住
終戦時：16歳

昭和20年4月13日の空襲で、洗い場（道沿いの湧水の所に造られた洗い場で、近所の人たちが共用していた）の崖の上のちょうど階段上、左側の3軒が焼夷弾の直撃で炎上。3～4メートルの路地と、炎上している家の庭を入ると対面の家の板塀まで10メートル以上離れていましたが、輻射熱で塀が煙を上げ始める火勢です。消火活動と言ってもわずかな水も無く、火叩き（竿の先に縄の束を付けたもの〈ハタキ〉、濡らして使う。当時、各家で命令で用意）や布で叩いて燃え上がるのを防ぐだけです。当時ほとんど断水状態が続いていたので、消防車など居るわけもなく、ただ布で叩いて見守ることしかできません。当時働き手の男性は、50歳前後か私たち中学生。家の間隔が昔は離れていたのと、樹木で守られ風が弱いので、直撃を受けた家以外の類焼は免れたと思います。消防の放水で助かった所など何処にもありません。装備、水、総じてどうすることもできなかったのです。

我が家は、運よく焼夷弾の直撃を免れました。その代わり、家が雨漏りするようになりました。調べたら、屋根に焼夷弾の尾翼が刺さってしまし

た。ご存じですか？ 焼夷弾は、寸法は覚えていませんが、直径10センチ大、長さ60センチぐらいの単体が、60本ぐらいの集合体で、それが鉄の留め板と帯で3段に束ねられ1個の大型焼夷弾になっています。それを投下中に空中で散乱させ落ちてくるのです。その尾翼部分ですから相当大きいものになります。それが屋根に突き刺さっていたのです。それと、鉄の留め板も多数落ちていました。終戦後まで記念に保存していたのですが、戦後の食糧難の時にくず屋に鉄くずとして良い値で売られ、お腹に収まってしまいました。今思うと、「記念品にしておけば…」と残念です。その焼夷弾は、日本の木と紙でできた家の為に開発され「モロトフのパン籠」というニックネームがついていたように記憶していますが…。

そのパン籠から焼夷弾がバラ撒かれると、ちょうど線香花火のように、沢山の火の玉が夜空からフリフリしながら降ってくるのです。その上には探照灯に浮かぶB29の編隊、下から撃つ高射砲も届かず、それも打ち上げ花火のように夜空に彩りを添えてくれました。見上げている我々は、楽しむどころではなく、いつ自分たちの頭上に焼夷弾が落ちてくるのかハラハラしながら見ていたのです。



私たちの下落合

私はどういう訳か、空襲には縁があります。

昭和17年4月18日、アメリカの艦載機^{かんさい き}B25によって初めて日本本土が空襲を受けた時、私は中学2年（府立第二十中 現都立大泉高等学校・附属^{おおいづみ}中学校）。ジフテリアにかかり、小滝橋^{おたぎし}にあった隔離病院の豊多摩病院に軽症のため入院できず、早稲田鶴巻町の岡崎医院に入院させられました。午後、空襲警報^{くうしゅうけいほう}も出ないうちに小型爆弾の洗礼。火災も起きていたので急遽避難^{きゅうきょ}。岡崎医院も被害を受け、屋上に干してあった私の中学の制服が焼ける被害を受けました。早稲田上空に飛来したのは1機ですから、それほどの騒ぎにならず、私も詳しい情報も持たずじまいでした。これも残念です。後から知ったことですが、本土数カ所を空爆し、太平洋上から中国本土へ抜けたとのこと。

次は、昭和19年7月に、サイパンが陥落し、11月からは本格的な本土空襲の幕開けです。最初に来たのは私たち中学4年生の勤労動員先^{きんろうどういん}の中島飛行機の武蔵野工場^{むさしの}。三菱と並ぶ東洋一の主要飛行機エンジン工場です。警戒警報^{けいかいけいほう}の中、工場の食堂で食事中に突然の爆発音。1トン爆弾の洗礼、サイレンが鳴り、「空襲だ！」との叫びに、皆地下道に避難。一緒に動員で来ていた府立六中（現都立新宿高等学校^{しんじゅく}）の生徒が避難していた地下道で、死者の出る被害を受けたそうです。帰る途中、工場の周辺には多数の1トン爆弾の20メートルぐらいのすり鉢状の穴が、爆発^{すさ}の凄まじさを物語っていました。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」
発行時（平成28年3月発行）のものです。



戦争は勝ち負けなどではない

軍隊



聞き取り

おお た とし お
太田 壽夫さん
終戦時：18歳

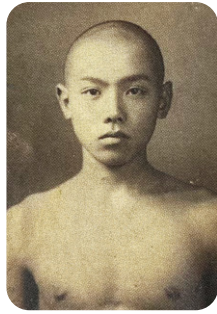
私の生まれは昭和2年、開戦時は14歳の学生です。住まいは新宿区^{しんじゅく}でしたが、昔の言い方ですと東京市淀橋区^{よどばし}と呼ばれていた地域に住んでいました。

昭和16年12月8日の朝、私はその頃、早稲田^{わせだ}の中学へ自転車に乗って向かっていました。登校中ラジオから軍艦マーチが聞こえてきて、開戦や、米英軍との戦いに突入といった内容も聞きました。私自身この時に戦争の恐ろしさを体験したわけではなく、わからないことが多かったですね。ただ本当にびっくりしましたよ。登校中の出来事だったので、学校に着いても開戦を知らない生徒もいました。

学生帽と、身には帯剣^{たいけん}を着け、巻脚絆^{まききゃはん}を巻き、

銃を担いで富士山麓の滝^{ふじさんろく たきが はら}原
や、千葉県習志野^{ならし の}で演習を重
ねたこともありますよ。

当時は体の丈夫な20代の
若者には有無を言わず召集^{しゅうしゅう}
令状^{れいじょう}という「赤紙」が送られ
て兵隊になったわけです。私
は17歳の時、召集^{しゅうしゅう}を待たずして「どうせ軍へ入
るなら」と、親にも大した挨拶もせず、ひとり志
願兵^{たちかわ}として立川にあった軍の適性検査を受けに
行ったんです。なぜ自ら行ったかといっても、志
願兵は陸海空の兵種を選べますし、そういう時代
だったのでね。そのまま福岡県大刀洗陸軍飛行学
校へ入隊しました。そこからは新兵としての訓練
を受けましたよ。宇都宮^{うつのみや}でも、グライダーの練習
をしましたね。その後、仙台^{せんだい}で第2師団第3中隊
に配属になり、飛行訓練で連日を過ごしましたよ。



身体検査の写真

料だけでなく、飛行機を飛ばす油もなかったわけ
です。だから、宗像丸^{むなかたまる}の前後は空っぽだったんで
すよ。それで私たちは船体後方に乗って台湾を目
指していたのです。しかし、前方に魚雷が激突。
船の頭は海水で下がりましたが、船自体は沈没せ
ず助かりました。余談ですが、戦争中、赤十字の
旗を掲げた船というのは、当時負傷兵が乗ってい
たものでね。基本は攻撃しない。人間の良心でしょ
うかね。そういうこともありましたよ。

その後、台湾の第74飛行場中隊となり、終戦
を知ったのは台北^{たいぺい}の山の中にある飛行場でした。
ここで玉音放送^{ぎょくおんほうそう}を聞いた時には先のことが全くわ
からなかったですね。復員後、地元に帰ると水道
管だけが残った焼け野原が広がっていました。母
と弟は岐阜県^{がくどう そかい}、妹は学童疎開しましたが、父は家
で空襲に遭いました。兵隊に出た自分が生き残る
ことができたこと、家族5人が再会できたのは、
運が良かったとしか言えません。紆余曲折を経た
青春時代でしたが、戦争は絶対にしないことです。
戦争は勝ち負けなどではないのですから。

一瞬のうちに焼土が広がり、多くの命が失われ
ることを知っていれば…。

青春は 夏の軍歌と ともに去り

中学5年の時の富
士山演習場にて。
すねにゲートル
を巻いている。



昭和19年4月1日、
大刀洗陸軍飛行学校
(福岡県)にて。当
時は一等兵だった。

昭和19年12月30日、私は第3航空軍に転属と
なり、南方へ向けて門司港^{もじこう}を出港しました。私た
ちが乗るのは油運送船^{むなかたまる}でね、宗像丸という船でし
た。この船はもともと船体の前後に油を積み運ぶ
船だったんですが、当時は何しろ資源がない。食



太田さんへのインタビュー

掲載内容は『新宿区平和都市宣言30周年記念誌』
発行時（平成28年3月発行）のものです。



がくどう そ かい 学童疎開の思い出

疎開



寄稿

かん の あきら
管野 晃さん
終戦時：12歳

昭和19年の新学期の頃だと思う。学童疎開が本格化し始めた。学童疎開というのは、太平洋戦争末期に、戦争の災禍を避けるため大都市の国民学校（昭和16年4月から従来の尋常小学校は国民学校となり、昭和22年に現在の小学校となる）児童を、農山村地域に集団的にまたは個人的に移動させることで、あのお宅は親戚の田舎へ疎開したというような話が、ちらほらと聞こえていた。

当時私は現在の新宿区代田町に居住し国民学校初等科6年生であったが、知らない土地へ疎開をするなら知っている場所の方が良いと思い、箱根岡田高原学園が疎開児童を募集していたのでそこへ行くことにした。箱根は風光明媚な所で、現在の小涌園の所を左に曲がり旅館の三河屋の右隣にあり、夏休み中であつたにもかかわらず、2日陽が照って少し焼けたかなと思うと、1日雨が降り、雨の多い所だという印象があつた。とは言え、食事は少なく食生活は決して良いとは言えなかった。

そのうち東京では、集団疎開の準備が進み、改代町は栃木県上都賀郡加蘇村下久我にある常真寺というお寺へ行くことになった。そこは、現在のJR日光線の鹿沼駅から三里半ぐらい入ったところで、現在は鹿沼市になってしまったらしく地図

を見ても確認できなかった。私はその中に妹がいたので合流した。妹の話では、往路は貨車で、鹿沼を下りてからはトラックだったとのことである。

寺での集団生活は、始まりの1週間ぐらいの間は泣いていた子どももいたようだが、楽しいと言うまではいかないが、極端なケンカやいじめのようなことも無かったように思われ、概ね順調にいったのではなかったか。

ここでの集団生活を思いつくまま記してみようと思う。

まず悩まされたのはノミとシラミで、ノミは畳に潜っているのか、布団に住み着いているのか、喰われれば痒いのは当たり前だが、布団の裏はノミの糞の黒い跡が、赤飯に胡麻を振り掛けたようになっていた。

次はシラミで、下着の縫い目にびっしりと提灯行列のように並んでいた。寮母さんたちが熱湯処理をしてくれたので、被害は少なくなった。他の寮では、家恋しさか児童が脱走を試みたということもあった。

悲しいこともあった。一人の女の子が、腹痛を起こしたが、治らないので鹿沼からお医者さんが来たが、亡くなってしまった。後で聞くとところによれば、腸閉塞とか腸捻転とか言っていた。現在ならば、このようなことには絶対にならないと思う。

戦争は、いつの時代でも、一番弱い者にし寄せが来る。理由などない。戦争は反対だ。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」
発行時（平成28年3月発行）のものです。



がくどうしゅうだん そ かい 学童集団疎開

疎開

寄稿

ま なべ しげなが 下落合四丁目在住
眞鍋 重命さん 終戦時：11歳

おちあい 昭和19
落合第四小学校の第一次^{しゅうだん そ かい}集団疎開は、昭和19
年9月23日に疎開先の茨城県笠間市の西念寺、龍
泉院、不動院に出発しました。お寺が陸軍の兵舎
として^{しゅうだん そ かい}接收されたため、第一次^{しゅうだん そ かい}集団疎開の児童た
ちは、内陸部である群馬へ再^{そ かい}疎開します。東京空
襲が日常的になり、第二次^{がくどう そ かい}学童疎開が促進され、
東京に残っていた児童たちも疎開することにな
り、群馬県佐波郡玉村町の高橋寮、常楽寺、東栄
寺、法蓮寺に疎開します。この^{がくどう そ かい}学童疎開をまとめ
た記録「僕たちの戦争 学童集団疎開 落合第四
小学校」より掲載します。

「出発の朝」より

出発の儀式は^{きょういくちよくご}教育勅語の奉読からはじまる。教
頭先生が校庭東側にたてられた石造りの^{ほうあんでん}奉安殿か
ら、^{うやう}恭しくとりだした^{きょういくちよくご}教育勅語を黒漆の角盆にの
せて校長先生のところに運んでくる。校長先生が
^{ちよくご}勅語を奉読されるあいだ、僕たちは腰を深くまげ、
頭をまっすぐに伸ばした最敬礼の姿勢で聞かなけ
ればならない。周囲には見おくりの家族が心配そ
うな顔でみまもっている。せめて空襲のない安全
な地方に子どもを^{そ かい}疎開させられれば。心は張り裂
けそうだったろう。そして、これが最後の別れに
なった家族もいた。校門をでると、まず^{ひ かわじんじや}氷川神社
へ参拝。ぶじに東京へ帰れることを祈る。ひろかつ
た境内は、いつもなら子どもたちの遊び場だ。

日の丸の旗と校旗を先頭に^{め じろ}巡查に引率され、隊
列をくんで目白駅まで行進。道の両側には^{め じろ}残留児
童たちが見おくりになつ。家族は駅まで送ってく
る。いざお別れとなると決意の下から不安がゾロ
ゾロと首をもちあげる。「泣かないぞ。もうイッ
チョマエの少国民なんだから」



目白駅に向かって（「僕たちの戦争 学童集団疎開 落合第四小学校」より）

「ホームシック」より

^{じょうばん}常磐線下り列車が^{いわ ま}岩間駅に到着する。^{りゅうせんいん}龍泉院組
と^{ふ どういん}不動院組はここで下車。駅を出るとウキウキと
足どりも軽くそれぞれのお寺にむかう。

^{りゅうせんいん}龍泉院は^{あた ごさん}愛宕山の麓に立っている。二つの溜め
池を東西に分けるように立つ、大きな桜並木の道
から、すこし坂を登ったところにある大きなお寺
だった。本堂の外陣に男の子と女の子が左右に分
かれて^{ふ とん}蒲団を敷く。内陣の右脇の部屋に男の先生
二人、左脇の部屋に寮母さんが二人、寝泊まり
する。

先に到着している^{ふ とん}蒲団や^{こうり}行李を各自が受けとる

と、さっそく枕投げがはじまる。泊まりがけの遠足の気分だ。しかし寝る前の枕投げのハシャギぶりは三日ともたなかった。東京が恋しくて、本堂の柱の陰で一人が泣く。それはアッという間にみんなに伝染した。

そんな僕たちを少しでも慰めようと村の人々は、それぞれの家へ二・三人ずつの児童を引きとり、一泊させて家庭の味を味わわせてくれた。それで父さんや母さんのいる東京へのホームシックを一時的とはいえ、忘れることができた。

村の人々の力によって僕たち龍泉院の疎開児童

は、食料に不自由することはなかった。

『龍泉院はとてもよいところです』『ご飯も美味しいです』とハガキに書いて東京に送った。それを読んだ二年生の妹が「わたしも早く集団疎開に行きたいな」と憧れた。

先生、龍泉院の住職、奥様、檀家さん、惜しみなく物心両面で子どもたちを援助して下さった多くの村の人々。いま僕たちは心からなる感謝を捧げます。「どうもありがとう。本当にありがとう」

(「僕たちの戦争 学童集団疎開 落合第四小学校」より)



疎開時の苦勞が 戦後の私の礎に

疎開



聞き取り

おおさき ひでお
大崎 秀夫さん
筆筈町在住
終戦時：10歳

生まれたのは江東区こうとうくの富岡八幡宮とみおかはちまんぐうの近くで、家は材木問屋でした。私は8人兄弟の3男坊です。兄たちが次々召集されて、富岡八幡様へ旗を持って、見送りに行ったのを昨日のことのよう覚えていて。戦争を意識したのは、それが最初ですね。

そのうち兄弟のなかで私だけ集団疎開することになりました。通っていた平久小学校へいきゅうの疎開先は新潟の弥彦村やひこむらで、寮は弥彦神社やひこじんじやのすぐそばの駅前

にあった山田旅館です。

疎開中で何が一番、辛かったかという土地元の子どもたちに「疎開、疎開」って、いじめられたことです。私は体が小さかったですが、負けん気が強かったので、10人くらいの上級生にも体当たりして向かっていきました。その後は、いじめもなくなりましたね。

あとは靴がなくて、裸足で学校に通っていたのを思い出します。雪が降っても裸足だから、周りの人がびっくりして、寮のおばさんが長靴をくれました。食べ物なかったのも辛かったね。寮のご飯では足りなくて、近所の農家で作業を手伝って、おにぎりをもらったりして空腹を凌いでいました。考えてみたら、地元の人たちにはずいぶん良くしてもらいましたね。

^{そ かい}
疎開中は普通、親が面会に来ます。うちは一度も来なかったけど寂しいとも思いませんでした。親が来て「かわいそうだ」といって、東京に連れてられて帰った子は、3月10日に亡くなりました。終戦後もうちだけ迎えがなくて、いよいよ孤児院に入るといふ2日前に親父が来たのだけれど、感激もなかったですね。

東京に戻ってしばらくして、また私だけ茨城で暮らすことになり、1人で1年半ほど暮らしました。まだ小学生ですよ。でも、うさぎを繁殖させて売ってお小遣いを稼いだりして、たくましく暮らしていました。

そうやって戦中・戦後と苦労して、生きながら

えたのだから、少しでも長生きして、地域のために役に立ちたいという思いがありました。また人の情けがわかるから、頼まれるとイヤといえない。それで、気がついたらさまざまな役職を引き受けて、今日があるというわけです。小さい時の試練^{いま}は未だに忘れないですし、その経験が今の私の基礎になっているのは間違いないですね。

今の子どもたちには、礼儀や感謝を伝えることの大切さを学んで、親を大事にしてもらいたいです。そうすればこれからの日本も良い国になると思います。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」
発行時（平成28年3月発行）のものです。



^{そ かい} 忘れられない疎開先での出来事

疎開



聞き取り

おおもり たもつ
大森 保さん
市谷台町在住
終戦時：8歳

開戦当時は4歳でした。前から「戦争がありそうだ」と父から聞いていたのと、^{いち が や}市ヶ谷に住んでいて大本營が近く、^{だいほんえい}沢山軍人さんがいたために情報が入っていたので、「始まったのかな」と思っただけでした。

昭和20年3月10日の大空襲を見て、おふくろ

が子どもだから危ないというので、実家がある茨城県の日立^{ひたち}に疎開^{そ かい}させられました。当時、小学一年生でした。日立^{ひたち}に避難しても日立製作所が国営の工場になっていたの、狙われて艦砲射撃^{かんぱうしゃげき}にありました。戦艦^{せんかん}とか大きい船が海の沖にずっと並んで、一斉に大砲で攻撃してきました。工場がほとんど壊滅したところもあるくらいでした。何発かは工場を通り過ぎて町に落ち、死人も出ました。幸い私は、おじいさんにおぶわれて逃げて助かりました。

^{そ かい}疎開中、ロッキードP38にも追いかけられました。すごい勢いで急降下してきました。神社のお

社には木が生い茂っているので、その中に逃げ込むと上からはわかりません。そこに穴を掘って防空壕を作り、友人とみんなで隠れていました。穴の中から覗くと向こうからおばあさんが来ました。一生懸命駆けていたけれど、間に合いませんでした。おばあさんは水を張ったばかりの見晴らしの良い田んぼのところで撃たれてしまいました。機銃掃射ですからもう体はめちゃめちゃで、血がぱっと散っていました。今でも夢に見たり、思い出したりすることがあります。



昭和22年頃のバラック

終戦当時は8歳でした。当時ラジオもありませんでした。おじいさんおばあさんの年代の人は漢字が読めない人も多く、新聞をとっている家も何軒とありませんでした。12時に何か放送があると聞き、おじいさんが庭の挿し木にラジオをひっかけて近所の人に触れ回りました。全部で20人くらい集まって聞きました。

あまりいいラジオでないのでざわざわして、さらに古い言葉で言われるのでちんぷんかんぷんでした。おじいさんが朝鮮総督府の書記官をやっていたので意味を説明してくれて、日本が負けたことを知りました。みんな唖然としていました。子どもがみんな戦争に行っている人が多く、中には泣きだす人もいました。これは大変なことになっ



焼け跡に倉庫と庭園の石塔、風呂屋の煙突が見える。(昭和22年頃)



焼け跡に水道管が見える。(昭和22年頃)

たなと思いました。これからの生活の心配というより、戦地に行った人が、負けてどうなるだろうと心配していました。

平和はすごく大事なことです。ただ、平和なのが当たり前だと感じているかもしれませんが、決して平和なのは当たり前じゃなくて、自分たちが考えて、積み重ねて、こしらえていかないとけないと思います。何百万と戦死した人もいますので、そういう人たちが何のために戦ったのかというのを少しでも、一歩でも、理解するようにして欲しいです。今ある平和を積み重ねていてください。平和に浮かれすぎないで大事にして欲しいです。



大森さんへのインタビュー

掲載内容は『新宿区平和都市宣言30周年記念誌』発行時（平成28年3月発行）のものです。



「銃後」の戦争体験

勤労働員



寄稿

おおたけ よししげ
大竹 良重さん
榎町在住
終戦時：17歳

平和日本の今日では、既に死語に等しくなった「銃後」が私の戦争体験の場である。

昭和19年末から翌20年の戦争も終焉に近づいた時期の体験は、心に鮮明に残っている。

当時私は満17歳、紛れも無い軍国少年の一人であった。同年で軍隊に志願する者が周囲にも少なくなかった。工業学校生徒であった私は、学徒動員の一人として、東京都下小金井町の軍需工場に派遣された。工業学校ということで十分な訓練も受けぬまま旋盤部門に配属された。工場の人員構成は、男子女子の動員学徒と一般徴用工で大半を占め、熟練工と目される人材は徴兵の影響か、非常に少なかった。工場は海軍の水中聴音機（ソナー）を造っていると聞かされたが、終ぞ完成品を見ることは無かった。

昭和19年の11月頃から米機の本土空襲が活発になった。記憶では、昭和20年4月7日午前10時頃に、その年何度目かの空襲警報が発令された。従業員は工場の命令で作業を中止して工場グラウンドに掘られた簡易防空壕に分散して避難した。狭く薄暗い壕内で仲間と空虚な会話を交わしながら、真上を通過するB29の爆音を漫然と聴いていた。

何分か経って、気配で安全を確認したか、一人

が壕を出ると、次々と皆が明るい外へ出た。

爆音の中上空を見上げると、真っ昼間、B29の編隊が1万メートル近い高空をゆうゆうと、我が物顔に飛行していた。翼がキラキラ光っていたのが強い印象として残っている。軍国少年は拳を固めていたに違いない。

我々の工場の真上を通過したB29の編隊が、三鷹あたりの上空で爆弾と思われるキラキラ光る物体を降り注ぐように投下しているのが遠望された。三鷹には中島飛行機の主力工場があり、以前にもB29の標的にされている。

投下から、何秒かすると、何か体に微震が伝わった。他の従業員も感じた様で、工場内に一瞬異様な雰囲気漂った。

250キロ爆弾を含む多量の着弾で、中島飛行機では、動員学徒や徴用工も入った多数の従業員が犠牲になっている。ということが現実だと思っても、当時の我々は「悲愴」な気持ちは湧かなかった。戦争のもたらす非情さと、心の奥に「明日は我が身」という思いがあったことも否めない。

更に、遠望とは言え、爆弾が雨のように投下されるシーンを見ながら何を思っていたのかは定かでないが、不条理はすべて戦争遂行のためという理屈のもと、自己欺瞞が加わって納得し非情になっていたとも思う。

平和な今日では、建築現場でボルト1本を落させても問題化する。状況を前者と比較すれば、平和の尊さを取って論ずることも無い。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」
発行時（平成28年3月発行）のものです。



寄稿

みやざき れい こ
宮崎 玲子さん
北町在住
終戦時：15歳

当時は、短期の^{きんろうほうし}勤勞奉仕ではなくて、工場への労働も強制されました。太平洋戦争下では成年男子が兵役に駆り出されたため、労働力が逼迫しました。昭和16（1941）年に、14歳（数え年）から25歳の未婚・無職の女性を強制的に工場などの労働力とする^{きんろうどういんちようよう}勤労働員徴用に関する法令が国家総動員法に基づき制定され、主に軍需工場の労働に当てられました。未成年学徒及び国民学校高等科卒業以上の女性も労働要員とされて、その中には国民学校高等科や女学校の生徒から店員や家事手伝い、花嫁修業中の人なども含まれていました。当時日本領であった台湾、韓国、南樺太の女性も同様の^{ちようよう}徴用を受けました。日本では一般女性が軍務関係で働かされることは少なかったと思いますが、イギリスもこの制度が適用されて軍務関係でも働いたそうです。

秋の稲刈り^{きんろうほうし}勤勞奉仕が済んだ11月、私たち2年生は軍需工場への動員となりました。すでに上級生は工場に通っていました。学校の生徒でありながら、授業を全くせずに、直接工場に行き作業をする毎日が始まりました。仕事は^{しんかん}信管（弾丸の先につけて炸裂させる部品）作りでした。^{そかい}疎開前

の東京に残った同級生は、計器に夜光塗料を塗る作業にあたり、塗料には人体に影響を及ぼす成分が含まれていたそうです。彼女らは状況が悪化して材料が滞り、最後はやることなしに遊んでいるだけの状態もあったといいます。

同じ頃、中学生は^{しょうこん ゆ}松根油の材料としての松の大木の根を掘るために動員されました。平成23（2011）年の東日本大震災で大きな被害を受けた^{りくぜんたか た}陸前高田では一本の松の木が残りましたが、あの松原も戦時中に大分切り倒されてその根が使われたと聞きます。^{しょうこん ゆ}松根油は松の根を^{かんりゅう}乾留して得たテレピン油の一種で、航空燃料にしようとしていました。

私は別に具体的な不調はなく健康だったのですが、生まれつきの顔色の悪さ（面の皮が厚くて血の気が見えない？）や、やや細めだったためか、身体検査で工場動員から外されました。外見だけで健康を判断する時代でした。工場に通う同級生から不心得者と白い目を向けられ、学校は楽しそうと^{うらや}羨ましがられ、また親が手をまわして工場動員を避けたのではないかと疑われて肩身の狭い思いでした。これが後日、本当に体調を崩す原因となったのでした。しかし、毎日遊んでいたわけではなく、在校生（1年生と専攻科生）用の給食の味噌汁作りや、職員室の掃除、日ごとに増える^{そかい}疎開転入生の世話などに忙しく過ごしました。特に味噌汁作りは前日に汁の実を刻み、当日は1時間以上前から大釜で薪を焚いて行う不慣れな仕

事で、工場の方が楽かとも思いました。

私はどういうわけかこの学級に属してから少しずつ体重が減り始め、毎日胃が痛くなりましたが、地元の日赤病院に通っても消化薬を処方されたのみでした。その頃の食糧不足や、食養生の悪さも響いていたと思われますが、後にこの不調はストレスによるものではないかと判断されています。

高等小学校1年生は、現在の中学校1年で13歳ですが、彼女らも勤労の日々となりました。午前中は目的不明の穴掘り、午後は錆びた鉄棒の錆び落として、錆で真っ赤に汚れた手は土で落として帰路についたそうです。毎朝「花もつぼみの若桜

五尺の命ひっさげて」と学徒動員の歌（作詞・野村俊夫）を歌って働きました。ごくわずかな報酬は郵便貯金に振り込まれましたが、戦後のインフレで、貯金が下ろせるようになった頃はほとんど価値を失ったといいます。また勤労学生への特別配給された下駄は台のみで、鼻緒を手作りしなければ使えませんでした。同じ年齢でも女学校では1年生の工場動員はされませんでした。外地に住の人たちも、女子学生や小学生まで同様に勤労動員に駆り出されたそうです。

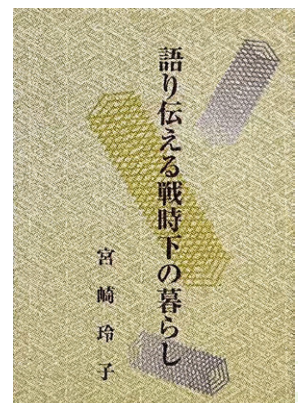
当時の学校の予防医学は実に粗末でした。虚弱者のクラスには、結核で長期間休み快復して工場

へ戻るまでの準備期間として登校している者もありました。当時はゴホンゴホンと言いながらも熱が下がれば快癒とされていました。私は5月の身体測定の際に、それまで陰性だったツベルクリン反応で腕全体が腫れるほどとなり、落ち始めていた体重は25キロまでやせ細って、みっともなく人前に手足が出せなくなりました。

終戦で授業は平常に戻り、翌年父が戦地から帰還しました。食糧事情は最悪でしたが、充分ではなかったにも拘らず、私の体調は急に快復したのでした。

（「語り伝える戦時下の暮らし」宮崎玲子著より）

語り伝える
戦時下の暮らし



掲載内容は『新宿区平和都市宣言30周年記念誌』
発行時（平成28年3月発行）のものです。



当時の教育方針と戦後の想い

戦時・戦後の暮らし



聞き取り

や じ ま あ き ひ ろ
矢島 明廣さん
終戦時：18歳

太平洋戦争が起きた時、私は15歳で現在の西新宿である淀橋区に住んでいました。現在の日本は、民主主義の教育を受けている人ばかりですが、当時は軍国主義でした。その当時の教育方針は、自分を犠牲にしても国や仲間のために働くことが大切ということです。私たちは軍人や軍隊は偉くて、国を守って立派な人たちと信じていました。学校や新聞・ラジオでも、子どもの頃から教育されていました。そして、昭和16年に戦争が始まった時、誰もが緒戦の勝利を喜んでいました。今では考えられませんが、戦争の始まりは全然暗い気持ちにはならず、むしろ明るかったように思います。

戦争が始まってからというもの、物資不足は深刻になり餓死した人もいました。特に着るものや食材が不足していました。毎日、生きていくのに精一杯でしたが、戦争だから仕方ないと思っていたのです。空襲に遭う前は、親が一生懸命働いてくれたおかげで普通の生活はできていました。しかし、空襲に遭って淀橋区はすべて焼けてしまい、街全体が貧乏になってしまいました。

終戦の年、私は18歳で学生でした。家が焼け

てしまったので、上野にいる友だちの家に居候していて、親は山梨に疎開していました。終戦の日には学校にいましたが、学校もすべて空襲で焼けていました。玉音放送は、初めて聞く天皇陛下の声だったのです。この時に思ったのは、ただ戦争が終わったということだけでした。悲しさも悔しさもなく、むしろ茫然としていました。

その後、学校で列を作って田町から皇居前の広場まで歩いていきました。周りの風景はほとんどが瓦礫で、原っぱみたいでした。私たちは皇居前まで行って、最敬礼をしました。泣いているかどうかはわからないけれど、多くの人が、砂利の広場に正座してひれ伏していました。



太平洋戦争末期の
東京大空襲

これから、空襲はなくなるが、日本がこの先どうなるのかはわからない。皇居前で頭を下げた時は、天皇陛下も気の毒だなという気持ちでした。私たちもだけれど、天皇陛下もこれから先どうな

るのかわからない。不安ばかりが募っていました。
戦争が終わって私たちは、また黙々と学校へ戻りました。

やがて数カ月して、父と私は元の住居に戻るため、焼け跡の瓦礫^{がれき}を片付けはじめました。淀橋区^{よどばし}は見渡す限りの焼け野原で、点々と焼けトタンのバラックが建つ惨めな姿でした。小学校は、プールの中が教室だったそうです。

しかし、近所の人たちに会うと、こんなになっても故郷へ戻った安堵感^{あんど}がありました。故郷は大切に守りたいですね。



矢島さんへのインタビュー

掲載内容は『新宿区平和都市宣言30周年記念誌』
発行時（平成28年3月発行）のものです。



平和への課題

戦時・戦後の暮らし



聞き取り

つじ たろう
辻 彌太郎さん
高田馬場四丁目在住
終戦時：16歳

太平洋戦争が起きた昭和16年は、12歳で中学生でした。太平洋戦争が始まったことは家のラジオで知りました。学校では友だちと、「とうとう戦争が始まったな」などという話をしました。戦争中の暮らしは、さほど普段と変化はなかったように感じます。学校では授業で「三八式歩兵銃」^{さんぱちしき ほへいじゅう}

の訓練をしたり、現在の早稲田大学理工学部がある場所に射撃場があったので、本当の弾を使って練習したこともありました。

戦後、そこには米軍の兵隊さんも来ていました。でも彼らはカービン銃を使っていて、日本とアメリカの差を感じました。ほかには、三八銃^{さんぱちじゅう}を持って10キロ歩かされたりしたこともありましたよ。当時は10キロなんて軽いものでした。

そして海軍飛行予科練習生^{かいぐんひこうよかれんしゅうせい}（通称：予科練^{よかれん}）で飛行機の訓練をすることができました。予科練では、毎日操縦訓練を行い、卒業生は飛行機乗りとって特攻に行くのです。お国のために死ぬとい

う隊長がほとんどで、私の友人も3人亡くなりました。しかし、隊長の中には生きて帰ってこいという方もいて、帰ってきた友人もいました。

戦争中よりも戦後のほうが食糧難はすごかったですよ。当時の主食は、かぼちゃやさつまいもでした。とにかく食糧の調達には最善の努力をしました。さつまいもの葉は甘くておいしかったけど、かぼちゃの葉はどうしても食べられませんでしたね。電車で食糧を買いに行くこともありましたが、帰りに検問^{けんもん}に引っかかってしまうこともしばしばあって、その時は本当にショックですよ。仕方ないとは思いますが。でも、学生服を着ているとまねに通してくれたことがありました。やはり食べ盛りの時期に、十分な食事が取れないことは辛い^{つら}ことだったし、当時の学生は今と違って勉強より体力づくりだったから、エネルギーになるものなら何でも食べるのが当たり前でしたね。

そして終戦の時は、中学校を4年間で卒業して大学に入学した年で16歳でした。その時は、天皇陛下のお言葉があるという情報が世間で流れていました。なんとなくだけど自分の中で「戦争が終わったのかな」などと考えていました。天皇陛下から終戦のお言葉を聞いた時は、ホッとしましたよ。でも、良かったと喜ぶ人はなかなかいませ

んでしたね。そういえばテレビドラマで戦争の物語を観ると、戦地に行く兵隊たちを送る時に涙を流したり、泣き崩れている描写がありますが、そのような光景は見たことないです。むしろ、「お国のために頑張れ」と応援している人が多かったように思います。

若い世代の方々に伝えたいことは、「自分の身は自分で守る」ということです。平和を続けていくには無関心では続かないと思います。戦後70年一度も戦争をしていないというのは、平和憲法があるから平和を守っているのか。それとも、ほかに理由があるからなのか。これは、今後のみんなで考えなければいけない課題だと思いますね。



辻さんへのインタビュー

掲載内容は『新宿区平和都市宣言30周年記念誌』
発行時（平成28年3月発行）のものです。



ハングリー精神が、 日本を変えた

戦争を体験して



聞き取り

ももたに あやえ
百瀬 文枝さん
富久町在住
終戦時：18歳

戦後私は、^{こうえん}高円寺に住んでいました。焼け野原が散在している中、^{こうえん}高円寺駅の近くは、戦火を免れ、小さい店が並んでいました。その中で、焼け跡から集めてきたのでしょうか、焼け焦げたミシンの本体が、店の屋根より高く山のように積んでありました。ミシンを再生し、商売しようという先見の明があったのは、「石田ミシン」でした。

間もなく、店先には、金文字入りの“シンガー”“蛇の目”“三菱”等のミシンが並び、衣類の無い時代に自分で服を作ろうと求められ、飛ぶように売れて、人々を楽しませたのです。

日本人は、ほっそりしているイメージだけれど、精神力はとても強いのです。なぜなら、ハングリー精神があったからなのです。お金のない人は、良い物を作らないと^{もう}儲かりません。物はすべて、ハングリーでなければ作れないのです。

人は、実際に遭遇して実感を得るものなのです。想像というのは、実感が伴わないためにわからないのです。太平洋戦争が始まった時、私は14歳でした。今はテレビがありますけど、この時代にはどこのお家にもラジオしかないですから、戦争を目で見ることはありません。ですから、実感まで湧きませんでした。戦争中はパジャマなんて着ていられず、防空頭巾を傍らに置き眠りました。

毎日、空襲警報で目が覚めているから、肉体的にも精神的にも辛い毎日でした。そして、アメリカ軍の飛行機が低空で飛来したので、私が宮城のお堀にある防空壕に飛び込もうとした時、ふと真上に見たアメリカ兵の顔が、人参の色に見えたのが、忘れられません。少し遅かったら、やられていたかもしれません。しかし、この話を聞いて、戦争はこうだったんだと、戦争を言葉だけで理解することは難しいと思います。実感を得るためには反復することがとても大事なのです。

終戦記念日などで新聞に載る体験談の話し手は、もう90代という人生最後の年齢を迎えています。次の世代は、戦争について実感できないかもしれません。実感はできないまでも、もっと進んで戦争についての本を読んだり、戦争の映画をテレビで放映し人々の心に刻み込まないと、戦争の悲惨さは忘れられていくと思います。何百万もの同胞の死に、申し訳なく、戦争はやってはいけないことを、繰り返して語り合う必要があると思います。



百瀬さんへのインタビュー

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」
発行時（平成28年3月発行）のものです。



愚かさが^{わか}判らない困った人たち

戦争を体験して



寄稿

なかじま えつこ
中島 悦子さん
下落合三丁目在住
終戦時：12歳

敗戦の日、私は隣のケイコちゃんの家に行った。
「戦争終わったね」「うん」「もうB29来ないね」
空を見上げると、抜けるような青空にぽっかり2
つ白い雲が浮かんでいた。

その時、戦死した父は無駄死にだったと思った。

その日まで「日本は^{しんこく}神国だ」「負けたことのない国だ」「最後には逆転して必ず勝つ」と信じ込まされていた。日本は勝つはずだと信じて始めた戦争だろうか。

残された遺族にとって、毎日が辛酸の日々となった。それは、今日まで続いている。理不尽な世間の冷たい視線を浴び、不幸をもたらす疫病神のように嫌われた。人々は戦争を1日も早く忘れたいようであった。だから私は、最近まで口を閉

ざして語らなかった。

自分の死の意味も^{わか}判らぬまま、死地へと追いやられた人々の声は、無念と悲しみに地鳴りのように地底からのぼってくる。私は父の最期を想像する。

どこでどう間違ってしまったのか、その理由を知らなければならない。それが死者への供養となる。私のつたない古代史研究も、40年を超える。これは死者への鎮魂の祈りである。人間はどうしてこうも馬鹿なことを繰り返すのだろう。人間の愚かさは底無しだ。ダイナマイトの側で線香花火。否、大都会は一瞬にして原子野に変わる。その想像力がもう失われている。

戦争は遊びではない。そして死ぬのは庶民である。残された未亡人、遺児たち、息子を失った親、兄弟、3・4世代を悲痛な運命へと突き落す。その悲劇は計り知れない。

何百万の怨嗟の声はどこに行くのだろう。

掲載内容は『新宿区平和都市宣言30周年記念誌』
発行時（平成28年3月発行）のものです。



40周年記念企画

私たちがまだ知らない 戦争のこと

区では、平和都市宣言40周年を迎えるにあたり、新たに戦争体験者の方々からお話を寄せていただきました。これまであまり知られてこなかった体験や、今だからこそ語られた思いを本章では紹介します。一人ひとりの言葉には、戦争の悲惨さと平和を願う強い気持ちがこめられています。新しく知る話から、私たちは過去を学び、平和の大切さをあらためて感じるのではないのでしょうか。



令和6年度長崎派遣の子どもたち



令和7年度広島派遣の子どもたち



ばくげき き B29爆撃機による空襲で 生活が急変

聞き取り

てら お あや こ
寺尾 綾子さん
水道町在住
終戦時：18歳

私は、飲食店が立ち並ぶ^{かぐらざかほん だよちよう}神楽坂本多横丁のお菓子屋に生まれました。

7人兄弟の長女で^{つくだ}津久戸小学校を卒業したのち、^{うしごめ}東京市立牛込実務女学校（後の^{いちがや}都立市ヶ谷商業高校）に2年ほど通い、その後、17歳から昭和金属工業株式会社で事務の仕事をしていました。

私たち家族の生活の様子が急変したのは、B29^{ばくげき き}爆撃機による東京への本格的な空襲が始まった頃です。母や4人の妹は、空襲から逃れるために父の実家があった^{はくいぐん そかい}石川県羽咋郡に疎開しましたが、私は仕事があったので、父や兄、祖母とともに疎開せず、^{かぐらざか}神楽坂の家に残りました。

その頃の思い出といえば、やはり雨のように降る爆弾^{しょう い だん}や焼夷弾による激しい空襲です。爆撃を避けるため、近所の家は明かりを制限したり、窓ガラスに紙を貼ったり不便で不安な生活を余儀なくされました。空襲警報のサイレンが鳴った時は、火の粉が舞う中、着の身着のまま町会で1～2カ所の防空壕^{ぼうくうごう}に逃げ込み、10人くらい入れればいっぱいになるくらいの四角い穴に^{たくさん}沢山の方たちと身を寄せました。狭い空間に多くの人が密集し、爆

弾が地面に落ちる衝撃と轟音^{ごうおん}の中恐怖と不安で身動きが取れない状態でした。横を見ると既に亡くなった方が^い居たこともありました。

大空襲で^{かぐらざか}神楽坂の家が焼かれた時は、必死で80歳を過ぎた祖母の手を引きながら、やっとの^{やすくにじんじゃ}思いで靖国神社まで逃げたことを思い出します。怖かったし非常に大変でした。足も辛^{つら}かっただろうに祖母もよく歩いてくれたと思います。^{たくさん}沢山の^{あんど}人たちと、やっと神社の境内に逃げ込んだ時は、ああ、家族がバラバラにならなくて済んだと本当に安堵したのを覚えています。

戦争中のことを聞かれてもあまり思い出せない。いつも黒い爆弾^{おび}に怯え、逃げていたことが思い出されるくらいで、今でも思い出すことができるのは戦後、疎開先での生活や父が東京にバラックを建て、再び東京で生活ができてからの思い出です。

戦争は人の記憶を消してあいまいにしまう^{ほど}程、強い影響があります。世界では戦争が今も行われているが、決して戦争を再び起こしてはならないと強く思います。



戦中を新大久保で生きて

寄稿

久保田 幸子さん

東久留米市南町在住
終戦時：17歳

昭和20年4月1日に新大久保の叔母の家に強制疎開で新橋から移り住んだ私（現高校2年）、中学2年の弟、歩行困難の母は、14日、第一次山の手大空襲に遭う。母は叔母と先行し家に水をかけていると「何してる誰もいないぞ」とどなられ、その人と共に明治通りに出ると新宿方面は炎に包まれ池袋への道もすぐ息苦しくなって道の端の雨水弁に鼻をつけて寝て地下の空気を吸っていると突然キャタピラの音がして駅の方から戦車が現れた。呆然としてここは戦場なのだとふるえていた。叔母は駅に近い所に空家を見つけ移り住んだが、5月25日には第二次山の手大空襲を迎えることになる。焼跡からは伊勢丹がはっきりと見え他は何もなかった。戸山ヶ原の対空砲で火を吹いたB29に歓声を上げたが、突然行き先をこちらに向けて降下し同時にある限りの焼夷弾をばらまいた。空一面は弾の下についた赤い火に包まれ一定の落下後、1発は30数発に分離し、空は隙間なく赤に染まった。オーバーを水にしっかりつけて風上と信じる焼け跡へと全力で走った。なぜか弾は走ったすぐ後ろに落ちる。赤ちゃんを背負った女の人を先に見た時、突然その人は飛ばされるように横に倒れた。私は速度をゆるめることもなくその横を走りぬけ焼け跡の素掘りの塚に飛び込むと土の壁に胸を寄せ焼トタンを引き寄せ隙間から近くに落

下する焼夷弾の姿を追った。

時が過ぎすべての物音が消え朝の気配がして塚を出て井戸に向かった。痛む顔と手を水につけていると薄暗い中からゾンビのような人が現れ井戸水に頭をつけると座り込んだ。次々と人は現れたが生きた喜びを語る人等なく水を被るだけだった。戸山ヶ原へと逃げた母や叔母と再会でき、駅に近い焼け残った家の一間での夜となった。何一つ持ち出すことができず焼け跡の残るオーバーを抱える私を叔母は冷たい目で見た。私はその夜眠ることはなかった。あんな時だったからこそ赤ちゃんだけでも抱いて逃げるべきなのにそれを無視した私は人間は半分で半分は鬼でないか。終戦の日、国が掲げた東洋平和・五族協和を自分の命として生きた私の命もこの時尽きたと思えた。軍情報で東京に原爆がと言われた終戦3日前の日も平然と出勤した私だった。終戦の日の夜、家に帰りすがりつくような母と弟の目を見た時、私は考える人間を止め一匹の働き蜂となることにきめた。この人たちを生かすのは私しかない。考えればずっとたになる心は捨てるが、いつか自分の足でしっかり立っていると思える日がきたらどんなに辛くても過去をしっかりと振り返り身近な人たちと共に幸せの夢を目指す人になりたい。私も人間だと心に誓った。

寄稿

葛岡 信男さん
世田谷区東玉川在住
終戦時：13歳

私の戦時中における被災体験

昭和20年、住所は東京市牛込区若宮町、旧制中学2年生の時だった。

5月25日の夜、今までの空襲で焼け残った地区をB29が襲い、全部焼いた。

近くに油脂焼夷弾の直撃を受けた家が2～3軒あったが不発弾で、何軒かの庭にもやはり不発弾が刺さっていた。停電していたが屋外は真昼のような明るさ。幸いなことに外堀通りへの坂道は火の手は見えないので急ぐ。家の周りは無風状態に近い。他には人影は全くなかった。

私は数日前までは軍事教練のため、御殿場（今の東富士演習場）で野外訓練を行っており、よく帰宅が間に合ったものと思った。

逃げ場はお堀端以外にないので駆け下る。外堀通りは火の通り道。折角持ち出した傘を広げ走って水辺へ。おかげで傘は焼けて骨だけに。

神楽坂の方を見ると、ちょうど坂の一番下の角、赤城屋という足袋屋が燃え始めており、向かい側の神楽坂警察署に火の手はなかった。

お堀端から見回すと火が、西は市ヶ谷方面の新見附りまで、北は坂の上まで広がった煙で見えない。東は神楽坂下へ、南は麹町全体がものすごい勢いで燃え上がっており、屋根瓦の燃え落ちる音が全体から響き渡っていたのが今でも耳の底に消えずにある。

翌日、見渡す限り灰灰灰で、見える残骸はコンクリートの土台、焼けたトタン、配管類の金属棒と比較的大きな樹の根本辺りだけで煙もない。と

もかく防空壕が心配なので見に行った。防空壕から煙が出ていたので、目の前の若宮八幡神社にある手押しポンプで井戸水を必死になってかけ、お陰で焼損は僅かで済み助かった。今考えてみると、途中の道はものすごく熱かったのを思い出す。

当夜はとりあえず近くの物理学校（今の東京理科大学）へ行き、その後津久戸小学校に移った。その間、壕舎では仕方ないので、掘っ立て小屋を建てることに。我が家は幸い万年堀が残っており役に立った。材料は防空壕に使用していた柱や板、トタン。トタンの屋根には石を重しに。

落ち着いてから周囲を見回すと本当に何もなくて、本郷の帝大安田講堂が丸見えだった。周りには誰もいないし、終戦日を過ぎてからも小屋は我々の他にはゼロだった。

両親と5人の子どもの生活。全く食べるものがないのでアカザ、ヤマゴボウ等々雑草を煮出し灰汁を抜いて、或いはさつま芋の葉や茎、何でも食べた。栄養失調で、当時3歳の末の弟を失う。手製の棺桶、リヤカーを借り焼場へ灰の道を父と延々と歩く。私自身も死の一手手前まで。

軍事教練中の空腹感、焼跡で雑草しか食べ物がない、栄養失調で歩くこともできない状態、不発弾は燃料に、庭に「陸軍〇〇部隊陣地構築用地」の立札、色々思い出す。

食料等の買い出しのため、煙にむせながら機関車の窓枠にしがみついたり連結器の上に乗ったり、よく生きてこれたものだ。



忘れられない記憶 「東京大空襲」

聞き取り

おおさき まさこ
大巻 正子さん
北新宿三丁目在住
終戦時：8歳

私は現在の^{きたしんじゅく}北新宿3丁目で生まれ育ち、今もここで暮らし続けています。

昭和20年、小学2年生の時、周りの子どもたちは、低学年が群馬県の^{あんなか}安中へ、高学年が^{くさつ}草津へ^{がく}学童疎開に行っていましたが、親元を離れて暮らすことを心配した父が、私を東京に残すことに決めました。

3月10日、東京大空襲。^{きたしんじゅく}北新宿の辺りも被害に遭いましたが、幸い我が家の周りは爆弾が落とされず無事でした。

ところが数日後、家の近くの市場が攻撃され、線路を越えてこちらまで火が襲ってきました。町が火に包まれる中、祖母と足の悪い母をリヤカーに乗せ、父が引くリヤカーを私が後ろから押し、逃げて回りました。周りの住民たちと一緒に、^{よろい}鎧神社の近くのガードに逃げ込みましたが、敵機が上の方から急に降りてきて、ガードを狙って爆撃してきました。私たちはガードの奥の方に入っていたので助かりましたが、ガードの手前の人は次々と撃たれ、亡くなっていきました。撃たれて横たわる母親に小さな子どもが、亡くなっていることがまだわからなかったのか、「お母さん、お母さん」と呼んでいる姿は忘れられません。

そこから近所の^{えんしやうじ}圓照寺に避難しましたが、^{よろいじん}鎧神

^{じゃ}社が燃えて、小学校が燃えて、小学校の裏手にある^{えんしやうじ}圓照寺に倒れてきました。必死で目の前の「学友会」という日本語学校に逃げ、「学友会」の周りに生い茂る木々のおかげで火から逃れることができました。

^{きたしんじゅく}北新宿の町は一瞬で焼け野原に変わりました。辺り一帯の建物は焼け落ち、^{おおく ぼ}大久保駅から富士山が見えたほどです。

それからしばらく、焼け野原の中、^{ぼうくうごう}防空壕で暮らしていました。自分たちで掘った、^{わづ}僅か四畳半ほどの小さな^{ぼうくうごう}防空壕で、両親、祖母と生活しました。その後、焼け跡から材木を集めて、父がバラックを建てました。このバラックで終戦のラジオ放送を聞いたことを覚えています。

食料もなかったので、焼けた土地を耕し、かぼちゃやとうもろこしを植えて食べていました。バラックの周りにかぼちゃが山のようにできたので、それを蒸してご飯代わりに、きな粉をつけて食べたり、^{しょうゆ}醤油で煮たりとか。当時のかぼちゃはザクザクしていて、今みたいに^{おい}美味しくなかったのです。もう朝から晩までかぼちゃだったので、それから何年間もかぼちゃを見るとぞっとしていました。お米が配給でもらえるようになって、量が足りない、さつまいもなどを入れてかさ増し

して食べていましたね。父は埼玉の方へ行って、着物とお米を交換したりもしました。お風呂は近所のお豆腐屋さんにあったドラム缶で、近所の人とお湯を沸かして入りました。

私の小学校は焼けてしまったので、焼けずに残った別の小学校に通ったり、プールの中で勉強することもありました。満足に勉強もできない環境だったので、私の小学校3・4年生はぽっかりと抜けているような感じで、その後ずいぶんと苦勞しました。そのうち、長野県の伊那^{いな}から材木の寄付があり、職員室と教室が3部屋ほどでき、午前・午後に分かれて勉強ができるようになりま

した。

戦後1年ほどして給食が始まりましたが、栄養士さんたちも少なかったので、父母が調理の手伝いに行っていました。「鶏だ鶏だ」と言われて食べたお肉が慣れない味がしたので、給食室に見に行ったらカエルのお肉だった、なんてこともありました。

今の人は食べ物に不自由するということはないでしょう。そのありがたみっていうのをしっかりと感じてほしいですね。それから、今を生きる子どもたちには、戦争のない世の中で、自由にのびのびと羽ばたいてほしいなと思います。

空襲

父の出征が決まり、
写真館で撮影した
家族写真



わたしの戦争体験

寄稿

まるやま じゅんこ
丸山 順子さん
中井二丁目在住
終戦時：7歳

小学1年の時、父が出征し、中井^{なか い}の家に母と二人になり母の故郷大阪へ転居しました。大阪では登校すれば空襲警報^{くうしゅうけいほう}が鳴って帰宅する、の繰返しで祖父母の住む富山市へ1945年夏に疎開^{そ かい}しました。

富山行きの列車は凄まじく混み、私は4人掛けの座席に座った大人の足の間にしゃがんでいました。トイレも人がいっぱいいて駅で停車すると大人たちが私を抱えリレーのようにして窓からおろしてくれました。用を足すと窓から引き上げてもら

い、大人の足の間でまた身を屈めて富山までの一晩を過ごしました。

その頃、全国的に空襲があり「富山市も空襲がくるのでは」と噂があり、8月2日に私たちは富山市内から滑川へ転居の予定でした。前夜、母と隣組の人たちが防空壕で貴重な配給のマッチを一本一本分け終わり防空壕を出ると空襲警報が鳴っていました。母と祖父母と私は神通川へは逃げ遅れ、小さな川に逃げました。神通川に逃げた人々は攻撃され大勢亡くなったそうです。「伏せろ！動くと見つかる！」と怒られ、真夏なのに川は冷たく私の胸まであり凍えて浸かっていました。辺りは野原で遠くに建物があり人影が見えた瞬間火の手があがりました。爆撃されたのです。午前3時半か4時頃、米軍機は去りました。

祖母は市内でたくさん人が亡くなっているのを見たそうです。家に戻ると家屋は焼け、毛糸玉が炭化したままの形で残っていました。引越しを頼んだ人たちに食べてもらおうと浅めの井戸に入れた木蓋をした釜のお米は炭のように真っ黒でした。

食べ物は他になくそのお米で私たちはしのぎました。辺り一帯焼けて煙が燻っていました。富山市唯一の3階建てのデパートはまだ煙がでていました。

昨夜背負った荷物だけで母と祖父母と徒歩で滑川へ向かいました。道中は人でいっぱいです。偶然会った知人がくださった真白なおにぎりのおいしさは今も忘れられません。

父は1946年5月、満州から実家の兵庫県甲子園に帰還。自分の家と隣家だけ焼けずに残っていたそうです。父は戦争前に勤めていた会社に通うため母と中井の家に戻りました。疎開する時、貸したのを八畳間だけ空けてもらいました。

大阪商船に定年まで勤めた祖父は戦後、疎開先で亡くなりました。私は小学5年の時、祖母と東京に戻りました。

兵庫県に住んでいた父方の祖父は8月6日防空壕を出たとき米軍に撃たれ即死、祖母はその時、撃たれた右手が亡くなるまでずっと不自由でした。



4歳の僕、セーラー服姿

キャンデーの思い出

寄稿

もり た ち あき
森田 千秋さん細工町在住
終戦時：7歳

昭和20年6月5日、当時、京都府綴喜郡にあつた青谷国民学校（小学校）の2年生だった僕は体調を崩し、家でごろごろしていた。朝早く、母の「チイちゃん、チイちゃん」と呼ぶ大声に、何かと表に飛び出した。抜けるような青空に、アメリカの爆撃機B29が白煙を吐きながら頭上を旋回している。その後ろを親鳥を小鳥が追うように「赤とんぼ」（九三式中間練習機）が呑気に飛んでいる。B29は何回も村の上を旋回していたが、そのうちパッパッと落下傘が開いた。「赤とんぼ」の操縦席の兵隊さんが下界の僕たちに手を振っている。乗り出している顔まではっきりと見えた（ように思った）。

被弾したB29が京都の南部、青谷村（現・城陽市）の水の干上がった白地の木津川に滑走しようとしていたのか、墜落して大きな炎を上げた。墜落現場を見に行きたかったが大人たちに「米兵がおるから行ったらあかん。家に入れ。」と止められた。

翌日、夜が明けるとともに僕は河原に走った。まだうっすら熱さの残る焼け残った機体の中で赤く丸い缶々を見つけた。中には少し溶けたキャンディーが詰まっていた。その旨かったこと。「アメリカにはこんな旨いもんがあるのか」。88年の生涯の中で最高の味であり、今も舌の先にその味は残っており、思う度に涎が出る。

あのキャンディーを超える味を求めて今も僕はさまよっている。

あの折、落下傘で降下した米兵は、村の男たちに魚を刺すヤスで刺殺されたとも重傷を負ったとも聞いた。「米兵は鬼畜だ」と洗脳された男たち。家族を守るためにしたことかもしれないけれど。

一方、心優しい村人は「亡くなれば敵も味方もない」と墜落死した5人の米兵を弔った。戦時下に敵兵を弔うことは非難を浴びかねない行為だったろうに。その位牌が墜落地近くの深廣寺に今も「B29搭乗五勇士 英霊」として祭られている。



東京大空襲 5月25日

寄稿

あまの たけこ
天野 竹子さん
鎌倉市寺分在住
終戦時：6歳

昭和15年の頃から私は旧淀橋区十二社池の上のバス停から少し上った所の住宅地に住むことになった。16年、17年頃はそれ程戦争の影響も感じられず、配給制は始まっていたが、たまに伊勢丹へ行っても賑やかな様子だった。19年に幼稚園に入園したが、その年の11月には休園となった。お菓子も無くなり薬局へ行ってオブラートを買ってお菓子の代わりに一枚ずつ食べた。美味しかった。

空には敵機が飛来するようになり、父との連絡も途絶えたように記憶しています。家の前には防火用水という1m四方のコンクリート製の桶が全戸に配備され、いざ空襲となればそこから水を汲みバケツリレーをして消火する訓練も行われた。また建物疎開と言って空き家になっている家を所どころ間引くように取り壊すということも行われた。

3月10日には下町が空襲され、深川に住む親類が突然我が家に現れて、着ている服はあちこち焦げて煙が立ちのぼっており、顔は真っ黒で眼は虚空を見るようにギョロギョロし、ものも言わずに玄関に倒れこんだ。二、三日寝てたが母が洗濯したボロボロの服をまた着て深川へ戻っていった。その姿を見送りながら大丈夫だろうかとても心配だった。

そうして4月1日になり私は淀橋第六尋常小学校へ入学した。学校へ行くと生徒は一人もおらず日直の職員が二、三人いて、「今生徒は皆集団疎開に行っていて誰もいないんですよ」と言われた。何か月か前に私にも集団疎開に連れて行けますよとお誘いがあった。しかし母は「死なばもろともです」と言ってお断りをしていた。母は入学の手続きをし、帰ろうとしたが、何かつまらなくて私は運動場へ行き朝礼の時に校長先生が上がる台に無断で上がって体操の真似をした。

5月25日の夜、空襲警報が鳴り渡った。私と母、祖母は（父は軍属として満州に渡っており）三人で暮らしていた。逃げないといけないと母は言うてすぐ支度を始めた。わずかな持ち出し用の荷物をたすき掛けにして縛り、タオルと腰ひもを何本か持ち出し、タオルは水に浸けて、腰ひもは繋いで三人の体を繋ぎ、ぐしょぐしょのタオルはそのままそれぞれが持ち、口と鼻にあてがって手を繋いで家を出た。二か月程前に母は六桜社の横の家を「この家は行き止まりだから逃げられない」と関東高等女学校の門の真ん前に引っ越していた。ちょうどお隣の家族も出てこられたので、一緒に行きましょうと言って走り出した。あちこち曲がって下の道に出て広い通りに出た。通りには商店が並んでいて、ラジオの店から男の人が出てき

て、手に大きな最新式のラジオを掲げて「皆さん、これを持ってってください。差し上げます」と叫んでいた。一人の若者がそれを渡されて走っていった。程なく行く手にお隣のおじさんの姿が見えた。お隣の家族は「お父さん」と叫んで駆け出した。おじさんも気が付いて両者が触れ合うかと思っただ瞬間その真ん中に焼夷弾が落ちた。ああ一と叫んだが次々と降りかかる焼夷弾に追われて必死で走った。

暫く行くと大きなお屋敷が立ち並んでいる一角があった。通りに面した一軒の屋敷には二、三人の男の人が立っていて「皆さん、この家は憲兵が守っているので安全です。どうぞ休んでください」と逃げる人たちに声をかけていた。それを聞いた途端私は一度に疲れを覚えて「お母ちゃん休もうよ、もう走れないよ」と母に訴えた。祖母も「私ももう歩けない」と言ったので母も「じゃあ少し休ませてもらおうか」と玄関の中へ入った。入ってみるともう人で溢れかえっており家の人に「悪いけどもういっぱいなので他へ行ってください」と言われたが一度気を緩めてしまった私たちはもう動くこともできず「隅っこでいいですから少しの間座らせてください」と頼んだ。そばの人たちも詰め合わせて隙間を作ってくれて座らせてもらった。人々に埋め尽くされた大きな部屋が続く、庭には芝生が敷き詰められていた。すると家の人が庭に出てスコップを持って掘り出した。何をしているのだろうと見ていると掘った穴から壺のような物を取り出してふたを開け細い棒のような物をつっ込んでいるかと思えば箸に水あめが巻き取られていた。それをいくつか持って子どもたちに配ってくださった。私もいただいて口に入れたがそれはそれは甘くて夢のような味だった。

空襲は続いており大きな音を立てて周りの建物に焼夷弾が落ちていた。隣の屋敷や向こうの屋敷に次々と落下して大きな音とともに火の粉が吹き上がって炎が燃え立ちだんだん黒く骨組みが浮か

び上がってくるとドーンという大きな音とともに家が倒れた。物凄い火の粉と炎の狂宴で「きれいねえ」と私は言ったのを覚えている。母が「まあこの子は」と言った。

白々と夜が明けてB29も帰って行き、強運にも私たちの上には焼夷弾は落ちなかった。高揚する気持ちを抱えながら家の人に礼を言って恐る恐る外に出て道を戻り始めた。振り返ってみると門柱に山ノ内という表札が掛かっていた。道の両側には帯のように沢山の死体が重なり合っただけで続いていた。道の真ん中は時々車が走っていた。私は足の踏み場もなく遺体を踏まないように気を付けながら一所懸命に歩いた。家のあった所につくと家は影も形もなく瓦礫が散らばっていた。母は防空壕の所へ行き何枚かの皿や茶碗を、持ち出してきた袋に入れた。台所のあたりには真っ黒な炭となったご飯が入った釜が転がっていた。前に住んでいた六桜社の塀の横の家に行ってみると燃え残った瓦礫が散らばっているだけだった。驚いたのは家の前に置かれていた防火用水の桶に何人もの人が逆様に突き刺さっていた。衣服は着ていなかった。両足を天に向けて突き立てその体はパンパンに腫れ上がっていた。余りにも異様な姿に声もなく立ち竦んでいたが「小学校に集まってください」という声が聞こえて小学校へ向かった。

小学校もまた避難民でいっぱいだった。隣の人たちはどうしたかと探したが見当たらなかった。夕方になって四、五人の、頭を白い包帯でぐるぐる巻きにした人たちが入って来た。異様な姿に皆注目したがよく見ると隣の人たちだった。あー良かった、お婆さんの背中に負われている赤ちゃんまで痛々しく頭に包帯が巻かれていたが本当に良かったと思った。その時から何日か学校に寝泊まりしたと思うが記憶に残っていない。家が燃え上がるのを見ても死体の山を見ても感情がマヒしているような感覚だったがやっと心を取り戻したように感じた。

その後私たちは被災していない親戚の所に二日三日と身を寄せながら最後は母方の祖父を頼って大阪に行きました。父は20年の暮れに帰還し私たちはそのまま大阪に^{とど}まり、私は二十歳で結婚し二女一男をもうけ孫八人に恵まれました。ひ孫にも会えて有難いことだと思っております。あの戦火の中私たち三人は怪我一つ火傷一つしませんでした。母の言う観音様のお陰かもしれません。先月六桜社のあたり^{しんじゅくちゅうおうこうえん}新宿中央公園に行ってきました。熊野神社に詣でて空襲を生き残り80年無事に過ごせたことを深く感謝してまいりました。



新宿中央公園内写真工業発祥の地にて

山ノ内様にはお礼も申し上げられずに心苦しく思っておりました。この文を区に納めることで感謝のしるしとさせていただきます。



たかまつ し 高松市(香川県)の空襲の時

寄稿

くわじま ひろたけ
桑島 裕武さん
戸山三丁目在住
終戦時：6歳

空襲

昭和20年7月4日、当時国民学校1年生（6歳）の私は市の中心部より約4km離れた所に住んでいた。その日の夕方空から短冊状の銀紙が落ちてきたので拾おうとしたら憲兵に怒られた（通信妨害^{ため}の為か）。

夜になったら急に市内の方が明るくなり、続いて空襲警報^{くうしゅうけいほう}がなった。市内の方では爆撃機^{ばくげき き}により焼夷弾^{しょうい だん}が投下されていた。何時間も火の玉が空より落下し、地上では火災が発生していた。私たち子どもは田圃^{たんぼ}の用水路の中に入り、防空頭巾をかぶり空襲が終わるまで避難していた。

翌朝市内の方より戦闘機^{せんとうき}が機銃掃射しながら自分たちの方に飛んできた。低空飛行のため操縦士の顔がはっきり見えた。怖かった。その後母が長男である私をつれて、市内に住んでいる親戚の安否を確認するため歩いて市内まで行った。街は焼け野原で水道管が破裂し水が噴き出したり、また所々でお腹^{なか}の膨れた遺体が横たわっていた。

このような光景を見て大変衝撃を受けた。戦争は2度としてはいけないと思った。今でも世界各地で紛争が起こっている。

早く世界が平和になることを祈っています。



太平洋戦争時代の記憶

寄稿

さかきばら まさよし
 榊原 正善さん
 原町二丁目在住
 終戦時：6歳

私は昭和14年7月生まれ。物心が付いた頃には、戦争は既に始まっていたが平穏な環境だった。父が軍関係者であったので偕行社住宅に住んでいた。

周囲には、護国寺や陸軍墓地（今は共同墓地）があり、その地で遊び、春にはツクシンゴ取りをしたもんだった（今の、文京区小石川地域）。

近くには、青柳国民学校（今の青柳小学校）や豊山中学（今の日本大学豊山高等学校・中学校）があり、国民学校には親しくしてくれた数歳年上の薫チャンが通っていたが、やがては、反戦運動に身を投じ二度と会うことができなくなった。とても寂しかった。豊山中学は、陸軍の兵の養成教育も行われており、勇ましい体操や軍歌調の歌声も流れてた。「月月火水木金金」や「マッカーサーを地獄へ逆落し」などの歌。

やがて、米軍の空襲が始まり、下町、神田など家屋の密集地域は爆撃でかなりの被害が出だしたと聞いた。B29爆撃機の編隊が通過していくのを見た。青空の中、豆つぶほどの編隊が飛来したが、日本軍の迎撃はなく、やがて地上から高射砲の一斉射撃が始まり白煙が空中に広がった。数十分で収まったが撃墜された敵機はなかった。ある夜、警戒警報のサイレンが鳴り、引き続き空襲警報の

サイレンが吹鳴するや、一瞬夜空に大閃光がひろがり、大音響と地揺れが生じた。近くに爆弾が投下された。大急ぎで家から飛び出し防空壕に駆け込んだ。この時は、この1発のみで我が家は無事であって安堵した。

この状況下、我々子どもは疎開することとなり、父の実家がある、久留米市に移り住んだ。東京・久留米間を30時間ぐらいかけて列車で移動した。米軍機が列車に機銃射撃をしてくることがあると聞いていたが、幸い無事に目的地に行きつけた。初めての地方都市住まいであったが、爆撃などの気配はなく、暫くは平穏な日々を過ごしえた。（昭和20年5月頃）

しかし、この地にも米軍の爆撃が始まった。ある日の午前だったが既述の米軍機編隊が高上空に飛来し、焼夷弾を次々に落下しだした。実家周辺は家が密集していたので焼失は明らかなので、近隣住民と共に空き地のある方に逃げた。ほとんどの人が防火頭巾をかぶって小走りでキノミキノマ状態で2～3列縦隊で（自然の流れ）進んだ。老人、子どもも居たが互いに助け合っていたと思う。30分ぐらい移動して、やっと農地帯に辿りつき、筑後川の支流、本流域へと移行したのだった。一帯には、多くの人々が来ており、皆不安そ

うだった。中には川に身を潜めようとしている人も居た。米軍の爆撃は、住民への攻撃はなく、家屋のみの焼失を目標にしていると思えた。数時間後には落ち着き、親族は被災を免れた家に集まり、集団生活に入った。そこで、暫くして終戦を迎えたのだった。

翌年に、小学校に入学した。戦後、最も苦労したのは食料不足だった。当時、配給制度がとられ、

麦やサツマイモが配られたが米のご飯等は食べられなかった。学校では、先生の引率で野原で食べられそうな雑草（ヨモギなど）を摘んで、役所と思える機関が乾燥し乾パンに仕上げて配ってくれた。小片を口にしたが、美味しいと感じた。こんな子ども時代だったが、皆よく頑張ったなと思っている。

空襲

サイレンの音

寄稿

多田 昌子さん

山吹町在住
終戦時：6歳

終戦も間近の昭和20年、わが家は向島に住んでいた。東京の街は荒んでいて昼夜分かたず空襲警報のサイレンが暗く低く鳴りひびき時をおかずB29からの焼夷弾の襲撃が間断なく夕立のように無差別に降り落ちてくる毎日だった。家に残された母と子どもたちはどこへも逃げることもできずただあわてふためき、二階に上り階下に降りることを繰り返す。

6歳の私は米の袋の入ったリュックをかつがされていたことを覚えている。

ある日、家の前が突然真っ赤な炎に覆われ外から父が飛びこんで来て部屋のタタミを2枚、3枚と引きはがし玄関の内側へ立てかけている。赤い炎を背に影絵のように必死に動きまわる父のすがたが目には焼きついている。

あとから聞いた話によるとその時は町内の世話役だったこともあり被災された人々を助けるために奔走していたのだ。

不安な日々であっても食べることは止めることはできない。母が一升びんに玄米を入れて繰り返し棒で突いていた姿。食料の配給といっても各戸一升ほどの豆の日。またある日は干しいもが少々配られる。田舎へ米を買い出しに行けば帰りの電車でやみ米の摘発といって没収される。わざわざ帰りをねらって摘発されたあの米はどこへ行ったのだろう。

いよいよ戦火もはげしくなってわが家も疎開することになった。東北の母の里を頼って母と子どもたちが第一陣。出発のため上野駅に向かう。上野駅はうす暗く駅構内を人々が埋め尽くしてい

る様を言葉もなく6歳の私は眺めていた。黒い影が重なり合ってノロノロと右へ左へ進むともなくうごめいている。

熱のある姉は荷物の上に覆い被^{かぶ}さって苦しそう

だ。母は小声で心配そうに声をかけている。その姉も当時、流行^{はや}っていた結核で死んだ。貧しいくらしの中でこれという医療も受けられず18歳の命だった。

空襲

戦争中の思い出

聞き取り

ふくなが たかこ
福永 尚子さん
舟町在住
終戦時：6歳

私は、当時は新潟県高^{たか}田市^だ（現在の^{じょうえつ}上越市^し）に住んでいました。四谷には昭和39年から住んでいます。

戦争中の思い出は、幼稚園から小学生の時にあります。特に、長岡空襲が大規模な空襲だったと思います。空襲警報^{くうしゅうけいほう}のサイレンが鳴ると裏庭^{ぼう}の防空壕^{ぼうくうごう}に避難しました。親に連れられて防空壕に入りましたが、ただわんわんと泣いていた記憶が強く残っています。夜に暗い中で防空壕への階段を降りながら、飛行機の強いブーンという音に驚いていました。日常の生活も、電球に黒い傘状の覆いをかけて過ごしていました。空襲が始まると、お巡りさんが町内を周り、大人からは騒ぐなと言われました。空襲が「解除」になると、親から、「今のうちに寝なさい」と言われましたが、眠れませんでした。私は四人兄弟なのですが、兄弟はぐっすり寝ているのに、なかなか眠れず、どうしてなのかわからず、とても切なかったですね。

小学校には、東京から疎開^{そかい}してきた小学生が、1クラスに3～5名来ていました。私にとっては、普通の生活をしているので、東京が大変なので来たんだと思っていました。当時は学童疎開^{がくどうそかい}のことは理解できませんでした。服は着物、いわゆる「もんぺ」姿でした。大人も同じで、上は作務衣^{さむえ}のような姿の人もありました。食料も、戦後すぐは、果物や米はなく、さつまいもを食べていました。家業で商売をしていましたが、食料難だったと思います。

終戦後に、まだ20代だったところが亡くなりました。港まであと50mのところまで来た時に引揚船が爆発したそうです。その話を祖母から聞きました。せっかく戦争から生き延びたのにと。本当に悲しいことです。

このような経験をしてきて、色々大変なこともありましたが、今の穏やかな生活がとてもありがたいです。



戦争実録についての話

寄稿

たかすぎ のぶよし
高杉 信美さん
終戦時：18歳

突如として担任の先生から海軍に志願することを勧められたことは、私にとって大変な出来事だった。その時、生まれて初めて自分の死について、命について考えさせられた。玄関の前で母の見送りだけで、奉公袋^{ほうこうぶくろ}一つ持ち、手を振って出そうな涙を耐えながら別れた。

海軍入団後、新兵教育をうけ、「大東亜戦争は長期の戦いであって、米英を撃滅し、世界の平和を確立するには直接その後継者たる者の力に待つこと大なるものがある。しからば日本海軍50年の伝統的精神が海軍魂となったのである」と、学んだ。

我々が入団したときの十一分隊の分隊長が、戦艦「大和」の副砲長であったことを知った。分隊長の手記では、『大和は沈まず、沈めてはならず』私はそばにいる指揮所員に『死を急いではない。浮いているものがあつたら何でもよいからつかまえてじっとしていることだ。絶対に一人になつてはならない……』と重い口を開いていった。何メートル深く、何分間潜ったかわからない。真っ暗だった」とある。

サイパンでの飢餓について

内地からの輸送はほとんどなく、食事も六部食、五部食と減っていった。兵隊たちは疲労が体にこたえるようになり、体力の衰えを見せていった。でも兵隊たちは生きるための必死の努力をしていた。自給自足の食糧確保のため密林の開墾が始

まった。このころになると、食事内容は、一人一食に細い芋が三本程度、汁は海水から作った。アツだらけの塩で芋の葉をゆでたものだ。兵隊たちは罌^{わな}を仕掛けてネズミを捕獲した。トカゲも捕まえた。そのうちにこれらの生き物もほとんど食べつくした。目を開けているが、目にハエが止まっても瞬き^{まばた}する力もなくなる。兵隊の大半は栄養失調にかかっている。カイセンと呼ばれる皮膚病にかかっている。体力が徐々に弱り、そのうち体がむくみ、起こしても起きない。死んでいるのである。この当時は気力だけ。まもなく戦争は終わった。18歳の時だった。復員して14～5年、戦いの夢を見てうなされたり、跳ね起きたり、異常な行動が度々あった。戦争中のトラウマによる悪夢の結果だったのだろう。終戦少し前、司令長官が、「死ぬなよ、これからの日本はお前たちの若い力が必要だ、死ぬなよ」あの時の言葉は今も耳の底にこびりついている。戦争を体験し、「平和な豊かな国を作りたい」との思いが戦後の貧しい生活を暮らせた原動力だと思う。

（「練習兵」高杉信美著より抜粋）

なお、高杉信美さんは、令和元年にお亡くなりになっており、ご本人の著書より抜粋し掲載しています。



寄稿

こばやし まさひと
小林 昌仁さん
西落合一丁目在住
終戦時：11歳

爺の戦争体験と平和への願い

終戦の年は千葉の茂原に住んでいた。3月の東京大空襲に続き6月には千葉市も空襲を受け、海軍航空基地のあった茂原でも艦載機の機銃掃射を経験した。庭の防空壕に逃げた。10km先の九十九里浜に米軍上陸の噂もあったとかで、6月に弟と二人、福島^{あいづ}の会津^{えん}に縁故疎開した。国民小学校4年生だったが教室で勉強した様子が浮かばない。外で田植えや畑の手伝いや秋には蝗取りをし、茹でて校庭で干した。匂いが強く今でも食べられない。蝗は仙台^{いなが}の陸軍幼年学校に送られた。

おやつは冷たい湧き水にトマト、きゅうりがあり空腹はなかった。遊びは田圃の間を流れる狭い溝を堰き止め、急いで水を掻き出し小魚や泥鰌を捕まえた。夕方近所の川に長いタコ糸に釣り針を沢山つけて仕掛けを置き、翌朝引き揚げ釣った魚が喜ばれた。

8月15日正午皆ラジオの前に集まり、天皇陛下の「終戦の詔書」を聞いた。ラジオの音が悪く、負けたいとの大人たちの話に緊張感を感じた。翌年の春約1年の疎開生活に別れ、戻る。

両親と妹やワンくん、ニャンコの生活に戻り

ホッとしたのは忘れられない。中学校は残っていた海軍航空隊の宿舎で約1時間の通学だった。中学校も勉強時間が鮮明でない。広い校庭にさつま芋の畑を作り水遣り、人糞撒きで育てた。米軍が駐留しジープで走り回り、子どもたちを見るとキャンディーを撒いた。覚えた英語は、「プリーズギブミーチョコレート」だった。

NHKの朝ドラ「あんぱん」は陸軍初年兵の日常生活をリアルに放映している。非人間性の集団生活、予科練崩れと後ろ指さされた青年たちを思い出す。新聞、テレビは連日のようにロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザとイラン攻撃、トランプ大統領の武力だけが物を言う発言を報じている。こう書いている時間にも当事国の若者たちは戦場に駆り出され戦火にさらされている。戦争は駄目だ。

今、テレビはベ이스ターズとロッテ戦で猛暑の中横浜スタジアムはファンの若者で満員。明日は都議選。若者の皆さん、君たちの未来がかかっています。棄権はしないでほしい。

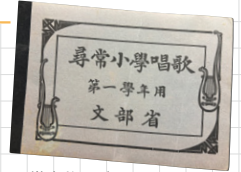
この平和が長く続きますように。



がくどう そ かい 学童疎開の日々

聞き取り

やまぐち みつこ
山口 光子さん
大久保二丁目在住
終戦時：11歳



尋常小學校歌

疎開～終戦、子どもたちへの思い

昭和19年～20年の間、世田谷区の祖師谷国民学校の5～6年生の時、長野県西筑摩郡山口村（のちに長野県木曽郡山口村）というところに、妹と一緒に疎開していました。疎開先での生活は苦しく、早く帰りたいという一心でした。村では食べるものがなく、子どもたちはみんな、山にゼンマイやフキを拾いに行きました。「何か仕事します」と子ども心に、農家を一軒ずつ回り、草むしりなどを手伝って、そのお返しにお芋やさつまいもをもらいました。それが嬉しくて、みんなお手伝いをする日々でした。

お風呂は近所の農家の方に借りて入り、顔を洗うのは氷の張った水でした。ノミがいっぱい出るので、毎日夜中に必ず一度起こされて、爪でノミを潰していました。女の子はシラミを防ぐ白い粉のようなものを頭からかけて粉だらけになりました。

どんなに寒くても雪が降る日でも毎日、近くの神社に体操に行き、東京の方に向かって、お父さんお母さんに「元気ですから」と歌を歌いました。

父が面会に来た時の記憶ですが、「お菓子は先生に見つかる」と取り上げられてしまうから持ってこれないけど…」と

言っていて、菓の瓶の中に入れた角砂糖をくれたんです。それを私と妹で隠れながら食べていました。

そんな生活の中で、一番辛かったのは、ある日面会に来た父が、ひどく痩せ細った妹を見て「こんなに痩せて、ここにいたんじゃ殺されてしまう」と妹だけを連れて帰った時のことです。東京に帰ろうと歩く二人の背中を泣きながら追いかけた記憶があります。

終戦は山口小学校の校庭でみんな並んで聞きました。みんな泣いて泣いていました。



疎開先の記録集



近所の中学生との交流

近くに住んでいる中学生の子が、学校の学習の一環で、戦時中のお話を取材しに来てくれたんです。とても上手にまとめてくれました。



家族写真

東京に戻ってからは、長女として弟たちの子守をしながら、実家のケーキ屋を朝から晩まで手伝っていました。その後お嫁に行き、縁あってこの町に住んでいます。

自分の経験をお話して、子どもたちが少しでも当時のことをわかってくれればいいなと思いますね。もう二度と戦争はしたくないです。



不思議なご縁

驚くべきことに、娘の嫁ぎ先が偶然、疎開した山口村でした。当時終戦の放送を聞いた山口小学校は娘の夫が卒業した小学校で、孫も同じ小学校に通いました。本当にびっくりなご縁です。娘の姑が山口小学校の教師をしていたため、当時の資料を色々集めて送っていただきました。

疎開

泣きながら別れを惜しんだ学童疎開

寄稿

やまざき きん や
山崎 金也さん
北新宿一丁目在住
終戦時：11歳

昭和の時代に活躍した各界の著名人が、相次いで黄泉の世界へと旅立ち、同世代の私には昭和という時代が遠くにかすんだような寂寞たる想いです。

戦中で忘れられないのは、何と言っても学童疎開です。当時10歳前後の子どもたちが初めて親と離れて生活するのです。疎開先に出発する我が子を見送るべく新宿駅に集まり、各所で手を取り合っ泣きながら別れを惜しんで居りました。親としてもこれが今生の別れかと辛かったと思います。

疎開先の草津について、大広間に20人程ずつ寝るのですが、中には声を出して泣く子も居り、2～3日は熟睡できませんでした。広間では、午

前中に勉強し、午後には勤労奉仕をさせられました。駅から3km程離れた療養所に大根を荒縄で5、6本背負わされ運ぶのですが、何せ空腹で途中座り込んで1本また1本と抜いては食べ、着いた時には半分も無く、よく先生に叱られたものです。何せ10歳の食べ盛り、いつも空腹で、売っているものといえば粉のわさびで、よく水でといて辛いのを我慢して食べたものです。

今の飽食時代には到底想像もできませんが、あの時代は何事も我慢我慢で、今でもその癖が抜かず、充分粗食に耐えられるので、家族には美味しいもの知らないんだから、と馬鹿にされている日々です（笑）。



あさま ふもと そかい 風香る浅間の麓へ疎開

寄稿

かなざわ まこと
金澤 誠さん
高田馬場一丁目在住
終戦時：10歳

1945（昭和20）年8月15日、近隣の人たちが家に集っていた。天皇陛下の玉音放送（ぎょくおんほうそう）を聞きに。TV等無い時代である。ラジオも家にしか無かった。

ここは浅間山（あさまやま）の麓、夏は25℃を超えることが無く涼しい高原地帯である。1944（昭和19）年4月から、母と姉、私、弟と4人で疎開（そかい）していた。私は小学校4年生である。小学校は町にしか無かったが、ちょうど4月から近くに分校ができたのでそこに通った。校長先生が逸見先生、担任が栗本先生（女性高等女学校在学）だった。ここは戦前、ピアノ教室、絵画教室が開かれて居て、姉が通って居た。一度テストで96点をとった。69点は何回もあったが、96点は初めて。母に答案を見せて「良い点とったから、遊んでくるね」と言ったら、母から「今度は100点ね、さあ、お勉強」と言われ、え〜っと思ったことがあった。学校では勉強、家に帰れば遊び優先なのに。落葉松（いま）は未だ低木、ハダカで木にしがみつき上り、上から数メートルは緑色、今年成長した部分、そこからは上れない。木から下り胸と腹はカスリ傷だらけ。母にしかられながら赤チンを塗って貰った。

清水で岩魚を追いかけて、桑の木に上り唇をムラサキ色に染める程（ほど）実を食べ、アケビを食べた時、これはアイスクリームより（おい）美味いと思った。甘い物等無かった。何を食べて居たのかって！そう、農園のおじさんが手入れしてくれた、かぼちゃ、トウモロコシ、米はあまり食べられなかった。

家でラジオを聞いて居た人たちが帰っていった。うつむき涙ぐんで居る人も居た。終戦から1週間後私たちは上野行き（うえの）の汽車の中だった。農園のおじさんの植えてくれたソバの花が真っ白だ！私の小さなリュックには庭で採れた大きなかぼちゃ、重かった。汽車は動いたり止まったり、ようやく上野駅（うえの）にそこから省線（かんだ）で神田駅へ、ホームから見た東京は一面の焼け野原、父の事務所と家のある日本橋堀留町（にほんばしほりどめちよう）、小伝馬町（こでんまちよう）の一部だけ家が残って居た。公園には大勢の人を一緒に葬った大きな塚が。ビックリする光景（そかい）。疎開先の同級生、相馬さん、中村さん、葛原くん、山口ジロちゃんにはもう会えない。東京では嘉手納君他2〜3人が居なかった。私の疎開生活（そかい）は楽しかったが母の苦労は大変だったと思う。戦争は二度と起こしてはならない！



私の少年時代

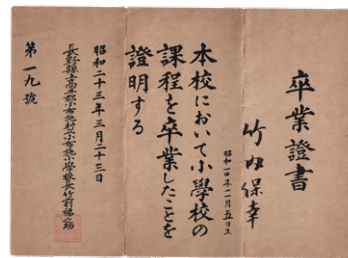
寄稿

たけうち やすゆき
竹内 保幸さん
高田馬場三丁目に住
終戦時：9歳

私は今秋に90歳を迎えます。記憶によると、私の少年時代の日本は大変な時期にありました。第二次世界大戦中でした。同盟国のドイツとイタリアはすでに降伏し、日本だけが戦争を続けていました。戦況はだんだん悪化して、いよいよ日本本土が空爆される事態となっていました。そこで、今後の日本を担う大切な児童たちを守るための方策がとられました。いわゆる「疎開」です。学校単位で安全な場所に移動する「集団疎開」は先生も一緒でした。お寺の本堂などが使用されました。この生活になじめず、母恋しさに脱走する児童も出たそうで、悲しい事例でした。もう一つは、知人、縁者を頼る「縁故疎開」です。こちらは問題はなかったようです。

3年生の一学期末のことでした。母親から「お前を私の知人宅に預ける。さびしいだろうが我慢しなさい。」と告げられ驚きました。初めての転校です。その地は、北信濃の^{きたしなの}のどかな山村でした。お寺の一部を借りての家庭でした。季節は夏で昼間はセミの大合唱でした。私は夢中になって、トンボやセミを追いかけてました。親のことなど忘れていました。「そんなにセミを採って、つくだ煮にして食べるのか？」とまで言われました。私はこの地の夏を満喫していました。しかし、ここは

他人の家です。「遠慮する、我慢する心」が自然と育ったと思います。



疎開先の学校での卒業證書

楽しかったこの地での夏も終了し、再び親子3人の生活が戻りました。父の実家の村へ移りました。転校も2回となりました。この地はリンゴの栽培と養蚕が盛んです。都会育ちの母も手伝っていました。ある日、編隊を組んだ飛行群を見ました。米軍のB29だそうです。日本軍も高射砲で応戦するのですが届きません。打ち上げ花火のようでした。息を呑んで眺めていました。この後の私たちは厳重な注意を受けました。夏でしたから全員が白シャツ姿でした。危険でしたが強烈な思い出になりました。

しばらくして終戦の日を迎えます。この地で6年間も平和に過ごせましたが東京の家は空爆で全焼したそうです。現在も戦争は絶えません。戦争は残酷です。地球上の全世界が平和であることを願ってペンを置きます。



すわ 諏訪(長野県)からも見えた 東京空襲の赤く染まった空

聞き取り

おおにし よしこ
大西 好子さん
百人町三丁目在住
終戦時：9歳

昭和19年6月頃だったと思います。小学校3年生の私は、小学校6年生の兄と一緒に長野県岡谷の諏訪湖近くにある千鳥園という旅館に集団疎開をしました。旅館の1階は男子、2階は女子のスペースでした。お風呂は諏訪の良い温泉で、お寺になった子もいましたが、旅館で良かったと思いました。諏訪湖ではタニシを採って味噌汁に入れたり、イナゴを捕ったりしました。山に入ると松茸がたくさん採れたり、楽しい経験もたくさんできました。学校へ行く途中、空襲警報が鳴ると慌てて戻ります。怖い思いはそれほどなかったのですが、いつも落ち着かない気持ちでいました。諏訪からも東京が空襲を受けて、空が赤く染まっているのが見えました。

諏訪湖の上の方に兵隊さんがいて、時々子どもたちと遊んでくれました。その時に歌を作って歌ってくれました。「昭和19の夏半ば、戦いいよいよたてきころ、ここに学べる子どもらは、御国

の末を背負う人」という歌詞でした。

夫は、深川で生まれ育った人で、兵隊には行っていないが、東京空襲の時には、たくさんの人が木場の水の中に飛び込み、そのまま亡くなっているのを見たそうです。防空壕でもたくさんの人が亡くなっていて、あの光景は目に焼き付いて離れないと言っていました。

終戦となって、暮れに東京に戻ってきた時、小学校は焼けてしまい、コンクリートでできた朝礼台だけが残っていました。当時は、食べ物と着るのが一番大事でした。子どもの私もリュックを背負って、川越の方まで芋を買いに行くのですが、着物がほしいと言われて、持って行って交換したりしていました。

戦争中は、ほとんど勉強はできませんでした。今も世界では戦争が起きていますが、あのようなことは、二度とやらないでほしいと思います。

そ かい 疎開先での思い出

聞き取り

にしかわ かず こ
西川 和子さん
新宿四丁目在住
終戦時：9歳

私は昭和19年の小学校2年の時に、千葉県市川^{いちかわ}市から、父母と弟の一家4人で、山形県の母の実家^{そ かい}に疎開しました。

戦時中で一番印象に残っているのは、戦車の通る音です。道路をガーっと、もの凄い音^{すご}で走っていました。その大きな音が今でも耳に残っています。東京が大空襲^{くうしゅうけいほう}の時は山形にいたので、そこまで怖い経験はありませんが、山形でも空襲警報^{くうしゅうけいほう}が鳴った時は、銃弾が飛んでくるよと言われ、自宅の庭に作った防空壕^{ぼうくうごう}の中に逃げていました。大事な物や食料品なども普段から防空壕^{ぼうくうごう}に入れていました。

食べる物はまだあったほうだと思います。それでも白いご飯が少なく、野菜を入れて炊いていました。母の実家は農家ではないので、食べる物が無くなると、父や母の着物を食料に替えていました。配給の時は行列ができますが、配給の物だけでは全然足りなかったです。配給の中で覚えているのが、鮭^{さけ}の缶詰とトウモロコシの粉です。トウモロコシの粉で作ったお団子^{お 団子}は美味しかったです。

親元から離れて集団疎開^{しゅうだん そ かい}で来ていた同級生の中には、朝ごはんを食べてこない子がいたので、お昼に家に連れていき、母に頼んで食べさせていました。

疎開当初は東京言葉を使っていると言われて、

学校でいじめられて辛^{つら}かったです。受け入れてもらうまで時間がかかりましたが、そのうちに馴染^{なじ}んできてお友達ができました。

終戦の時は、天皇陛下のお話があると聞いて、みんなでラジオの前に集まりました。お話の内容は良くわかりませんでしたが、大人が明日から飛行機が飛んでなくなるよと言っていたので、戦争は終わったのだと感じました。防空壕^{ぼうくうごう}に入らないでよくなったので、子ども心にも気持ちが楽になりました。

終戦後は、仕事のために父だけが上京していました。私たちは10年ほど山形に残り、上京した時にはもう大人でしたが、家族と一緒に住むことができて嬉^{うれ}しく思いました。東京での生活は楽しかったです。

戦争は人の命も、素晴らしい建物も一瞬のうちに破壊してしまいます。人の命を何だと思っているのでしょうか。建物を元に戻すのに、どれだけのお金と労力が必要だと思っているのでしょうか。しっかりと教育を受けている人たちののに、無駄なことをしているというのがわからないことが理解できません。

今は自由で物も豊富です。平穏で暮らしていることが本当に有難いです。若い方たちもこの状況が当たり前だとは思わず、自由を履き違えずに、感謝の気持ちを忘れずにいて欲しいです。

がくどう そ かい 学童疎開を語る

寄稿

芳川 雅信さん
喜久井町在住
終戦時：8歳

昭和20年3月10日の東京大空襲（下谷、本所、向島、深川等今の台東区、墨田区、江東区等）を近衛公爵邸の防空壕で震えながら遠目に見た直後、淀橋区下落合1丁目421番地（現在は新宿区下落合2丁目16番付近）（注 中村彝アトリエ記念館の展示地図に残っている）から椿山荘（大叔母の邸）に引っ越した。僅か数日後の3月22日に学童疎開のため、学習院初等科3年生になる直前に日光に向かった。

満8歳で学童疎開に親が了解し送り出したのは長男で跡取りの立場にある者との思いが強かったと考えられる。今の椿山荘冠木門（昔は裏門）を勇ましく出発、市電で上野駅に行き未だ幼い小学生の集団が目的地の金谷ホテルに向かう。今ではあり得ない風景。

集団生活は受持ち教諭二人（主管）と若い寮母の方々の温かい指導お世話により総体的に恵まれ後年大人になった後はクラス会にお呼びして旧交を温めることになる。

一学年上に常陸宮殿下（当時は義宮）が居られた。昭和から平成に代替わりした際、読売新聞に当時の食堂での風景（アルマイトの食器で大勢の朝食風景）が掲載されている。

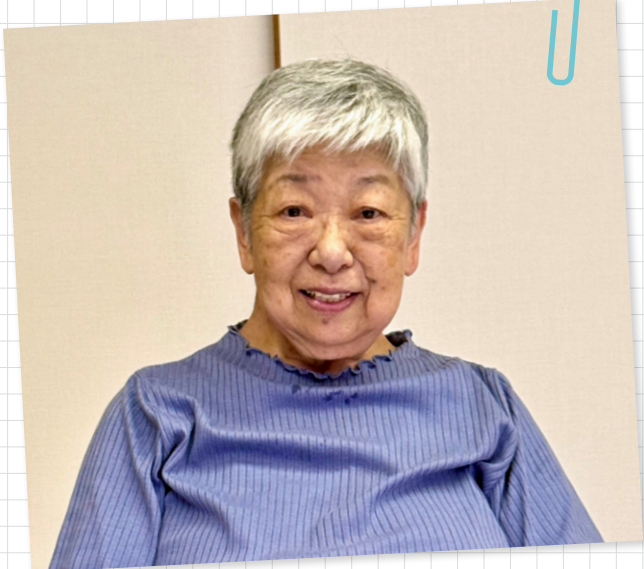
学習院だから恵まれていたでしょうと言われる

が、食糧事情は頗る悪くヤブカンゾウを食したりという部分も見られた。東京から生徒の親が来て菓子等を持参すればそれこそ鵜の目鷹の目で羨ましがった場面が多々あった。それでも周辺部（日光東照宮・日光二荒山神社・大谷川・神橋）は多く歩いたので十分見た。今の現地の繁栄を見ると隔世の感である。

戦況悪化して7月26日父が迎えにきて長時間満員の汽車に揺られて今の箱根小涌園（大叔母の別荘）にたどり着き3週間後に終戦。

ちなみに椿山荘は5月25日山の手大空襲の飛火で全焼、両親、妹、弟は無事で箱根に越した。

戦後特に三年間は（華族制度廃止で）苦しい生活であった。初等科は戦後11月には再開し学業は問題なかった。個人疎開者も戻り楽しい日々が送れた。住まいは親戚に頼ったり、椿山荘内の焼け残った守衛宅に住んだり波乱万丈の日々、両親の苦労は大変なものがあった。配給だよりのホッケ（今は高級魚）、ラジオの尋ね人など記憶に残る。25年に今の新宿区喜久井町に落ち着き爾来75年本当に良く生きた。「子どもの単身赴任」を経験し我慢を強いられたからこそここまで長寿が全うできた。有難いことであります。



私の戦争体験記

寄稿

碓井 達彌さん
北新宿一丁目在住
終戦時：6歳

昭和19年、私は5歳でしたが、東京本郷区、今の文京区に住んでおりました。近々東京は空襲になるという情報が入ったので、疎開命令が出ました。私の家族は父の故郷、山梨県日野春村に疎開することにしました。母は3歳の弟を背負い、父は私を背負い、小学3年・4年の姉たちはランドセルを背負い、4人とも両手に風呂敷包みを持って列車に乗り、当時、5時間かけて日野春駅に着きました。1日目は親類宅に泊まり、2日目からは埃だらけの家で生活が始まりました。翌年、私は日野春国民学校1年生になりました。片道一里、約4キロメートルの道を、雨・雪が降ればドロドロだらけの道を通いました。

時々、B29という飛行機が低空を飛んでくることがありました。米兵の顔が見えるくらいでした。学校では勉強もそこそこに、森の中で竹槍を持たされ、エイエイヤーと米兵をやっつける訓練をしました。毎日、空腹をかかえて通学しました。こんな状態で日本が勝つ筈がありませんよね。

ある夜、空襲警報が鳴り、外へ出てみると甲府の空が真っ赤に燃えていました。20年6月頃だったようです。

そして2か月後、8月15日がやって来ました。お昼にラジオを聴くようにという知らせがあったようです。昭和天皇のかん高い声が具合の悪いラジオから聴こえてきました。小学1年生の私には何が何だかわかりませんでしたが、戦争が終わった、戦争に負けたということだと知らされました。

東京は焼け野原で、すぐに戻ることはできませんでした。小学5年生まで日野春で暮らし、6年生の時、再び文京区に戻りました。小学校・中学校・高校までは貧しい生活が続きました。

私が今思うことは、戦争は、絶対にすべきではないということです。人々を貧しさと絶望の中に落としめるだけです。

世界から戦争が無くなってほしいと切に願っております。



戦時・戦後を生きて

寄稿

羽原 清雅さん

馬場下町在住
終戦時：6歳

終戦間際の昭和20（1945）年4月、新宿区^{しんじゅく}が生まれる前の牛込愛日小学校^{うしごめ}に入学、一日も登校することなく栃木県栃木市^{えんつうじ}の圓通寺に学校ぐるみの「学童疎開^{がくどうそかい}」の一員になりました。その前の1年ほどは、戦争を避けるために神奈川県^{にのみやまち}二宮町の知り合いの家に「縁故疎開^{えんこそかい}」をしていました。どちらも両親と離れ離れとなり寂しさばかり、7、8歳の子どもにはつらいものでした。

お寺には、1～6年生が4、50人いました。寝る前には毎晩、ふとんの縫い目に入り込むノミ、シラミ取りを全員でします。クレゾール（薬品）の入った小瓶につまんでは入れていきます。食事はご飯少しとおかずも少し、いつも空腹です。小学校に行くと、軍隊が駐留しており、大きな釜でご飯を炊き、みそ汁やおかずのいい匂いが校内に漂います。おなかが鳴りました。でも、子どもたちに給食などはありません。

お寺では毎朝、お弁当を作ってくれます。コメが密集したおこげが大人気で、1年生のおこげの順番だった僕の弁当がある日、上級生に取られて、泣いたことがあります。また、威張った6年生が、4年生の男の子にどんぶり一杯の水を無理やり飲ませるといった「いじめ」もありました。誰も、止めませんでした。

いいこともあって、お寺の池には竹で編んだ筒状の魚を捕る籠が仕掛けられており、時折魚が入っていました。終戦を知らせる天皇の放送は、難しくわかりませんでしたが、先生が小さな声で「戦争が終わった！」というので、みんなで飛び上がって喜んでいたら、叱られました。

9月に入って、東京に戻りました。ところが家がないのです。戦争の空襲で火災が起こるので、防火帯として一帯の家屋を撤去したため、住む家なくなっていました。愛日小学校も火災で全焼、焼け野原になって、まもなく校庭だったところに被災者のためにバラック（小屋）が建てられました。

そのため、愛日小学校は一時廃校状態となり、僕は隣の市谷小学校^{いちがや}に転校しました。結局、卒業も市谷小学校^{いちがや}でした。小中学校時代は住む家がなく、間借り生活が続きました。子どもなのに、騒ぐと叱られ、勉強机もない狭い部屋での日々でした。勉強どころではなく、コメの代わりに腐ったようなイワシがバケツで配られ、焼け跡で育てた水っぽいかぼちゃを食べさせられました。とにかく食べ物がないのです！

母の弟は、学生時代に旧満州^{まんしゅう}に兵隊として召集され、そこで死に、遺骨の代わりに小石一つが入っ

た箱が戻ってきました。「お国のため」として戦争に行き、悲しみだけを残しました。

その戦争から80年。日本には平和が続きました。でも、海外では大国の抗争、宗教や民族の戦乱、侵略のための戦争などが続いています。戦争は兵士だけではなく、街の人々を無差別に殺害します。見境なく命を奪うのです。

敵対する国と国、民族の違う人々同士、憎しみ合う近隣の一群、領土を広げたい強国の侵略など。平和のような日本でも、軍備が増強され、隣国などとのにらみ合いが続き、人々の交流が徐々に閉ざされ、次第に感情は不穏、憎悪、軽蔑、守りから攻撃気分へと次第に変化していきます。戦前の日本が中国や朝鮮半島、アジアの諸国に侵

出したという歴史が忘れられていくと、いつか日本も不安定な状況に変化しかねない懸念もあります。戦争は少しずつ段階的に積みあげられていくもので、いつか何かのきっかけができると、相手国への憎しみが高まり、愛国心という興奮が炎上して、戦闘に向かいかねません。昨今の政治を見てもわかるように、「軍事」が先行して、和平を求めて交流するための「外交」がとり残されていきます。

学童疎開^{がくどう そかい}から戦後の日々を思いつつ、僕は戦争や沖縄の話を書いてきました（「沖縄『格差・差別』を追う—ある新聞記者がみた沖縄50年の現実」『日本の戦争を報道はどう伝えたか—戦争が仕組まれ惨劇を残すまで』ともに書肆侃侃房刊）。

その結論として言うなら「戦争は悪」ということです。





あとほんの少し、戦争が早く終わっていたら

聞き取り

すだ さちこ
須田 幸子さん
百人町一丁目在住
終戦時：6歳

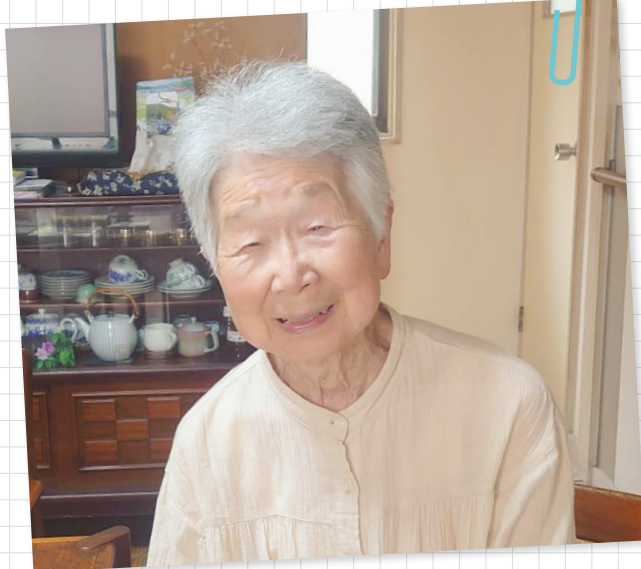
私は6歳で終戦を迎えたので、戦争体験は幼いころの記憶になります。目黒に^{めぐろ}住んでいましたが、母の実家である千葉県船橋市に^{ふなばし}疎開^{そかい}しました。4月に小学校に入学、5月には戦火を避けるため、父の実家のある福島県に^{ふくしま}疎開^{そかい}し、終戦となりました。

千葉では、幼稚園の帰り道にいつも空襲警報が^{くうしゅうけいほう}鳴り、友達と草むらの中にあるU字溝のようなところに隠れて、祖母が迎えに来てくれるのを待ちました。周辺には軍事施設がありましたが、爆撃を受けることはありませんでした。米軍は、この場所をキャンプとして使用するため、爆撃せず残っていたようです。爆撃されるという怖い体験は、千葉ではありませんでしたが、空襲警報はしょっちゅう聞いていました。警報が夜中に鳴ると、祖母が起こしに来ます。2月の寒い中、綿入れを着せられて敷地内の防空壕^{ぼうくうごう}に入ります。防空壕の中には、ストーブや生活用品もあり、中に入れば暖かでした。あるとき、B29が飛んでいく先の東京の空、西の空が、夜中であるのに夕焼けのように真っ赤に染まっていたことがありました。この光景は今でもよく覚えています。

戦火が厳しくなったのを避けるため、父の実家である福島^{ふくしま}の三春^{みはる}に疎開^{そかい}しました。汽車で向かう途中、機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}の攻撃を受けました。汽車は攻撃

を避けるため、トンネルの中で停止しましたが、しばらくして三春^{みはる}の駅に着くと、再度機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}で攻撃され、山の中に散り散りに避難しました。そのとき、耳の遠いおじいさんがいて、「逃げろ」という言葉が聞こえずウロウロとしていました。そのおじいさんを機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}が狙うのですが、自分たちも四方八方に逃げているところでしたので、余裕はありません。幸い全員無事でした。福島の家は、山の中腹にある大きな家でした。田んぼと桑畑、柿の木しかないのですが、夜は蛍がびっくりするほどたくさん飛んでいて、菜種油を搾ったがらを束ねて振り回すだけで蛍が取れました。そのまま家に持ち帰り、部屋の中に放すと蛍が光ってとてもきれいでした。福島では、珍しい光景も見ました。赤や青、黄色の光の玉が見えて、時々上にシューッと上がって消えるのです。地元の方は、「狐の嫁入りだよ」と教えてくれました。学校には、いともいて、畑のキュウリをもいで食べたり、戦争中であつたのに、子どもとしては楽しい思い出です。

終戦日の少し前、8月6日に父は戦死しました。弟たちはまだ幼く、父の顔も覚えていないと思います。あとほんの少し、戦争が早く終わっていたら、父は死なずに済んだのにと、今でも思います。



罪のない子どもたちの ためにも、戦争は二度と してはいけない

聞き取り

ふじむら
藤村さん
上落合三丁目在住
終戦時：5歳

実家は元々日本橋^{にほんばし}で呉服屋を営んでいました。私が生まれてすぐに父が出征し、母と二人残されました。母の実家は本郷^{ほんごう}にありましたが、祖父母と障害のある母の妹が住んでいました。戦火が厳しくなったころ私と母は、面影橋^{おもかげばし}近くにあったオリジン電気という会社に勤めていた伯母の紹介で、その会社のある栃木県^{も おかまち}の真岡町^{も おかし}（現在の真岡市）に5歳で疎開しました。終戦後も小学校を卒業するまでは、真岡町^{も おかまち}で過ごしました。母方の祖父母は疎開せずに東京に残りました。家は焼けてしまいましたが、幸いみな無事でした。真岡町^{も おかまち}に行くには、上野^{うえの}から電車に乗るのですが、駅の近くには浮浪児が大勢いて、持ち物を狙われないよう気を付けて歩かなければなりませんでした。電車も人が乗る車両ではなく、貨車でした。床に座った状態での道のりは、簡単なものではありませんでした。私も母と一緒に、食べ物と交換するために買い出しに行きました。呉服屋でしたから、当時貴重だった着物を食べ物と交換しました。どこにいても、食べるものには苦労した時代でした。当時で思い出すのは、集団疎開^{しゅうだん そかい}をしている女学生が、町中で列をつくって歩いていたときのことです。両親と離れて過ごす淋しさ^{さび}なのか、お寺に身を寄せていたと思うのですが、食事が満足にできな

かったり、本来であれば勉強にいそしみたいところ、畑仕事などに駆り出されていた口惜しさ^{くや}なのか、東京の戦況を案じてなのか真意はわかりませんが、涙を流しながら歩いていたことが子どもながら印象に残っています。空襲の怖さはあまり体験しないで済みましたが、一度だけ高台にある赤十字の病院が狙われて、爆撃を受けました。その時は川の近くにある防空壕^{ぼうくうごう}へ逃げました。離れていたのが被害もありませんでしたし、空襲の記憶はそのくらいです。それでも、父の仕事の関係で時々上京した折に焼け跡を見ており、本当に何もなく、遠くまで見通せる状態で、空襲の恐ろしさを感じました。

父は私が生まれてすぐ戦争に行ってしまったので、帰ってくる父を迎えにいったとき、私は顔もわかりませんでした。父は軍で食糧管理をする仕事についていたため、私たちよりも良いものを食べていたようです。帰ってきたときに甘いものも持ってきてくれました。

小学校生活は、イナゴを取って校庭に干したり、山に枯れ枝を取りに行ったり、おおよそ今からは考えられない環境でしたが、今でもイナゴの佃煮を売っているのを見つけると、子どもたちは食べないのですが、つい買ってしまいます。その疎開^{そかい}

先から中学1年生で東京に戻りました。

私が戦時中、直接空襲を受けることもなく過ごせたのは、伯母の「縁」があったからだと思います。私は教師になりましたが、戦中・戦後と様々な子どもたちを見てきた経験から、改めて資格を取り、障害児の教育に携わることを選びました。

そして退職後も地域の中で、こうした子どもたちの支援に取り組んできました。今も戦争によって罪のない子どもたちが、けがをして障害を負ったり命を落としています。戦争は二度と、絶対にしてはいけないと強く思っています。

疎開



体験を人生に生かす

寄稿

かみやま きよひで
神山 清英さん
中町在住
終戦時：5歳

戦局が傾くと空襲を避け東京の豊島^{としま}から、伊豆東海岸^{いとう}の伊東^{いとう}に疎開^{そかい}しました。両親にとっては、義理の父母相当の親戚の家への間借りで、肩身が狭くなるような苦労は少なかったようです。とは言え、食料や衣料^{ひつぱく}は逼迫し、どこ^{どこ}の家族も生きていくのに必死だったようです。

疎開^{そかい}先ではすぐに受け入れてもらえず

疎開^{そかい}先の土地の方たちとの考え方の相違があり、難儀^{なんぎ}だったようです。どぶ浚^さい、お祭りへの寄付、

物資の配給時の連絡や受取など、苦労の種は尽きないようで、土地の方たちから受け入れてもらうには、時間が必要でした。

いつ生命が絶たれるかわからない

幼年学校の親戚のお兄さんと大人の会話を、脇で聞きました。物事を中途半端にしておかないようにする、生命が突然絶たれた時に身ざれいな死に際とならないという主旨です。私は小学校就学前ですが、生死を感じる日常でしたので、年齢に

は不釣り合いなこの会話ですが、鮮明に覚えています。

夜は寝間着に着替えて寝られる

疎開先でのこと、夜中に突然起こされて、両親が東京から逃げてきたと告げられました。米軍投下のビラに、大規模空襲予告があったそうです。爆撃機B29による空襲で、夥しい焼死者が出たので、恐怖に駆られて逃げてきたのです。東京は毎夜の空襲で、寝間着に着替えることができず、逃げて来た晩は寝間着に着替えることができ嬉しかったそうです。

焼け跡にあったガラスの塊

東京の豊島の住居一帯は焦土となり、後始末をお願いした方が、ひしゃげたガラスの塊一つだけ証拠に持参し、両親に見せていました。なにもかも灰燼に帰していたそうです。

再疎開が不要になる

米軍の日本本土上陸進攻は相模湾からとのことで、米軍の艦載機が伊東の上空にも飛来するようになりました。庭先に防空壕を掘り、敵機来襲となると、中に退避しました。

こんな逼迫した状況ですので、再度の疎開先が必要となり、候補地が富士の須走でした。その準備をしたのは、終戦日8月15日の直前でした。

8月15日の玉音放送

昼頃、座敷に疎開していた家族や親戚などが集まり、NHKの放送を聞きました。ラジオは唯一のリアルタイムの情報源でした。皆揃ってがっかり、その様子を覚えています。

飛行機が怖い

上空の飛行機を見ると、小学校高学年頃まで恐怖を感じました。就学前の経験から来る、空腹に勝る空襲の恐怖でした。

どれにもこれにも、思い出したくない影が伴っています。非日常の体験でも、人生前向きに役立てようと常に思っています。終戦から80年、元気に過ごしていただける日本の安寧に感謝しています。でも、戦争は嫌だ！

寄稿

くりはら やすみち
栗原 靖道さん
若葉一丁目在住
終戦時：4歳

戦時中の記憶から

私は、太平洋戦争が始まった昭和16年、千代田区^{ちよだ}隼町^{すさ}の生まれ。この辺りが空襲を受けたのは昭和20年5月25日。各地で空襲が激しくなり始めた頃、新潟^{そかい}に疎開し、小学校に入る前に千代田区^{ちよだ}平河町^{へいかわ}へ戻ってきた。

私には4人の姉がいた。母は仕事をしていた父の手助けで忙しく、一番上の姉が3人の妹と私の面倒を見てくれた。三番目の姉が河口湖畔^{かわぐち こん}に学童疎開^{がくどう}をした時の話を聞いたことがある。姉は当時永田町^{ながた}小学校の3年生。

学童疎開^{がくどう}に出発したのは昭和19年8月27日。早朝、午前6時半に校庭に集合して7時20分出発。四ツ谷^{よつや}駅まで行進した。姉は泣きながら歩き始めた。出発を見送りに行った二番目の姉は、行進する児童たちの中から泣き声がいっまでも聞こえていたと父母に報告した。

富士吉田^{ふじよしだ}駅（現在の富士山^{ふじさん}駅）から河口湖畔^{かわぐち こん}の船津村^{ふなつむら}（現在の富士河口湖町^{ふじかわぐち こまち}）へ約4キロの道を歩いた。河口湖畔^{かわぐち こん}は今でこそ賑やかなリゾート地であるが、学童疎開^{がくどう}の小学生がやっと到着した河口湖畔^{かわぐち こん}は人影のほとんどないところだった。疲れ切って疎開先^{そかい}の河口湖ホテル^{かわぐち こ}についた姉は、「あー、ここから1人で父母のところには帰れない」と諦めの気持ちになったそうだ。

学童疎開^{がくどう}では家族と疎開児童^{そかい}の面会は自由では

なかった。面会人は1人、毎学期に1回、保護者宿泊の場合は1日3合の米持参など決められていた。児童の中には家族に会いたさから疎開先^{そかい}から脱走する者もいたらしい。母が姉の面会に行ったときのことだ。母は駅から夜道を河口湖^{かわぐち こ}へ向かって歩いていく途中、真っ暗闇の中で崖から落ちてしまい必死に這いずり登ってやっと疎開先^{そかい}にたどりついた。

生活はひもじかった。食事は次第に代用食になり豆や芋の中にやっと米粒を見つけることもあった。村の人が時にはふかし芋や正月の餅をくれることもあった。また、児童たちは虱^{しらみ}の大群にとっても悩まされたらしい。朝晩、手や足が冷たいので手袋を編んで送ってほしいと一番上の姉に出した「はがき」が残っている。茶色くなった「はがき」には乃木大将の肖像の3銭切手が貼ってある。

私が疎開先^{そかい}の新潟から千代田区^{ちよだ}へもどってきたのは昭和21年。平河町^{へいかわ}のあたりも空襲による瓦礫^{れき}の焼け野原だった。焼け野原の先に国会議事堂が見えたのを覚えている。焼け残ったトタンや木材で組み立てた粗末な家、バラックの小屋があちこちに建っていた。

父母は逝き、4人の姉たちは三番目の姉だけになってしまった。



昭和17年頃の写真

自由をあきらめざるを得なかった

聞き取り

しみず
清水さん
終戦時：19歳

戦争のあった当時、私の家は牛込北町で電気工事を行う電気店を営んでいました。中通りは大きな家ばかりで、裕福なお得意さまに囲まれ比較的恵まれた生活を送っていました。

しかし、女学校4年生の時に戦争が始まり、戦争が激化するなか、間もなく授業は行われなくなり、代わりに赤羽にあった兵士詰所（旧東京第一陸軍造兵廠）の勤労奉仕に動員され、兵器の詰め物をする作業に明け暮れました。

その当時は、「お国のため」という名目で、深刻な労働力不足を解消するために学生でも、子どもでも、日本中の全ての世代が戦争に巻き込まれ、やむを得ず、いや、考えることもできず働いていました。

女学校卒業後は、新宿鉄道局に入局し、代々木の鉄道員の健康管理をする部署に配属になりました。ここは3年近く勤務しましたが、その間に、自分の家を含む愛日小学校の周りの家が、空襲による延焼をあらかじめ防ぐための「建物疎開」で強制的に取り壊されたため、中野にある家に転居しました。

でも、その中野もB29の焼夷弾の投下で焼け野原になってしまい（父と中野駅方面に逃げて、家

に戻ったら自分が住んでいた家を除いて一面、焼け野原になったのを見て茫然自失になりました）、結局、父の実家のあった山梨県竜王町に疎開し終戦を迎えることになりました。

私は幸い縁故疎開ができ、食料はさほど不自由はしませんでした。行く先々で良い人たちに会えることもできました。当時多くの人たちが食べるものに困り、集団疎開した子どもたちが親元から離れ不安な気持ちで過ごしていたり、また従兄が学徒出陣で海軍に入り1か月も満たないうちに結核で亡くなりました。戦争中という状況であったにせよ、私は恵まれた生活を送ることができていたのだと思います（もしかすると、いつも人に思いやりのあった父のおかげかもしれません。他人によいことをすれば、必ずよいことが返って来るというも言っていましたから）。

ただ、自分がやりたいことをやる自由をあきらめざるを得なかったこと、そのような発想すら奪われてしまった、精神的に殺されてしまったに等しい多くの若者や戦争の犠牲になった人たちのことを考えると、戦争はすごく残酷なものだと思いますし、絶対に繰り返してはならないことだと思います。



私の戦争体験記

聞き取り

塩野 時枝さん
百人町四丁目在住
終戦時：15歳

私は疎開はせず、戦時中は生家のある土浦で過ごしました。茨城県には、予科練の土浦海軍航空隊と徴用で入隊した20歳以上の人が配属される霞ヶ浦海軍航空隊がありました。学校にバスが迎えに来て、土浦の予科練勤労奉仕で行きました。大きな紙から飛行機の教科書を作る仕事でした。予科練では、大きなお釜でご飯を炊いていて、それを珍しいなと眺めていたことを覚えています。女学校は4クラスありましたが、勤労奉仕や竹槍の訓練など、勉強はあまりできません。そういう時代でした。農村に住んでいたのも、空襲はなく、防空壕も掘ったのですが、水が出てしまいあまり入りませんでした。東京の空襲は土浦からも見えました。夜、東京の方の空が真っ赤になって、燃えカスのようなものも飛んできました。

夫は、大正13年生まれで、航空関係の会社に

勤めていました。徴兵され、新潟でスキの訓練があった後、樺太に連れていかれたそうですが、航空関係の会社にいたことが功を奏したのか、飛行機の修理のため旭川に戻ったところで終戦を迎えたそうです。樺太では泥棒が多くて、大切なものは雪に埋めていたと話していました。

東京の青山に祖父の弟が住んでいて、私も小さいころよく遊びに来ていました。青山のおじいさんは、皇宮警察を勤めあげた人で、定年退職して家にいました。土浦に来るときは、たくさん勲章を付けてきました。でも、昭和20年5月の山の手大空襲で亡くなってしまいました。

私の住む地域では、予科練の人が九州に出発する際に、5、6軒の家が食事をふるまっていました。知覧から敵地へ飛び立つ人を、ねぎらう気持ちから始めたのだと思います。



忘れもしない、 1945年7月28日

聞き取り

もりなが せつこ
森永 節子さん
西新宿四丁目在住
終戦時：15歳

私は愛知県一宮市^{いちのみやし}で生まれ、地元の尋常小学校^{じんじょうしょうがっこう}に通っていました。1941年12月8日、神社の掃除当番から家に帰ったら、ラジオ放送が流れてきました。「帝国陸海軍はアメリカ真珠湾^{しんじゅわん}にて宣戦布告せり」と。父にこのラジオの意味を聞き、太平洋戦争が始まったことを知りました。

1942年4月、一宮市の女学校^{いちのみやし}に入学しました。1年生の時は普通に授業がありましたが、軍国主義^{しゅうしんか}の教育のため、修身科（今の道徳）が多く厳しかったです。

1年生の半ば頃から、お百姓さん宅の若者たちが戦争にかり出されるので、留守宅の畑仕事の手伝いとして自転車に乗れる生徒は参加して、乗れない生徒は食糧増産のため、学校の校庭や中庭を耕してさつまいもやじゃがいもを植えて世話をしました。その頃、授業は月曜だけになっていました。

2年生の中頃より、学徒動員^{がくとどういん}で縫製工場^{きうせいこう}で働きました。私は兵隊さんたちの軍服を縫う役で、ズボンの脇を一直線に縫いました。

そうしている間にアメリカによる空襲が始まりました。ラジオから「B29が編隊を組んで進行中。名古屋方面をめぐっている」と警戒警報^{けいかいけいほう}が流れてきます。それが毎日毎日で神経が疲れます。近所

では、空襲があったときに入る防空壕^{ぼうくうごう}を掘る家が沢山^{たくさん}ありました。我が家も大人数ですから大きい壕^{ごう}を大工さんが作ってくれました。



家族写真

空襲も毎日毎日^{ひど}で酷い状況でしたが、物資もいよいよ底をつき、特に食糧は米、麦はほとんどなくて、ひえやあわがあるだけましな方です。油を搾った大豆のかすとか、そんな物まで食べていました。

1945年7月28日。忘れもしません。我が市もとうとう空襲を受けて焼け野原になりました。空襲警報^{しゅうけいほう}発令とともに上から焼夷弾^{しょういだん}が雨あられと落とされて見る見るうちに家々が焼かれ、みんな防空壕^{ぼうくうごう}に逃げ込みました。しかし、防空壕は穴に蓋^{かぶ}を被せただけのもので、逃げ込んだ人たちはみんな

な蒸し焼きとなって死んでしまいました。私と姉は命からがら母の故郷へ逃げましたので助かりました。私たちが逃げていくのを近所の人たちは「非国民だ」と怒鳴りました。

小さかった妹や弟は田んぼの畦道^{あぜみち}で母と震えながら夜空を見ていました。あくる朝、母から言われて我が家を見に行き^{あぜん}て啞然としました。私の家と隣裏にある尼寺が焼かれず残っていたのです。その後、父の会社の人たちが家の中を綺麗^{きれい}にしてくれ、当分の間、被災された方々の宿泊所になりました。依然として食糧はなくひもじい日々でした。

1945年8月6日広島、9日長崎。原子爆弾なるものが落とされて沢山^{たくさん}の人たちが犠牲になりました。私も子ども心に日本はおしまいになる、みんな死んで日本はなくなってしまうのだと思いました。思えばこの日は私の15歳の誕生日でした。戦争なんかやめてほしいと神仏に祈りました。

同年、8月14日午前10時半頃。空からバババンと、名鉄の壊れた車両の中で生活している人たちが銃で狙い撃ちされました。私たち家族も駅に

近いので、みんな震えながら押入に入り布団を被^{かぶ}っていました。

そして8月15日、昨日空から射撃を受けたばかりなのに、天皇陛下からお言葉があると知らされ、みんなラジオの前に集まり耳を傾けました。玉音^{ぎよくおん}放送^{ほうそう}でした。

私にはよくわからなくて父に意味を聞いたら、「日本は今日この戦争を終了、日本は全面的に無条件で降伏したんだ。負けたのだ」と。みんな泣いていましたが、私は一人手を上げて万歳しました。父に窘め^{たしな}められましたが、みんな内心ではほっとしたことと思います。

本当に、もう戦争はいやですね。



思い出のアルバム



子どもの頃の写真



私の戦争体験記

聞き取り

矢屏 昭治さん
西新宿四丁目在住
終戦時：15歳

私は農家の生まれで、両親とともに千葉県佐原市に住んでいました。同級生には海軍や陸軍に志願した者も、中には特攻隊員になった者もいましたが、私のように体の小さい人は入隊を望むこともできません。

中学3年生の時、学徒動員で平塚の海軍火薬廠へ行くこととなりました。火薬廠で働く大人たちが出征してしまい、人手がなくなったため、私の学年全体が学徒動員にかり出されたのです。

ある日、平塚が空襲の標的となりました。何十機ものアメリカ軍の飛行機が、平塚の上空を、まるで自分のものかのように飛び回り、バラバラバラと焼夷弾を落としていきます。平塚は一瞬で火の海となりました。みんな必死に防空壕や大木の下に逃げますが、爆弾は防空壕も何もかも突き破って我々を襲ってきます。あんなに恐ろしいことはありません。空襲が止んでも、3日も4日も火は消えず、私が働いていた火薬廠も焼け落ちてしまいました。

何とか生き延びた私や他の学生は、焼け野原の中で防空壕を探し、亡くなった人を引き上げて、町中を歩き回りました。亡くなった子どもを引き上げ、それを見た母親が泣き崩れていく姿は、本当に辛いものでした。

終戦を迎え、私は田舎の佐原市に帰りました。そのうち、出征した兄が死んだという知らせを受けました。遺骨もなく、兄の帽子だけが戻ってきました。兄の出征の日を思い出します。村中の人々が駅に集まって旗を振ったり手を叩いたり、万歳で兄を送り出していました。私も自慢の兄を「お国のために頑張って」と見送りました。今、あの時に帰れと言われても、当時の気持ちには帰れないです。戦争以外の、アメリカを倒すこと以外の、



気持ちが当時はなかったのです。母は死んだ兄の帽子を握りしめて泣いていました。当時の母の気持ちを思うと言葉になりません。

この歳になって伝えたいことは、ただただ、戦争だけはしてはいけないということです。



引き揚げの生活

寄稿

す どう す み こ
 首藤 純子さん
 内藤町在住
 終戦時：16歳

私が経験した戦中戦後の混乱期、特に満州から引き揚げ後の生活は、忘れられない記憶として残っています。今回は、その頃のささやかな日常のエピソードをお話します。

昭和17年の夏、私は新京（満州国）から帰国しました。都心は空襲の危険があったため、小田急線の成城学園前に住みました。満州にいた頃は、母も外出時に長い毛皮のコートを着ていたのに、東京に来てみれば、家の中が火鉢ひとつくらいしか暖房がなく、本当に寒かったです。台所は外に屋根のついた竈がありました。家の中にもガス台はあったと思いますが、人数が多いから外で炊事して、冬は長い毛皮のコートがあつて良かったと言っていました。でも泥棒に入られたのです。満州から筆筒を持って帰ることができなかったのも、大切なものは革のスーツケースにしまって、それを応接間に10段ぐらい積み上げていました。ある朝起きてみたら母の着物とか、父のマントで仕立て直してもらったコート等、めばしい物は全部持っていかれ、泣くに泣けなかったです。せっかく作ってもらったカーキ色のコートが無くなっていたのには本当にがっかりしました。

米粒ひとつさえ手に入れるのが大変だったので、華やかな柄の着物一枚で、登戸辺りの農家で

さつま芋何本かに換えてもらうこともありました。ヤミ米も買えないし、栃木の方まで買い出しに行っても全く手に入らない。結局、代用品として大豆などを食べてましたね。



満州の自宅



満州から引き揚げ後、成城学園前の自宅

幸い、家の庭がとても広がったので、自分たちで何か作ろうということになったんです。でもね、野菜なんて作ったことがないから、かぼちゃの種を蒔いてみても小さくて、今振り返ると、あれほどの食糧難の中で、よく生き延びられたと思います。

満州^{まんしゅう}から帰国して、父に「私はどこの学校に行くのでしょう」と聞いたら「もう決めてある。ここから学校まで歩けるよ」って一度歩かされました。それが、桐朋学園の前身の山水高等女学校でした。満州^{まんしゅう}は涼しいけど、東京は暑くて、通学路の農家で飼われている牛や馬の横を通るのが嫌で、私はわざわざ遠回りして電車に乗っていました。妹も終戦の前の年に入学したんですけど、ゲタで45分ぐらい友達と歩いていましたね。制服はスフという全国標準服で通学していました。昭和19年になると5年生から勤労働員^{きんろうどういん}が開始され、工場に行った人は大変だったみたいです。戦争中は本当に勉強なんて全然できなくて、英語も途中でしなかったし、薙刀^{なぎなた}や防空壕訓練^{ぼうくうごう}の授業とかで、なんのために学費払ってたのかしらと思いました。4年で大学受験できますが、父が戦死したのがわかり、結局5年生には上がりませんでした。籍はあったようで5年卒になっています。父が生きてたら大学に行けたのになと思いました。



白菊小学校・昭和13年(満州)



敷島中学校の
生徒手帳(満州)

敷島中学校の
入学許可証(満州)



戦争と私 ～引揚者として暮らして

寄稿

なかやま
中山 ヤエさん

西早稲田三丁目在住
終戦時：13歳

私は昭和7年3月生まれで、今年93歳になりました。
戦争についての記憶はあまりありませんが、戦争の前は樺太^{からふと}で馬鈴薯農家^{ばれいしょ}をして家族6人で平穩に暮らしていました。

終戦後、勘の鋭い母が、「今、日本に帰らないと二度と生きて母国に帰れないかもしれない」と言い出したので、急遽、引揚船^{きゅうきょうせん}に乗り、日本に帰国することになりました。母に「一番好きで、高い服を着て」と言われたので、「ああ、戦争に負けたし、私もきっと殺されるんだ」と思ったことを覚えています。

樺太^{からふと}から引揚船に乗り、5日後に何とか北海道^{おたる}の小樽へ上陸しました。私は船酔いがひどく、港に着いたときに家族とはぐれてしまい、町で銃を持っていたアメリカ人に目を付けられました。何歳か、と聞かれたようなので13歳と答えたのですが、私があまりに小さく、具合が悪そうなためか、銃を向けられることはなく、仲間と話して、そのまま去って行ってしまいました。その時、アメリカ人にもいい人がいるんだ、と思ったものです。

それから、母の生家のあった青森へ向かいしました。しかし、引揚者のためお金もなく、遠縁の家の軒先にわらを敷いて、しばらく暮らしました。食べ物もないので、かぼちゃの茎の皮をむいて湯がいて食べていました。ほかにも毒の無い野菜の茎や葉、山菜などを取って食べました。父がどこ

からか、メリケン粉のようなものを手に入れ、みんなで団子を作って、売り歩きましたが、まずかったのか、全然売れませんでした。

樺太^{からふと}から引き揚げる前のことですが、戦争が終わったにもかかわらず、まだ空襲が続いていて、私は防空壕^{ぼうくうごう}を掘られました。空襲警報^{くうしゅうけいほう}が鳴った時に、自分で掘った穴に入ろうと防空壕^{ぼうくうごう}へ行ってみると、すでに村の人たちでいっぱい、中に入ることはできませんでした。そこに入っていたのは、まったく穴を掘ってもいない人たちばかりでした。

しかし、もしも中に避難できたとしても、穴は浅いし、天井はベニア板1枚に土をかぶせて作った、名ばかりの防空壕^{ぼうくうごう}でした。爆弾が落ちたら助からないとは思いますが、自分で掘った防空壕^{ぼうくうごう}にも入れてもらえず、何のために苦労して穴を掘ったのかと悲しい気持ちになりました。

それから両親、兄、2人の姉たちと生き延び、農家の小作をしながら、なんとか人並みに暮らしてきましたが、今は長生きできた末っ子の私一人だけとなりました。

現在は東京の娘の家で幸せに暮らしています。孫3人とひ孫2人には、絶対に私のような辛い目にあってほしくない。いつまでも戦争のない平和な世界であってほしいと祈りながら生きております。

寄稿

江口 太助さん
 上落合二丁目在住
 終戦時：12歳

原子記録 旧制中学校1年生の記録

昭和20年、旧制中学校1年生として福岡県立柳河中学校に合格して入学。当時は農村地域として通学路の両サイドは麦畑、菜の花畑、レンゲ畑等で美しい景色。毎日行き帰り見て楽しみ。戦時中のことで食糧が不足ぎみで食べるものがほとんどなく、通学生は弁当なし状態でした。皆様栄養不足だったと思います。

その夏休み、出校日は全員生徒に決められた。僕の場合は8月9日、この日は気温が朝から28度あり、昼頃は30度以上だったと覚えています。学校の窓ガラスが反射して敵の飛行機の目標になるのでガラスにセメント、砂、水をまぜ合せ窓ガラスに塗る作業を行っていた時、すごい地震が起きたように校舎がゆれました。と、その時、「地震が来た」と誰かわかりませんが叫んだのです。急いで下の方へ逃げました。

それは長崎原爆の爆風だったのです。

その直後、南西方面の空にアドバルンのような大きい雲が、何kmも離れた所からも中心部が薄い、まるでピンクの動物でもいる様な動きでうずを巻いているのが見えます。その外は薄いグレーが何かを囲む様な動きで、外端が黒い雲がひときわ大きくもくもくとのぼって動いているのが遠く

からも見えたことと思います。

生徒たちは学校の2階より約20分～30分思いに見ていました。その1日か2日後か判らないが風船爆弾とわかりました。真夏の空に風もなく爆破した物を見ることができました。学生時代のことが今日まで80年間忘れることができず、良いか悪いか子どもの頃の強い印象が頭にこびりついています。

長崎市内まで柳川市より60kmあります。うち有明海が30kmあり、柳川市よりも高い建物がなく天気も良くはっきりと見えたものだったなと思います。その後、何日かするとSL機関車が貨物車5台を引いて、佐賀線を福岡瀬高まで行くのですが、この貨物車には長崎原爆被害者が沢山乗っていました。皆様身に白い軟膏を付けてようやく歩く人、すわりこむ人、寝ころがる人、子どもをおんぶ、抱っこする人、駅のホームは多くの人でいっぱい皆様水、水、水を求めて、くれくれと叫び強く求めて、白い軟膏で最後の生きる於母影を見て、私の頭から離れることができません。今でもそうです。安らかにやすみくださいと言って家の仏様に毎日水と線香をたいてお参りしています。



学生時代の戦争の記憶

聞き取り

ごとう さきち
後藤 佐吉さん
四谷三栄町在住
終戦時：20歳

昭和17年、熊本の第五高等学校に入学したころは、寮生活をしながら蹴球に打ち込んでいました。昭和19年4月から進学を目指して勉学に努めようとした矢先、高等学校は9月切り上げの卒業となり、長崎の三菱造船所^{きんろうほうし}で勤労奉仕することになりました。19年5月から8月下旬までの3か月間、三菱造船所^{きんろうほうし}での勤労奉仕は、リベット工をさせられました。2,000トンぐらいの大型船で、クレーンで運ばれてくる鉄板をボルトナットで仮締めする仕事でした。狭い船台の木の板の上でハンマーを振るうこともありましたが、事故なく無事勤労奉仕^{きんろうほうし}を終えました。

6月には満20歳を待たずの繰り上げ徴兵^{ちようへい}検査の知らせが届きました。第1乙種合格でしたが、理工系であったため、すぐに兵役にはつかず、第1希望の東京帝国大学工学部鉱山及び冶金^{やきん}学科に入学しました。入学式で当時の工学部長が「君たち工学部の学生は、兵役延長のためこうして勉学することができるが、やがて召集^{しようしゅう}されるその日まで勉学に励んでもらいたい。」という挨拶が思い出されます。入学後、いずれ徴兵^{ちようへい}、軍務につかねばならない時代であるからと、海軍委託学生に応募しました。しばらくして呉の海軍工廠^{くろ}で製鋼の実務を学ぶように命令されました。大学の講義を飛

び越しての現場主義にびっくりすると同時に我々幹部候補生への期待が大きいことも感じました。

昭和19年暮れまでは、まだ東京への空襲がなく、工学の基礎となる数学、力学、応用物理学及び実験などが行われていました。昭和20年に入るとB29による東京への爆撃が始まりました。最初のころは、軍需工場、倉庫などが狙われたようでしたが、住宅地^{しやうい だん}への無差別焼夷弾爆撃に変わってきました。B29の侵入による警戒警報発令は、短時間とはいえ毎日のような日々でした。私は焼け出されませんでした。1回、2回と焼け出されたものもありました。被災した教授の家の後片付けを手伝ったとき多数の日本刀が焼けたのを見て、改めて空襲のひどさを実感しました。このような状況でも講義、実験は行われました。真の戦況はまともに知らされることもなく、皇国のため、軍需品生産に寄与できるよう一生懸命勉学に励んでいました。

故郷の浜松^{はまつ}には、飛行^{れんたい}部隊、高射砲^{こうしゃほうれんたい}部隊、これらの部品・製造工場があったため、再三にわたり空襲を受けました。実家の家族の疎開^{そかい}が決まり、応援のために出かけた6月18日の夜、浜松^{はまつ}が大空襲を受けました。家族は既に疎開先^{そかい}に移動後で、私一人が実家に^{とど}留まっていたため、まともに空襲

を受けました。爆弾の音に数時間脅かされましたが、幸い被害を免れました。この^{はまつ}浜松大空襲により、^{はまつ}浜松の中心部はほとんど焼け落ちました。その後も^{はまつ}浜松は再度にわたり空襲を受けたため、家族はさらに離れた^{えんしゅうもりまち}遠州森町近くの田舎へ疎開しました。兄はこの間、丙種不合格であったにもかかわらず、徴兵され九州方面に派遣されていました。私は一旦東京の学業に戻りましたが、8月につかの間の休講を利用し、^{そかい}疎開先の家族の応援に出かけました。この短い期間に、ソ連の参戦、広島・長崎への新型爆弾投下、そして終戦を迎えました。

私も^{もりまち}森町の田舎で^{ぎよくおんほうそう}玉音放送を聞き、全く驚愕したことを覚えています。「^{しんこく}神国日本は本土決戦で勝ち抜く」という政府の発表を、信じ切っていた大多数の国民にとっては、^{へきれき}青天の霹靂の^{ぎよくおんほうそう}玉音放送でした。しかし、もしもこの^{ぎよくおんほうそう}玉音放送が1週間延びていたら、どれだけの被害が広がったか。さらなる原子爆弾、空襲による死者、被災者は何十万人を超えたことでしょう。敵軍の本土上陸による合戦で、私自身も存在しなかったでしょう。まさに、^{ぎよくおんほうそう}玉音放送は当時の日本に吹いた神風であったと私には思えます。

戦時・戦後の暮らし



戦争で諦めた進学

聞き取り

^{みょうが れい}
冥賀 令さん
西新宿四丁目在住
終戦時：18歳

私の故郷は宮城県^{とめぐんうわぬまむら}登米郡上沼村（現^{とめしなかだ}登米市中田町）です。農業が盛んな場所でした。父母はどちらも教育関係の職業をしていましたが、私の家も農地を持っていました。

戦争当時、私は^{とめ}登米高等女学校に通っていました。女学校2年生までは、普通に授業を受けることができ、教科に英語もありました。しかし、3

年生に上がってからはガラッと空気が変わり、私を取り巻く環境も軍事色が強くなりました。英語の授業は廃止になり、体育の時間は^{なぎなた}薙刀の練習をするようになりました。自分で作ったもんぺをはいて、上にセーラー服を着て登校しました。

授業を受けるよりも、農家のお手伝いをするのが多くなりました。大人たちが戦地に行っていし

まい、農家の働き手がいなくなってしまったからです。家業が農家ではない私にとっては慣れない作業ばかりで苦労しました。

戦地の兵隊に送るために、手ぬぐいで慰問袋を作ったり、出征する兵士に渡す千人針^{せんになんばり}をすることもありました。戦争一色で、反対すると捕まるような時代でした。

田舎の方でも空襲の危険がありました。北上川^{きたかみがわ}という川の橋を狙ってB29が爆弾を落とすのです。いつも防空頭巾を肩にかけて生活していましたが、気休めでしかありませんでした。

18歳で女学校を卒業し、その後は仙台^{せんだい}の学校に進学する予定でし

た。試験にも受かっていましたが、当時仙台^{せんだい}は空襲がひどく、上沼村^{うわぬまむら}からも仙台^{せんだい}に焼夷弾^{しょういだん}が落ちる様子が見えていました。そのような状況で、娘を心配した両親の反対もあり進学を諦めました。



女学校時代

卒業後は、何か職に就いていないと関東の方の工場へ動員させられてしまうので、役場で働きました。私の友人たちも田舎にいたために、臨時で教師の職に就く者が何人もいました。

終戦後、宮城で働きながら、皇居の焼け跡を整理するための勤労奉仕^{きんろうほうし}で東京に出ることもありました。食べるものが不足していた中、宮城にもアメリカの駐留軍^{ちゅうりゅうぐん}が来て、田舎の役場にも配給があり、軍人の食糧を分けてくれたこともありました。その時、やっぱり人間は人間、人種は違うけれど助け合いができるんだと思いました。

23歳まで宮城で過ごし、結婚を機に東京に住み始めました。移り住んだ東京の町は焼け野原で、住まいのある西新宿^{にししんじゅく}から中野^{なかの}の方までずっと見え



皇居勤労奉仕

たほどです。東京に出てきてからの方が、生活は苦しかったです。田舎にいたうちは食べ物に困ることは少なかったのですが、東京の配給は本当に少なく大変でした。お米が足りないので、大根など野菜を刻んで入れて食べていました。火の元もなかったのも、鉄関係の仕事をする夫のツテでもらったコークスで、火を起こし、1日分の食事を全部作りました。1日に1回しか火を起こせなかったのも、消えたらおしまいです。作ったご飯は時間がたって冷めないように布団に包んでいました。

子どもが生まれてからも戦後の貧しい時代を過ごしました。子どものおむつも配給がありましたが、浴衣^{つは}を継ぎ接ぎして作ったもので、使うのに躊躇^{ちゅうちよ}するようなものでした。

女学生の時代から苦しい日々を経験し、戦争はもう二度と起きてほしくないと強く思います。



小学校卒業写真



当時のアルバム



聞き取り

ほりこし みえこさん
北新宿三丁目在住
終戦時：8歳



聞き取り

もり た やすさん
北新宿一丁目在住
終戦時：13歳

ただただ^{あんど}安堵した終戦の知らせ

私は新潟県妙高市出身です。戦争が始まり、最初のころは想像もしていませんでしたが、私が小学校に入学してそのうち、妙高も厳しい状況になっていきました。町会からの命令で、みんな自宅に防空壕を掘りました。空襲警報が発令され、サイレンが鳴り、「妙高の上空にB29現れる。」なんてラジオで流れてくると、とても怖かったです。

小学校では日常的に、空襲警報が鳴ったときの訓練をしていました。6年生が班長になって、空襲警報が鳴ったら、班長を先頭に集団になって家に帰るんです。実際にそうやって家に帰されることが何度もありました。

「戦争が終わったんだよ。」と親から言われたときは「ああ、よかった。」とただただ安堵しました。

終戦後のことですが、「進駐軍の兵隊が来ても、何も物をもらってはいけないよ」と周りの大人から言われていました。実際に会うと、アメリカ軍の兵隊は大きい人たちがばかりで圧倒されましたが、優しい笑顔を見て、少し安心したことを覚えています。

「戦争は絶対にやってはならない。」と声を大にしたいです。何にもプラスになることはありません。悲しみだけです。世界が仲良くしてほしいと切に願います。

防空頭巾をいつもそばに置いて

私は山形出身ですが、堀越さんと同じように、空襲で怖い思いをたくさんしました。当時の普段着は着物でしたが、戦争が始まると着物でもんぺを作ってそれを着るようになりました。いつも防空頭巾をそばに置いておいて、警報が鳴ったら被ってすぐ逃げられるようにしていました。

戦争当時、私は小学校6年生～中学生でした。体育の時間は額に白い鉢巻をつけて、敬礼から始まり、薙刀の練習をしました。空襲警報が解除されると、学校の時間にも豆まきの仕事をしました。そんな環境だったので、勉強をする時間はあまりありませんでした。食糧難もあり、食べ物がかぼちゃやじゃがいもが多かったので、配給でもらったバターには本当に感動しました。お米にバターを溶かしてお醤油かけて、それがとても美味しかった記憶があります。私の2人の姉は、山形の銀行員でしたが、戦争中は川崎に動員され、住み込みで働きに出ていました。姉の1人が「好きな人がいたのよ。でも戦争が始まって、どこにいるかわからないし探しようがない。」と言っていたのを思い出します。私たちの世代はその頃ちょうど思春期でしたので、そのような思いもありました。そんな中でしたが、ご縁というものが、思いがけない形で訪れました。山形へ疎開に来たご家族の息子さんが、東京で国鉄の運転士をしていたのですが、私はその方と結婚することになりました。それから東京に出てきて、今まで暮らしています。

寄稿

いけなが たまこ
池永 珠子さん
中落合四丁目在住
終戦時：11歳

子どもの戦争体験

戦争の光景を初めて見たのは、落合第三小学校^{おちあい} 5年生の時、学童疎開^{がくどう そかい}から縁故疎開^{えんこ そかい}に切り替えるため、一時、中落合^{なかおちあい}の家に帰って来ていた時です。

その日、警戒警報^{けいかいけいほう}から切り替わった空襲警報^{くうしゅうけいほう}に促され、防空頭巾^{かぶ}を被りリュックを背負い指定されていた防空壕^{ぼうくうごう}に急ぎました。空には前方を左から右へとB29編隊の銀色の巨大な姿が見えました。その日はあの下町の東京大空襲でした。

4月、6年生になり秋田に縁故疎開^{えんこ そかい}し、空襲もなく、その年8月終戦。11月に父が迎えに来て私と上の弟、妹とで東京に戻りました。山手線が巣鴨駅^{すがも}に停車すると駅前^{すずめ}は焼け野原。本当に驚きました。私の家は変わらず残っていました。あたりは今よりずっとたくさんの緑があり、小野田の森など屋敷林に囲まれ爆弾投下がなく焼けなかったのです。その時のほっとしたことと、さっき見た焼け野原の光景とで「戦争とはこういうことなんだ」との思いは忘れることができません。

私の父は、戸山ヶ原^{とやまがはら}の陸軍技術本部付属科学研究所に勤めていました。高射砲等兵器^{こうしゃほう}の設計図の研究をしていました。飛来したB29のはるか下方で炸裂し、敵機を撃ち落とすことができない高射砲^{こうしゃほう}を見て「あれでは仕方がないなあ」と子ども心にも冷めた感情を持ったものです。その後、父た

ちのグループはもっと高度な兵器の研究を進めていたようですが完成前に終戦を迎えました。

翌年、私は近くの目白学園^{めじろ}が女子を受け入れたので入学。目白学園の森が爆撃から校舎を守ってくれたのです。2年後、新制中学が目白学園内に開校しました。

母は8月11日に生まれた赤児と3歳の弟と秋田に残っていました。東京は大変な食糧難で時々支給されるさつまいもはご馳走^{ちそう}でした。私は食べさせてもらえる物は何でも食べなければ生きてゆけないと妹や弟にも言い聞かせました。母は友人の便りで東京へ帰った3人の子どもの強度の栄養失調を知り、2人の幼子と共にむつ入れや袋に米や卵等を詰め込み、帰ってきてくれました。その夜、母は真っ白な御飯を炊き、真っ黄色な卵焼きを作り、私たちに食べさせてくれました。その後母は友人とリュックに自分の着物や帯等を詰め、近隣の農家を訪ねて米や食糧に替え、5人の子どものを守り育ててくれました。母と子どもたちが生きてゆくための戦いでした。

父は「二度と人を殺す兵器の設計図は作らない」と職探しを始めました。日本中の大人も子どもも平和な明日に向かってしっかり歩み始めたように思いました。



戦争を言葉だけで伝えるのは難しい

聞き取り

えのもと まさかず
榎本 雅一さん
北新宿四丁目在住
終戦時：11歳

昭和16年、私が小学校に入学したその年の12月8日に日本軍が真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まった。日本が優勢だったのも一時で、昭和18年頃から戦況は悪化していった。

戦況が悪化するにつれ、東京は空襲で危ないから疎開が始まった。両親の田舎がある者は親戚の家に疎開していったが、私の両親は東京の生まれだったので、東京に残ることとなった。

昭和20年3月10日、東京大空襲。続けて3月25日の空襲にあい、私の住む北新宿の町は一面、焼け野原に変わってしまった。町民は皆、戸山ヶ原の陸軍技術本部（現在の百人町あたり）近くの山へ逃げた。山の上から自分たちの町が焼けていくのをただ眺めているしかなかった。家は焼け落ち、防空壕も焼け、住むところを失った私は、両親と離れ、草津温泉へ学童疎開に行くこととなった。疎開先は旅館だったので、良いものが食べられるかと期待したが、そんなことはなく、唯一良かったと言えるのは、温泉地だったのでお風呂に入れたことくらいだ。両親と会えない日々はとても辛く、苦しい生活で、中には脱走する者もいた。それでも「お国のため、お国のため」と、まだ小さい体で、重いレンガを山2つ越えて運んだり、懸命に日々を過ごしていた。

終戦後、東京に戻ってからは焼跡の片づけに日夜励んだ。学校を再開するにも、まずは足元を綺麗にするとところから。当時は家がないので阿佐ヶ谷の親戚宅に住まわせてもらい、その後、掘っ立て小屋の家ができて、北新宿の地に戻ることもできた。

食べるものも乏しく、お金があっても何も買えない、もどかしい時代だった。

当時、私はまだ子どもで、青春時代も恋愛も戦争に奪われた自分より上の世代から見たら、もっと違うように見えていただろう。年代によって戦争に対する考え方は異なるし、終戦前と終戦後でも変わる。戦争が終わってからは、見えるものが広がり、知識も広がったように思う。

戦争を言葉だけで伝えるのは難しい。言葉は人それぞれの角度で、捉え方が全く異なるからだ。だからこそ、当時の資料を残して後世に伝えていくことが必要だと思う。私自身も、子どもたちに資料を見せながら、戦争の記憶を伝えていきたい。



寄稿

わたなべ かねこ
渡邊 金子さん
新宿区在住
終戦時：10歳

ノーモア戦争

昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発した。当時私は国民学校（現小学校）1年生だった。住まいは本所（^{ほんじょ すみだく}現墨田区）。

当初は“日本は優勢”の報道に大人たちは必勝を信じていたというが、平和は長続きしなかった。町の様子は一変し憲兵が鋭い目つきで^{かつぽ}闊歩していて怖かった。街灯は消えて外に灯りが漏れないように家の電気は黒い布で覆い、夜は真っ暗闇だった。土間には^{ぼうくうごう}防空壕も掘った。鉄製品は全て供出し、逆らえば“非国民”と言われていたとか。

4年生になって夏休み前、^{がくどう そかい}学童疎開の命が下り、私は^{しゅうだん そかい}集団疎開ではなく^{えんこ そかい}縁故疎開を選んだ。私は祖父母の元に移り、友人たちと別れてとても悲しかった。そこは小さな山村で空襲はなかったが、ときどきB29がキーンという音を立てて山間を横切っていて、とても怖かった。

^{ぜいたく}“贅沢は敵”

“欲しがりません 勝つまでは”

こんな言葉が飛び交う中、男性たちは出征して若い女性は町の軍事工場にかり出され、手薄になった村の中で大人も子どもも^{じゅうご}“銃後の守り”と我慢し頑張っていた。主食はフスマや豆カスの中に米粒はわずか、全て品不足の中の生活だった。

昭和20年3月10日の東京大空襲で本所は^{ほんじょ}焼け野原になり、10万人余りの死者が出た。5月25日には^{やま て}山の手、それからあちこちに空襲が続いていた。

8月6日広島、8月9日長崎、恐ろしい原爆投下（白くて大きなキノコ雲と私たちは言っていた）。原爆は今も苦しんでいる方たちが多い。

出征した兵隊さんを送った駅は無言の帰国をされた方たちもいて、また、知人のお姉さんは軍事工場で空爆を受けて亡くなられた。

8月15日、日本は敗戦国になった。戦争は絶対にしてはいけない。平和のありがたさを噛みしめてほしい。ノーモア戦争です。

聞き取り

もり た
森田 ヤスさん
大久保在住
終戦時：7歳

食べるものがなく、自給自足の生活

生家は新潟県村上市で酒造業を営んでいました。戦争で若い蔵人が一人また一人と兵役にとられ、仕事ができなくなっていき、戦争時1軒を残して廃業となりました。村上は田舎だったので、飛行機は飛んできて通り過ぎて、新潟や新発田の方へ行ったようです。空襲警報のサイレンが鳴ると、2歳の子でも頭巾をかぶって逃げました。裏庭に4畳半くらいの防空壕を作り、何度か入った覚えがあります。都会のような苦労はしていませんが、B29が怖くて、サイレンの音がとても嫌でした。

服は国防色、大日本国防婦人会は、着物からモンペを作り、防空頭巾を全員分作りました。食べるものは少なく、この小さな城下町でも、裏庭に畑を作り、野菜を育てたり、鶏を飼って卵を採る

など自給自足でした。とにかく食べるものがなく、ひもじかったと記憶しています。母の実家は、養蚕と農業をやっていたので、今思えば良かったと思います。夜間は家の光が外に漏れないよう、暗幕をはっていました。

終戦のときは、天皇陛下のラジオ放送を客間で皆かしこまって聞きました。やがて日本海から米軍が上陸し、親に女、子どもは外に出るなど言われました。家の蔵は没収され、米軍は資材や食料を運び込みました。米軍の人は、家族写真を見せてくれたり、チョコレートをくれたりしました。そのとき子どもながらに「力の差」を感じ、勝てるわけないと思いました。



一つひとつの食べ物が 大切でありがたいものでした

寄稿

きりゆう きよひと
桐生 清人さん
早稲田鶴巻町在住
終戦時：6歳

私は、昭和14年生まれなので、16年から始まった戦争はあまり記憶にないのですが、空襲警報が鳴って畳を屋根にした防空壕に入った記憶が強く残っています。

昭和18年、家の前にあった映画館が軍需工場になったことに伴い、延焼防止の緩衝地帯を作るため家が壊されることになり、従業員の実家の群馬県高崎市の郊外に引っ越しました。小さな家の屋根裏での生活で、兵隊として中国に出征した父に代わり、母が私と弟や妹を育ててくれました。母は近所の農家の手伝いや着物を売り、食べ物を分けてもらったり、私は小さかったので薪拾いなどを手伝いながら何とか生活することができました。

終戦となった6歳の頃は常にお腹が空き、他人の家の畑のサツマイモやナス等を生で食べ飢えをしのぎました。また、妹は大人がヒマの実を食べるのを見て、生で食べたところ下痢を起こし、結局、大腸カタルとなって4歳で亡くなりました。今なら良い治療を受け、死ぬこともなかったと残念でなりません。

お米が大切な時ですから、食事は朝は麦が半分

入ったご飯、昼はトウモロコシで作ったパンやサツマイモ・じゃが芋等、夕食はすいとん・うどん等でした。トウモロコシのパンと言えば美味しそうに聞こえますが、ボソボソとしたひどいものです。ただ、当時は一つひとつの食べ物が大切でありがたいものでした。

群馬県は養蚕が盛んで近所に桑畑が沢山あり、実が熟すると竹を輪切りにしてその中に入れ棒でつついてジュースにして飲んだり、畦に生えている野蒜を摘んで食べたりと子どもながら飢えをしのいだのも忘れ難い思い出です。

遊び道具で思い出すのは、疎開先の近くにあった戦闘機訓練場の管制塔（訓練で使用していた飛行機は木製でした）を銃撃しに来たグラマン戦闘機の葉きょうです。土でピカピカに磨き腰にぶら下げていました。

戦後80年経ち、日本は平和な時代が続いています。美味しい食べ物でもなんでもいつでもに入ります。しかし、21世紀になっても地球上に戦争があちこち続いており、人間の愚かさに情けなさを覚えます。



私の戦争体験

寄稿

かじわら やすおみ
梶原 安臣さん
愛住町在住
終戦時：3歳

「私の戦争体験」とはいつても、終戦の年4歳だった私にどれほどの記憶があるでしょう。全て母から繰り返し、繰り返し聞かされたことが幼心に断片として残り、成長の過程で反芻して記憶として確定したものだけが、今の私の脳裏から取り出すことができるのだと思います。

「戦争体験」はそれが誰のどのようなものであっても、今日では貴重で大切なものになってきています。平和を守るためにも、多くの犠牲者の霊に報いるためにも、孫子の代まで更にまた時代を超えて、悲惨な事実を語り伝えていかなければならないと思います。なぜなら、人間は過ぎたことを忘れやすい者だし、過ちを繰り返す愚かしい者であるからです。

昭和20年、激化する空襲を避けて、母は兄と私を連れて名古屋から実家のある小牧原に疎開していました。住んでいたのは、鶏小屋だった建物でした。僅かな集落の外は田圃と畑で、近くを農業用水が流れ、脇に土葬の墓地がありました。

そんな田舎にも爆撃はあって、焼夷弾が落ちてきました。母は兄を連れて防空壕代わりの井戸の中に隠れていました。空からきらきら光の粒が落ちてきました。黄燐焼夷弾と呼ばれたこの爆弾は火災を引き起こし、衣服を焦がし、皮膚に付くと

激しく爛れてしまいます。皆防空頭巾を被って、わが子の命を守るのに精一杯でした。その時私は麻疹に罹っていて、家で寝かされていたのですが、一人で這って防空壕まで来たそうです。

何処の家でも、食べ物に不自由していました。母は商売用水飴の最後の1缶を大切に保管して置いて、それで私と兄の命を繋いだと言うことです。飼っていたウサギも食べました。皮は襟巻きや耳当てになりました。鯉幟も解いて布団の生地になりました。何処の子も栄養不足で体中吹き出物だらけでした。薬というものはありません。私の掌も崩れて包帯を解くと骨がむき出しになって見えたそうです。今でも左手の甲に痕跡があります。

名古屋の街が夜間空襲で真っ赤に燃え上がる様子を、幼い記憶に留めていた兄は「名古屋の方角を見ると焼ける炎で真昼のように明るかった」と戦時中の話の度に、いつも言っていました。

父は応召で海軍に入り、暫く広島島の呉に居て巡洋艦の矢矧に乗っていましたが、終戦の時は知多半島の河和と云う所の教育隊にいたので、割方早く復員できたのでした。父の復員を待って、一家は名古屋にまた戻るようになりました。

一面の焼け野原になった名古屋の街にも、夜になるとほの暗い電灯の明かりがぽつん、ぽつんと

とも
燈りました。それは人々の心をほっとさせる平和
の灯火でした。

一つ燈った灯りの下、ちゃぶ台を囲んで僅かな
食べ物を分け合って食べた家族の団欒、今でもあ
れが私にとって大切な、大切な家族の原風景と
なっています。

食べることが全てであった時代、しかもやっと
食べられた時代、あの時代があったからこそ今の
自分がこうしてあるのだということを強く感じま
す。そして今更ながら父母の苦勞に思いを馳せて、
あふれる感謝の気持ちでいっぱいになります。



本記念誌に掲載した寄稿文（  と表示）については、原文尊重を原則としたため、当時使用されていた用語で、現在では不適切と思われるものについても、あえて原文のまま掲載しました。また、一部事実確認ができない事象・内容もそのまま掲載しています。インタビューや聞き取り（  と表示）については、体験者の発言をもとに掲載していますが、編集上、一部、加筆修正した部分があります。

■学術指導／^{くに たけゆき}國 雄行 東京都立大学人文社会学部 教授（日本近代史）

未来に残す
戦争のこと

新宿区平和都市宣言40周年記念誌
つなぐ ～未来に残す戦争のこと～

刊行物作成番号
2025-10-2301

発行年月 令和8年3月
発行 新宿区総務部総務課
〒160-8484 新宿区歌舞伎町一丁目4番1号
電話番号 03-5273-3505

